

第101集

君津市岩出遺跡・岩出城跡

県道長浦・上総線特殊改良第1種工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

君津市岩出遺跡・岩出城跡

県道長浦・上総線特殊改良第1種工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 6

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

県道長浦上総線は、君津市内で小櫃川の左岸に沿って多くの集落の中を通っておりますが、古くからの道で、幅員の狭い箇所が多いため、交通量の増加に伴って、地域住民の日常の交通にも支障をきたすようになりました。このため、千葉県土木部では幅員の拡幅等道路の改良工事を行なつましたが、当遺跡の所在する君津市岩出地区においては旧来の路線を変更し、別ルートにより安全な道路を確保する計画を立てました。

ところが、新たに計画した道路予定地内には遺跡が所在しているため、千葉県教育委員会ではこの所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部をはじめとする関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。

その結果、地形的な制約もあり、ルート変更が困難であったため、予定地内に所在する遺跡について、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。記録保存に当たっては、財團法人千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、昭和57年10月から昭和58年3月まで発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代から歴史時代に至る住居跡等貴重な資料を得ることができました。そして、この度、その成果を報告書「岩出遺跡・岩出城跡」として刊行する運びとなりました。

本書が、学術資料としてはもとより、教育資料としても活用されて、文化財保護思想の普及に貢献できればと、願ってやみません。

終りに、発掘調査から報告書刊行まで種々ご指導をいただいた千葉県教育委員会（文化課）をはじめ千葉県土木部、同君津土木事務所、及び地元関係諸機関各位のご協力にお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心からの謝意を表します。

昭和60年3月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例 言

1. 本書は、千葉県土木部による県道長浦上総線特殊改良第一種工事に伴い事前調査した、君津市岩出遺跡・岩出城跡（遺跡コード225-001）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、千葉県土木部道路建設課の依頼を受け、千葉県教育委員会の要請と指導のもとに、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和57年10月1日から昭和58年3月31日まで実施し、調査部長 白石竹雄、部長補佐 天野努、班長 古内茂の指導のもとに調査研究員 藤崎芳樹、同澤野弘が担当した。
4. 整理作業は、昭和59年10月1日から昭和60年3月31日まで、調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 清藤一順の指導のもとに主任調査研究員 池田大助、(59.12.1~60.3.31)、調査研究員 澤野弘、(59.10.1~60.2.28)が担当した。

本文目次

序文

例言

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の地理的・歴史的環境	1
3. 調査の方法と経過	2
II. 繩文時代の遺構と遺物	12
遺構外出土の繩文土器	18
III. 弥生時代の遺構と遺物	19
遺構外出土の弥生土器	23
IV. 古墳時代～歴史時代の遺構と遺物	24
V. 時代不明の遺構	51
遺構外出土の土器	54
VI. 遺構内および遺構外出土の土製品・石器・鉄製品・銅製品	69
1. 土製品	72
2. 石器	69
3. 鉄製品・銅製品	72
VII. 岩出城跡について	76
VIII. 結語	77

挿 図 目 次

第1図 岩出遺跡の位置と周辺の主な遺跡	3
第2図 岩出遺跡調査範囲	5
第3図 岩出城跡地形図	7
第4図 グリット区割トレンチ設定図	9
第5図 遺構配置図	9
第6図 J-1・3号跡遺構実測図(1/60)	12
第7図 J-2号跡遺構実測図(1/60)	13
第8図 J-1・2号跡遺構出土土器拓影図(1/3)	14
第9図 J-4号(埋甕)出土状況図(1/3)	15
第10図 J-4号跡出土土器実測図(1/2)	15
第11図 遺構外出土縄文土器(その1, 1/3)	16
第12図 遺構外出土縄文土器(その2, 1/3)	17
第13図 遺構外出土縄文土器(その3, 1/3)	18
第14図 Y-1号跡遺構実測図(1/60)	19
第15図 Y-1号跡遺構出土土器実測図(1/4)	20
第16図 Y-2号跡遺構実測図(1/60)	20
第17図 Y-2号跡遺構出土土器実測図(1/4)及び拓影図(1/3)	20
第18図 Y-3号跡遺構実測図(1/60)	22
第19図 Y-3号跡遺構出土土器拓影図(1/3)	22
第20図 遺構外出土弥生土器拓影図(1/3)	23
第21図 001号跡遺構実測図(1/60)	25
第22図 001号跡遺構出土土器実測図(1/4)	25
第23図 002号跡遺構実測図(1/60)	26
第24図 002号跡遺構出土土器実測図(1/4)	26
第25図 003号跡遺構実測図(1/60)	27
第26図 004A・B号跡遺構実測図(1/60)	29
第27図 004B号跡カマド実測図(1/40)	30
第28図 004A・B号跡遺構出土土器実測図(1/4)	30
第29図 004C・D・E号跡遺構実測図(1/60)	31
第30図 004E号跡カマド実測図(1/40)	32

第31図	004 C・E号跡遺構出土土器実測図（1/4）	33
第32図	004 F号跡遺構実測図（1/60）	34
第33図	004 F号跡カマド実測図（1/40）	35
第34図	005 A号跡遺構実測図（1/60）	36
第35図	005 B号跡遺構出土土器実測図（1/4）	36
第36図	005 B号跡遺構実測図（1/60）	38
第37図	005 B号跡遺構出土土器実測図（1/4）	38
第38図	005 C号跡遺構実測図（1/60）	39
第39図	005 C号跡出土土器実測図（1/4）	39
第40図	005 D遺構実測図（1/60）	40
第41図	005 D号跡遺構出土土器実測図（1/4）	41
第42図	005 E・005 F・005 G号跡カマド跡及び付近の小ピット実測図（1/60）	43
第43図	006号跡遺構実測図（1/60）	45
第44図	006号跡カマド実測図（1/40）	45
第45図	007号跡遺構実測図（1/4）	46
第46図	007号跡遺構出土土器実測図（1/4）	47
第47図	008号跡遺構実測図（1/60）	48
第48図	008号跡カマド実測図（1/60）	48
第49図	008号跡遺構出土土器実測図（1/4）	49
第50図	009号跡遺構実測図（1/60）	50
第51図	009号跡遺構出土土器実測図（1/4）	50
第52図	010号跡遺構実測図（1/60）	50
第53図	010号跡カマド実測図（1/40）	50
第54図	010号跡遺構出土土器実測図（1/4）	50
第55図	F-1号跡遺構実測図（1/60）	51
第56図	F-2号跡遺構実測図（1/40）	52
第57図	F-3号跡遺構実測図（1/40）	52
第58図	F-5号跡遺構実測図（1/40）	52
第59図	F-6号跡遺構実測図（1/40）	52
第60図	F-2号跡遺構出土土器実測図（1/4）	53
第61図	F-4号跡遺構実測図（1/40）	54
第62図	遺構外（0D, 1Dグリッド）出土土器実測図（その1, 1/4）	54・55・57
第63図	遺構外（0D, 1Dグリッド）出土土器実測図（その2, 1/4）	58

第64図	遺構外 (0 D, 1 Dグリッド) 出土土器実測図 (その 3, 1/4)	60
第65図	遺構外 (0 D, 1 Dグリッド) 出土土器実測図 (その 4, 1/4)	61
第66図	遺構外 (0 D, 1 Dグリッド) 出土土器実測図 (その 5, 1/4)	65
第67図	遺構外 (0 D, 1 Dグリッド) 出土土器実測図 (その 6, 1/4)	66
第68図	遺構外 (0 D, 1 Dグリッド) 出土土器実測図 (その 7, 1/4)	68
第69図	石器実測図 (その 1, 2/3)	69
第70図	石器実測図 (その 2, 1/3)	70
第71図	石器実測図 (その 3, F-6号跡出土1/4)	71
第72図	土製品実測図 (1/2)	72
第73図	鉄製品・銅製品実測図 (1/2)	74

表 目 次

表-1	Y-1号跡出土遺物一覧	21
表-2	Y-2号跡出土遺物一覧	21
表-3	001号跡出土遺物一覧	26
表-4	002号跡出土遺物一覧	27
表-5	004A・B号跡出土遺物一覧	30
表-6	004C・E号跡出土遺物一覧	33
表-7	005A号跡出土遺物一覧	37
表-8	005B号跡出土遺物一覧	38
表-9	005C号跡出土遺物一覧	39
表-10	005D号跡出土遺物一覧	42
表-11	007号跡出土遺物一覧	47
表-12	008号跡出土遺物一覧	49
表-13	009号跡出土遺物一覧	50
表-14	010号跡出土遺物一覧	50
表-15	F2号跡出土遺物一覧	53
表-16	遺構外 ((0 D, 1 Dグリッド) 出土遺物一覧	55
表-17	石器一覧	73
表-18	土製品一覧	75

図版目次

- 図版1 岩出遺跡及び岩出城跡周辺の航空写真(1/10000) 1971撮影
- 図版2 岩出遺跡遠景及び発掘前状況
- 図版3 001号跡、002号跡、003号跡、004A号跡、004B号跡
- 図版4 004A・B号跡、004C・D・E号跡、Y-1・004F号跡
- 図版5 004F号跡北カマド、004F号跡東カマド、004F東カマド掘上り状況
- 図版6 Y-2号跡、005A号跡、005B号跡、005E・F・G号跡付近発掘状況、005E・F・G号跡付近遺物出土状況
- 図版7 005D号跡遺物出土状況、005D号跡遺物出土状況近景、005C・D・Y-3号跡、005E・F・G号跡全景
- 図版8 F-1号跡、006号跡、遺構全景
- 図版9 008号跡、J-2号跡、008号跡、J-1号跡、J-3号跡、F-6号跡、F-6号跡遺物出土状況、F6号跡遺物近景
- 図版10 J-4号跡(埋甕)出土状況、埋甕
- 図版11 緩斜面部遺物出土状況、緩斜面堀上り状況
- 図版12 緩斜面部遺物出土状況(近景)
- 図版13 岩出城跡遠景(西から)、岩出遺跡城跡遠景(南西から)、岩出城跡(南東から)
- 図版14 岩出城跡(発掘前)、岩出城跡(近景)
(完了)
- 図版15 岩出城跡土塁及び岩出城跡周辺近景
- 図版16 繩文土器(1)、繩文土器(2)
- 図版17 繩文土器(3)、繩文土器(4)、弥生土器
- 図版18 Y-1、Y-2、001・004A・004C、005D・005D・005D、008、009号跡出土遺物
- 図版19 005D・010号跡、0D・1D区出土遺物(1)
- 図版20 0D・1D区出土遺物(2)
- 図版21 0D・1D区出土遺物(3)
- 図版22 0D・1D区出土遺物(4)
- 図版23 0D・1D区出土遺物(5)
- 図版24 0D・1D区出土遺物(6)
- 図版25 0D・1D区出土遺物(7)
- 図版26 0D・1D区出土遺物(8)
- 図版27 0D・1D区出土遺物(9)
Y-1号跡、土鍤
- 図版28 石製品(1)(2)
- 図版29 石製品(3)、鉄製品
- 図版30 鉄鋸、軽石

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

県道長浦上線は、東京湾岸の袖ヶ浦から房総半島内陸部の君津市久留里に至る産業及び生活上の重要な道路である。そして、君津市内において小櫃川の左岸に沿って多くの集落の中を通っている。その集落の一つである岩出地区においても、幅員が狭く、また屈曲しているなどの事情から、交通上ののみならず生活環境にも支障をきたすようになってきた。このため、千葉県土木部は、改良工事を行い旧来の路線を変更する計画を立てた。これに伴い、千葉県教育庁文化課に「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会があった。文化課では、計画路線内の埋蔵文化財包蔵地の所在について確認の現地踏査を実施した。

その結果、計画路線内には埋蔵文化財包蔵地と城跡が所在する事がわかり、岩出遺跡と岩出城跡と名付けられた。関係機関によって協議が重ねられたが、岩出遺跡と岩出城跡については、記録保存の措置を講ずることになり、千葉県文化財センターが発掘調査を担当することになった。

岩出遺跡と岩出城跡の発掘調査は、昭和57年10月1日から58年3月31日まで実施した。

2. 遺跡の地理的・歴史的環境

岩出遺跡は、君津市岩出字念佛塚133番地他に所在する。

清澄山に源を持つ小櫃川は、かなりの蛇行を繰り返しながら上総丘陵を北へ流れてゆき木更津で東京湾に注ぐ。そして、流域の中・上流部における集落の多くは段丘上に位置しており、白井（1976）によると8段丘面認められている。小櫃川の中流部左岸に岩出は位置し、付近では右岸に広い段丘平坦面が存在しているのに対し、左岸ではあまり平坦面は広くなく、丘陵の裾部が川岸近くまでせまっている。岩出の集落は標高40～45mであり、白井（1976）による第6段丘面（平山面・田川面）上にある。そして、第6段丘面（平山面・田川面）は沖積面とされ、「沖積期の河床として形成された」ものとしている。岩出遺跡は第6段丘面（平山面・田川面）の端部、小櫃川岸に位置し、発掘前の標高は39m前後で、岩出の集落の位置より数m低く、また河水面との比高は約20mほどである。これらのことから、岩出遺跡は沖積期の河床面（沖積段丘面）上に位置し、地山は河床の堆積物（砂層など）と考えられる。

岩出遺跡と周辺の遺跡を第1図に示す。付近ではこれまであまり発掘調査は行われていなかつたが、最近君津都市文化財センターは青柳向台遺跡、戸崎城山遺跡などの発掘調査が行なわ

れ報告されている。これによると、青柳向台遺跡では主な遺構として壺棺墓(弥生時代)、住居跡3軒(古墳時代・歴史時代)、掘立柱建物跡3棟・井戸跡(中世)などが検出されている。また、遺物として特に鉛玉と板状の鉛が出土しており、これらを永禄年間の北条・里見氏の攻防に結付けており、本遺跡の中世の遺構は久留里城と関連させている。戸崎城山遺跡では、前方後円墳と円墳・各1基、住居跡5軒(弥生時代後期～古墳時代中期・後期)が検出された。また、周辺には古墳が数多く分布しており、特に戸崎地区を中心に古墳群がいくつか存在している。対岸には県指定史跡の前方後円墳である白山神社裏古墳が当地域の盟主的なものとして存在している。これらの内一部は明治時代などに発掘されたが、詳細はあまり判っていない。中世の遺跡として周辺には久留里城、戸崎城、千本城、真里谷城などがある。久留里城は真里谷城の武田氏によって築かれたが、後に里見氏の本城になったところで、戦国時代に北条氏と幾度か戦いが繰り広げられた。

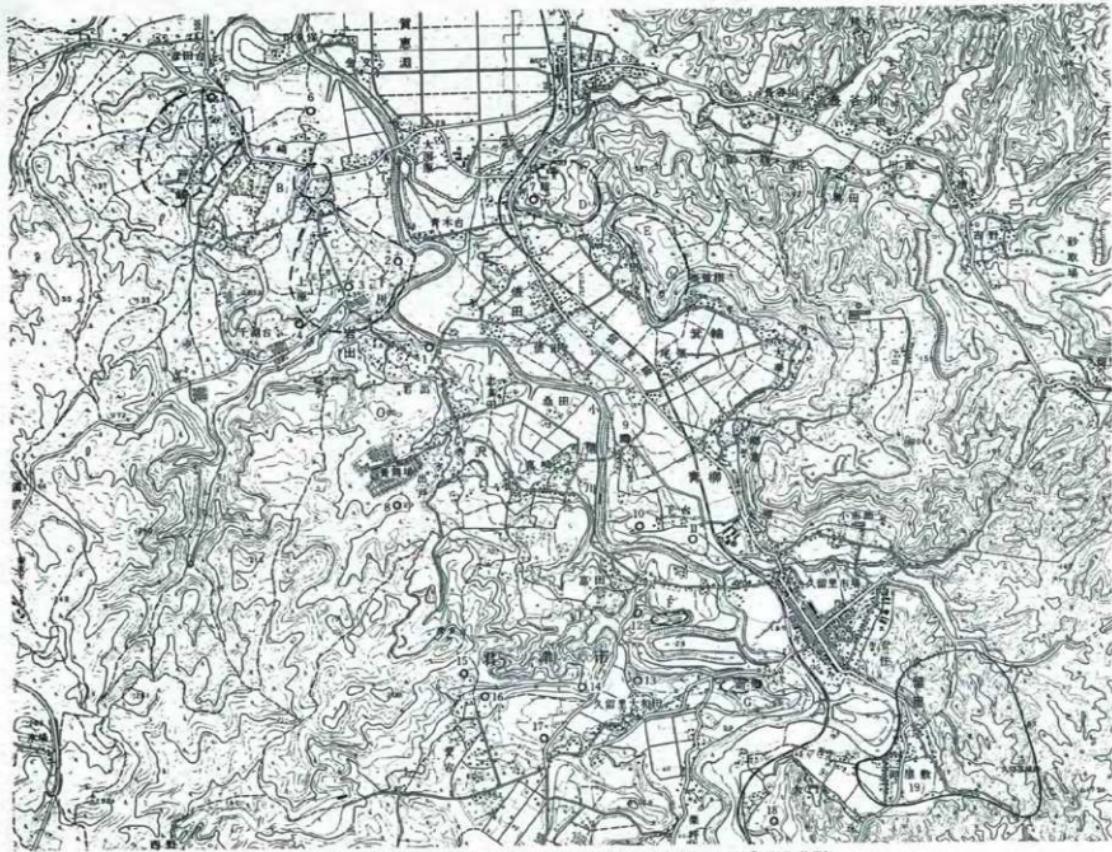
参考文献

- 白井哲之(1976)：小櫃川沿岸の段丘地形形成に関する予察的研究、千葉大学教育学部研究紀要、25巻、1号。
- 君津都市文化財センター(1983)君津地方古墳資料集成(I)、研究紀要、I、
〃(1983)青柳向台遺跡発掘調査報告書。
〃(1983)祝先古墳郡・戸崎城山遺跡発掘調査報告書

3. 調査の方法と経過

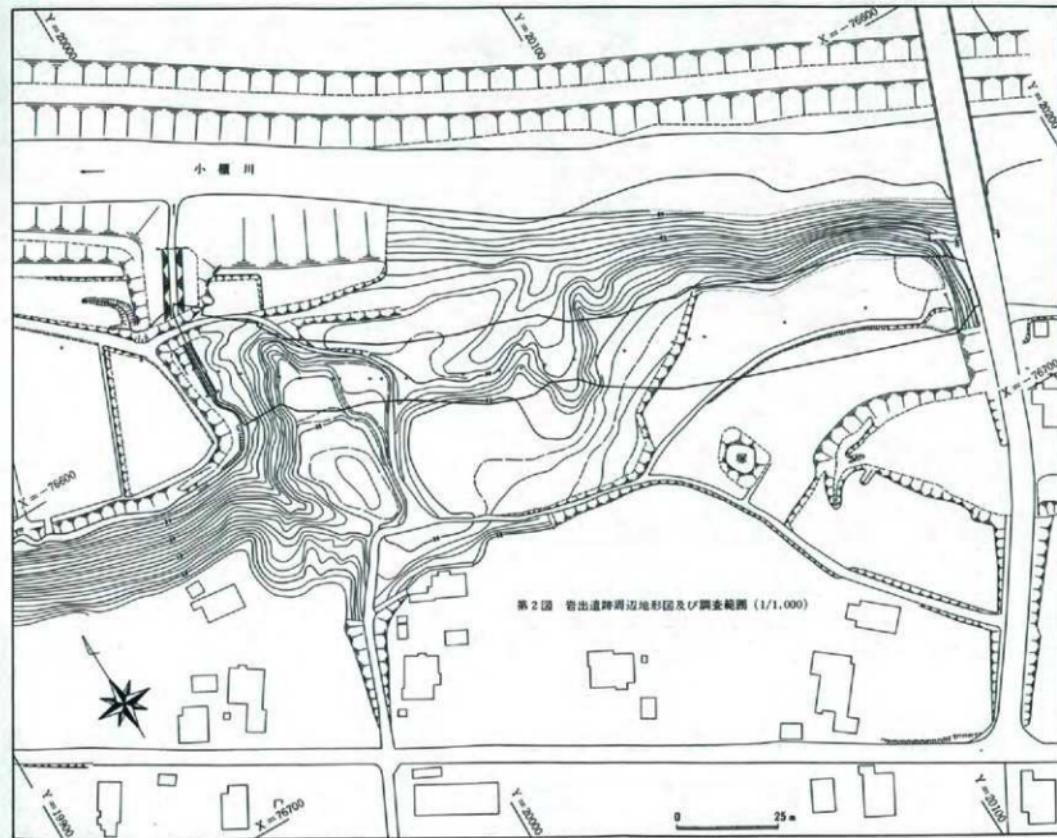
調査区域は道路路線予定地であるため、北西から東南へのびた細長い範囲である。南東側は標高約39mの平坦部であるが、調査区域の中央部に入っている谷を境に北西側はやや狭い平地が谷や道に隔てられて存在する。発掘調査のためのグリッドを設定するにあたり、公共座標に基づくと細長い調査区域のために不都合が多いので、南東側の平坦部において道路路線のセンターラインが直線であるため、この直線部分のセンターラインを一つの軸としてグリッドを設定した(第4図)。

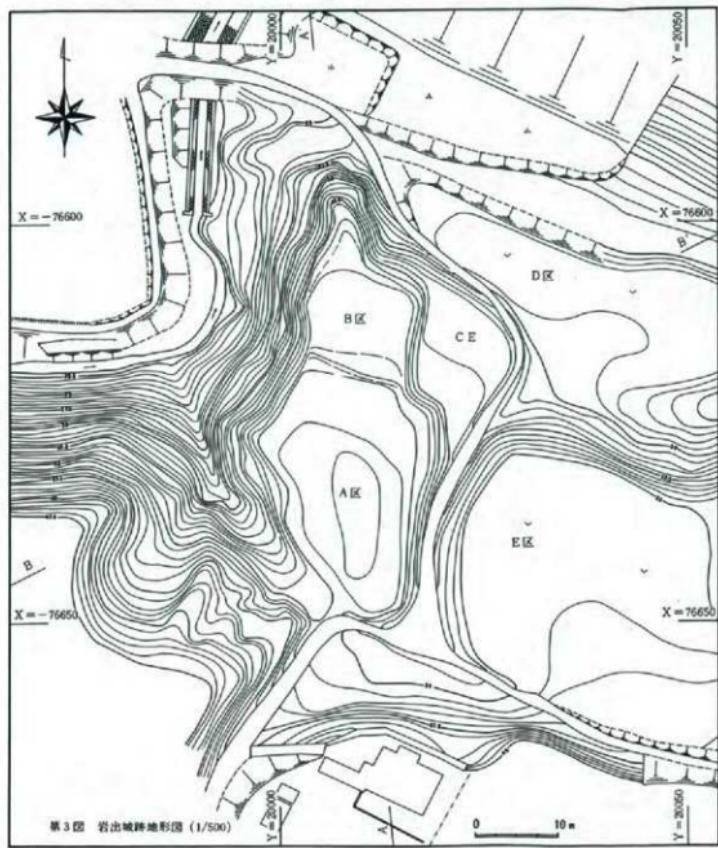
調査はまず確認調査を行った。2m幅のトレンチをグリッド軸に沿って、南東側の平坦部では主として8m間隔で設定したが、北西側は地形に応じて設定した。確認調査のトレンチにより、南東側平坦部では表土は約20cm前後の厚さで畑の耕作土であり、その下位は灰褐色の砂層となり地山と判断された。その砂層の最上部の2～3cmほどは黄褐色ローム質砂であった。そして、トレンチから土器片などの遺物が多く出土し、住居跡等の遺構が多く確認された。また、南東側平坦部の北西端に、調査区域中央部に入ってくる谷に面して緩斜面があり、この緩斜面



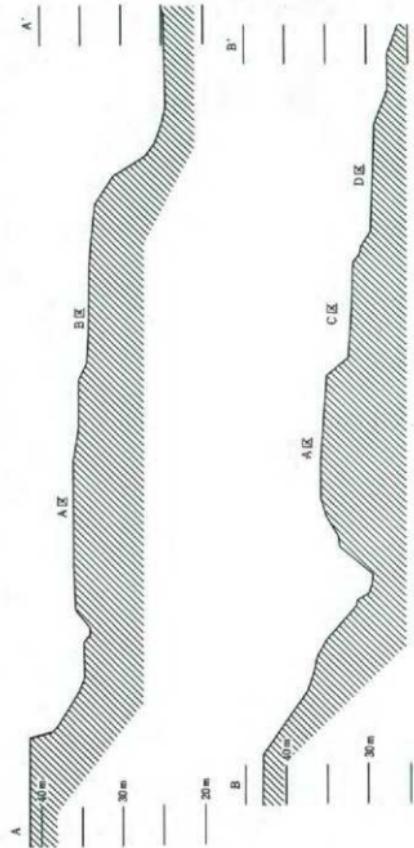
第1図 岩出遺跡の位置と周辺の主な遺跡（国土地理院発行2万5千分の1地形図「久留里」使用）

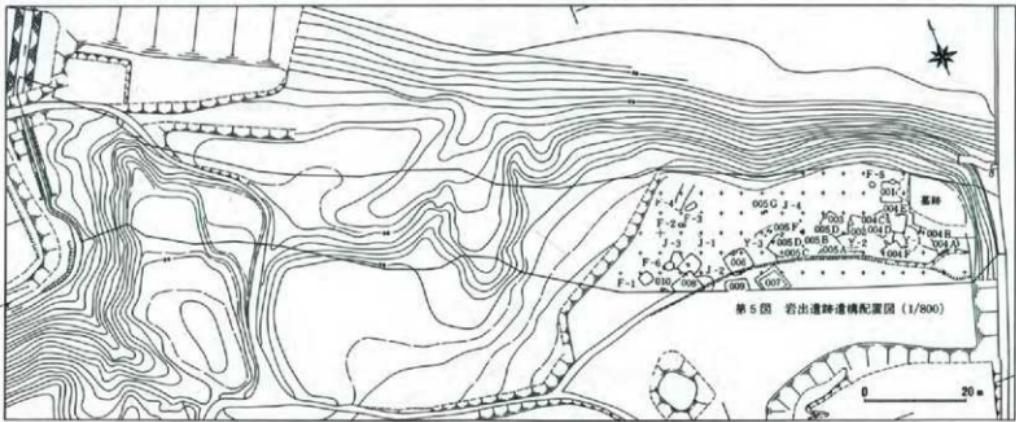
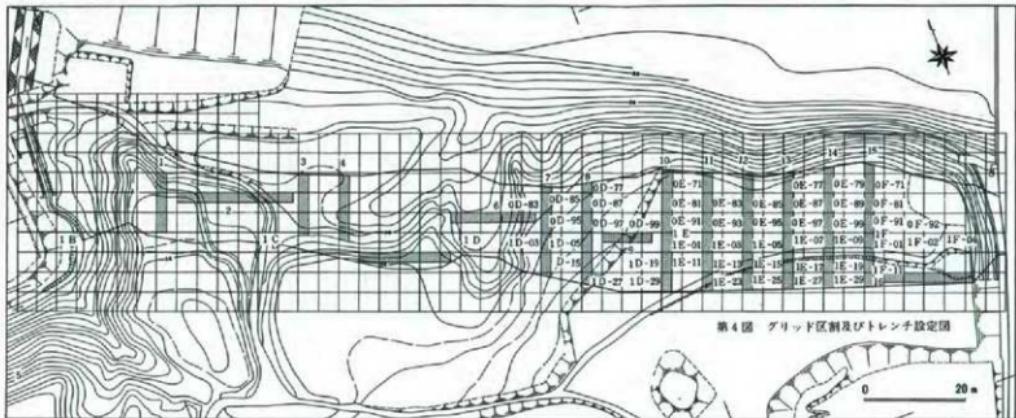
1. 岩出遺跡
 2. 戸崎城跡
 3. 戸崎城山遺跡
 4. 墓の腰遺跡
 5. 城山遺跡
 6. 奠遺跡
 7. 白山神社古墳
 8. 寺沢遺跡
 9. 青柳向台古跡
 10. 青柳西ノ前遺跡
 11. 青柳宮ノ前遺跡
 12. 富田横穴
 13. 上野古遺跡
 14. 向野横穴
 15. 愛宕台遺跡
 16. 愛宕台古跡
 17. 後押遺跡
 18. 大門遺跡
 19. 久留里城跡
- A, 鶴舞古墳群
 B, 鶴舞古墳群
 C, 戸崎古墳群
 D, 鶴ノ内古墳群
 E, 上新田古墳群
 F, 木陰山横穴群
 G, 御陣屋古墳群





第3図 岩出城跡地形図 (1/500)





に設定したトレーナーからかなり多量の土器片が出土した。土層はかなり厚く、数層に分けられるが、全体は斜面の埋積物で自然堆積したものと認められた。一方、北西側区域ではトレーナーから若干の土器片が出土したのみで、遺構は何も検出されなかった。しかし、この区域は文化課が現地調査を行った際に城跡の可能性があると指摘されたところであり、確認調査に先立つて地形測量を実施した。(第2図・第3図)

これらの確認調査の結果に基づいて、本調査を実施した。南東側平坦部ではバックホーを使用して全面に表土を削平した。ただし、南東端に墓地があり、そこには墓穴と改葬のための堀り返しによってかなり擾乱されているために調査を省略した。本調査の結果、縄文時代から歴史時代にかけての住居跡28軒(カマド跡のみのものも含む)、その他の遺構5基が検出された。また、緩斜面部も調査した結果、縄文時代から古墳時代の土器がかなり多量に出土したが遺構は何も検出されず、この区域は斜面の包含層であると判明した。北西側区域では主として城跡としての調査を行った。郭と見なされるA区、B区、及びC区を発掘調査した。しかし、遺構は何も検出されず、中世に關連ある遺物も出土しなかった。

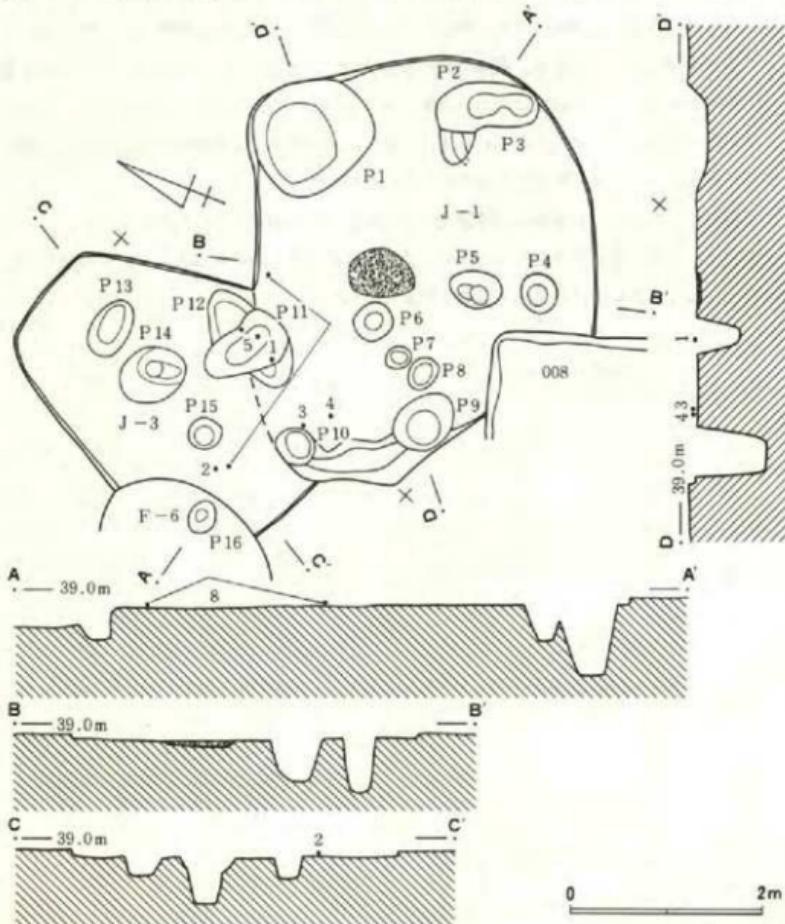
先土器時代の調査は、本遺跡が沖積段丘上に立地するため調査を行わなかった。ただ、トレーナーを設けて上層の確認調査を行った際に、地山の砂層の最上部の黄褐色ローム砂を掘るのを目的に、10cmほど堀り下げたが出土遺物は何もなかった。

II. 繩文時代の遺構と遺物

全体に後世の攪乱により、その全体を知ることの出来るものは少なく、大半は推定するにとどまってしまった。

J-1号跡（第6図・第8図1～5・7・8）

南側の一部は008号住居跡と、北西側ではJ-3号住居跡と重複している。008号住居跡は検出面において明確に本住居跡を切っているため、より新期のものと判断できた。一方、J-3



第6図 J-1・3号跡遺構実測図(1/60)

号住居跡とはともに床面がきわめて浅いため、新旧関係は土層断面からも判定できず、不明である。

平面形は方形に近い不整形を示すものと思われる。規模はたてが4.3m×よこ3.6m程度であろうか。壁は床面が検出面からきわめて浅いため立ち上がりが、いくらか認められているという程度である。

西側の壁に壁溝状の溝がまわるのがみられるが、他の部分には認められない。

床面はやや軟質の貼床である。やや起伏がある。

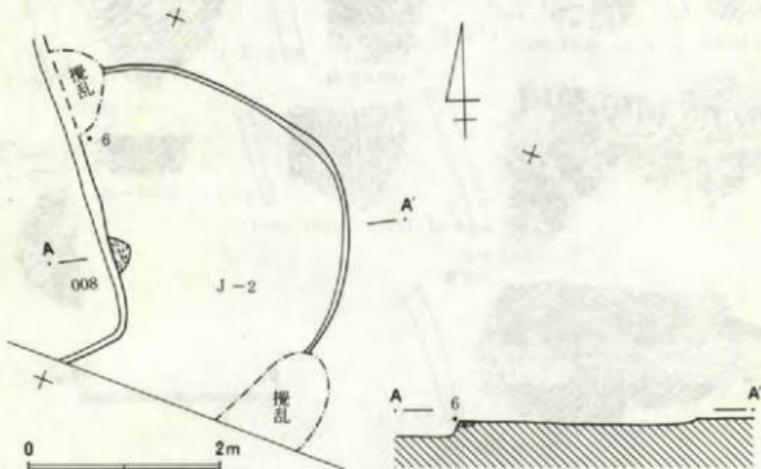
柱穴は床面に不規則なピットが配置され、どれが主柱穴となるのかはっきりとしない。P 1は径1.2mほどで深さ15cmの大形ピットで縄文土器片が多く出土している。他にP 2～P 10のピットがあり、深さはP 2で78cm、P 3で40cm、P 4で57cm、P 5で44cm、P 6で47cm、P 7で34cm、P 8で60cm、P 9で70cm、P 10で36cm。

また、住居跡中央部付近に50cm×70cmの規模の地床炉をもつ。床からは5cmほど掘りくぼめられている。

出土物としては、石器2点、石器未製品1点の他、黒曜石のフレークが多数出土している。他に、縄文前期のループ文や結束をもつ羽状縄文を特徴とする関山期の土器が見られる。(第8図) 遺構の状態が不良のため、総数は少ないが、これらの土器が本住居の時期を確定するものであると思われる。

J-2号跡(第7図・第8図、6)

008A号跡と重複しており、また擾乱が入り込み、プランの一部は調査範囲外にも及ぶ。ま



第7図 J-2号跡遺構実測図(1/60)

た、遺構検出面から床面までがきわめて浅い状態のため、はっきりとした平面形は、不明である。現状から考えて、一辺ないしは径が4m程度のものと思われる。

壁は遺構検出面から床が、ごく浅いため、壁高3cm前後しか認められなかった。

壁溝はみとめられなかった。床面はやや軟弱であり、ほぼ平坦である。

直接関係あると考えられる柱穴は確認されていない。

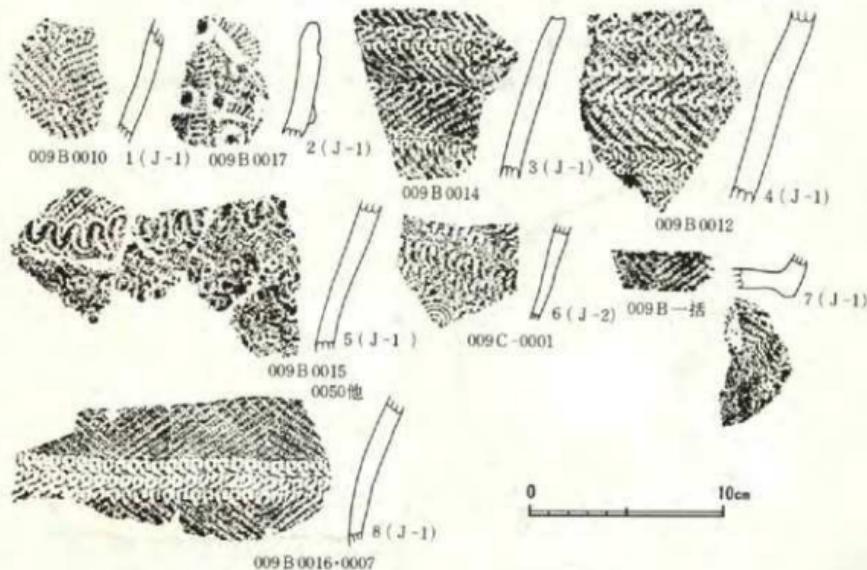
ほぼ中央部に炉をもつ。半分ほど008A号跡に切られて遺存していない。床から少し掘りくぼんでいる地床炉である。

本遺構からは縄文時代前期の土器片が少量出土しただけであり図示し得る確実なものは第8図6、1片のみであり、明確な時期決定の根拠にいささか欠けるが、この時期のものと考えたい。

J-3号跡（第6図）

南東側でJ-1号住居跡と、また南西側でF-6号遺構と重複している。J-1号住居跡とはともに床面が浅くて新旧関係は不明であった。F-6号遺構には後から切られている。

平面形は台形に近い不整形である。長軸、3.5m、短軸、2.5m、堀り込みはJ-1号住居跡



第8図 J-1・2号遺構出土土器拓影図 (1/3)

と同じで、ほとんどないかあるかという程度のものである。

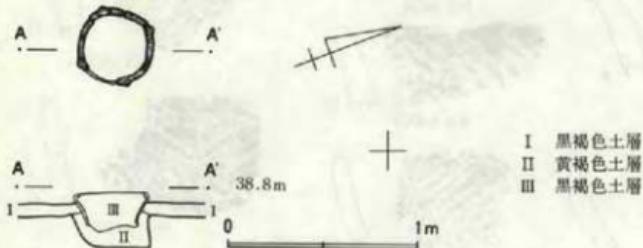
ピットはP11～P16が認められたが不規則に配置している。深さはP11が67cm、P12が34cm、P13が20cm、P14が49cm、P15が22cm、P16が33cm。炉は認められなかった。

出土遺物としては、わずかに残る覆土中より縄文土器片が少数と軽石片2点が出土した。時期はJ-1号住居跡と同様に縄文時代前期と考えられる。

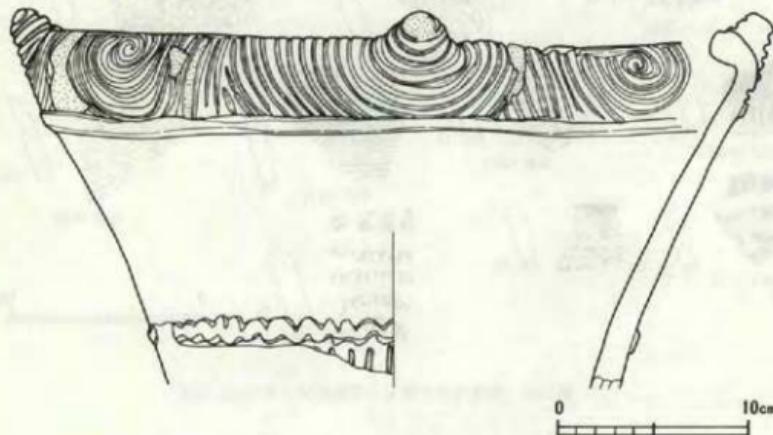
J-4号跡(第9・10図)

O E 96グリッドにおいて埋甕が一基検出された。付近には小ピットや攪乱が多く、また005E号住居跡も複合しているらしいが判然とはしない(第42図)。

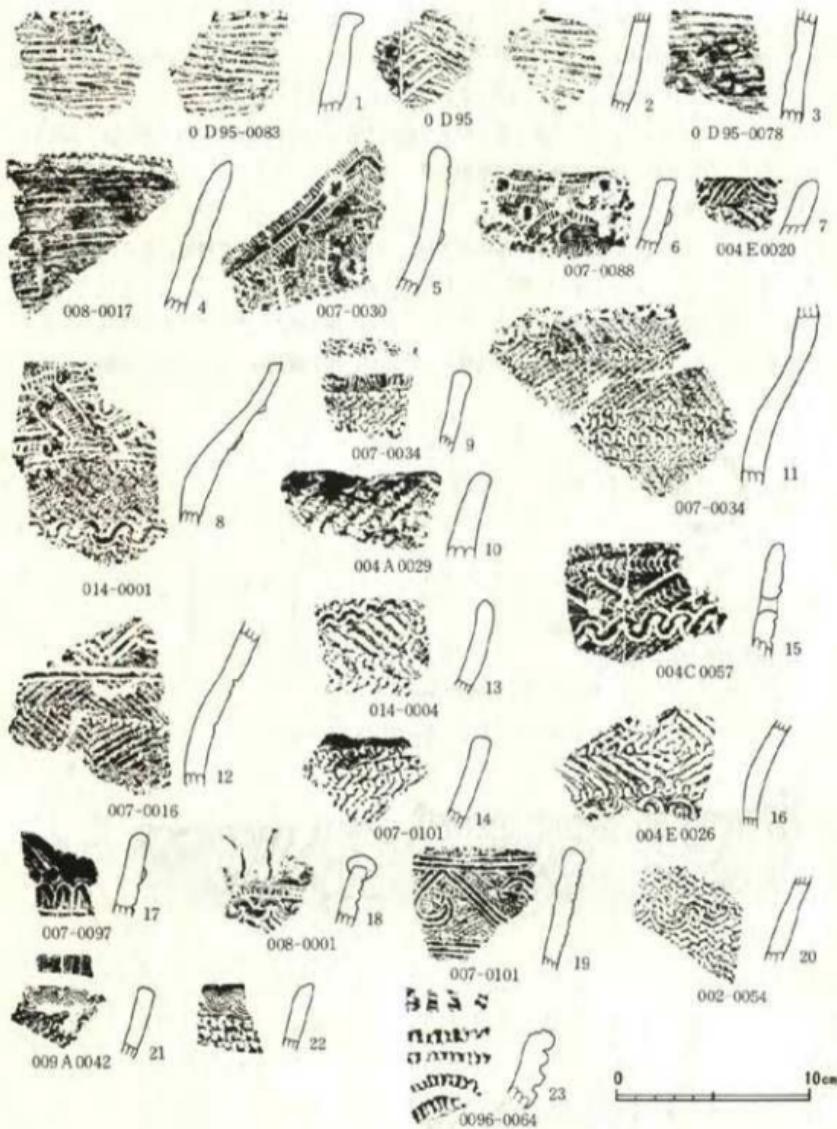
この埋甕は洞の中部から底部にかけて抜いたもので、検出時から欠損しておりこれを小ピットに据えたものである。内部には土が充填していたが、他の遺物は入っているのが認められなかった。



第9図 J-4号跡(埋甕)出土状況図(1/30)



第10図 J-4号跡出土土器実測図



第11図 道横外出土繩文土器拓影図（その1、1/3）



第12図 道構外出土縄文土器拓影図（その2、1/3）

土器は縄文中期の深鉢で四單位の突起がみられる。うず巻沈線が口縁部に施され、胴中部にはり付による隆帯がある他は無文である。当地では出土例の少ない曾利系の土器であろう。

遺構外出土の縄文土器（第11図～13図）

遺跡内の大半が後世の擾乱と削平のため、基本的な位置を保っているものではなく、一括して取り扱う。時代的には縄文時代早期～晩期にいたるまでその種類は豊かである。

縄文時代早期（第11図1～3）

条痕文系、茅山期のものである。全体でこの3片のみの出土であり、目立つものはない。

縄文時代前期（第11図、4～22）

縄文時代前期の一群である。関山期に相当するものである。細片まで含めるとその比率はかなり高いものがある。わりと縄文のあらく多少雑な感じのものもまざる気がする。刺突、ループ文、コンパス文、結節などこの時期の基本的な構成がみられる。時期的には巾の広い時間があると考えられるものが多い。

縄文時代中期（第11・12図、23～39）

中期初頭から後半期にかけて少量ながら出土している。とりたてて注目すべき存在、比重のある時期等はみあたらない。

33、34などは東北的な感じのするものである。交流圈を考える上でおもしろいものとなろうか。

縄文時代後期・晩期（第12図、42～44・第13図、45～46）

40～44は縄文時代後期の粗製土器の一部である。波形に条線が施される。44は口縁内側に2条の沈線がみられる。時期的な特色である。

44～46は縄文土器終末期に近いものである。45は浮線文、内面には3条の沈線がみられる。46は太沈線で施し、細い縄文が密集して施される。



第13図 遺構外出土縄文土器拓影図（その3、1/3）

III. 弥生時代の遺構と遺物

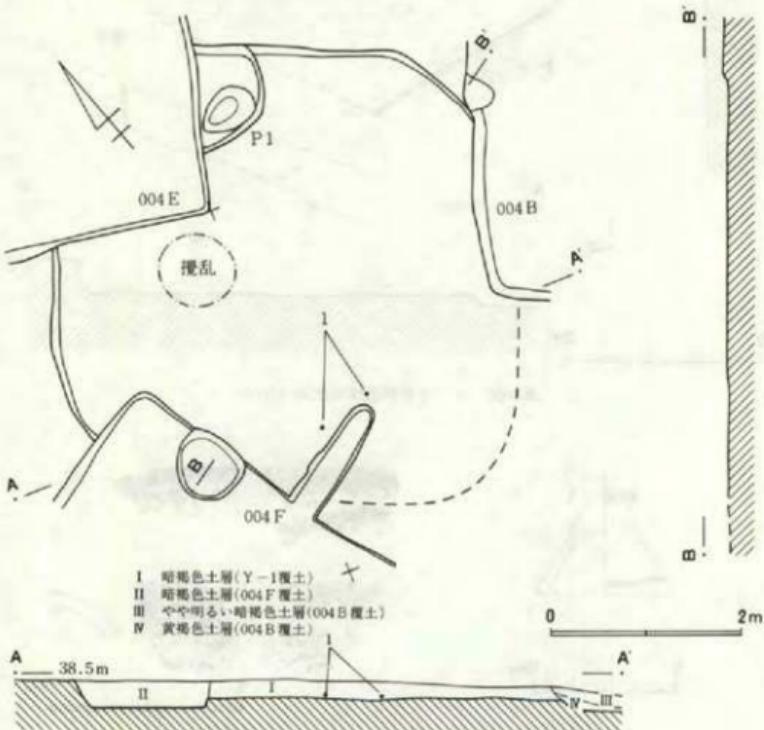
Y-1号跡（第14図・第15図）

本遺構は北側で004E号跡と、東側で004B号跡と、さらに西側で004F号跡と重複しており土層断面からみてY-1号跡はこれらよりも最も古期のものである。

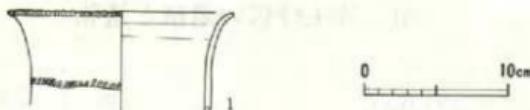
遺構検出面から床面までは、非常に浅い。検出面から残ることろで5~10cmほどの堀込みである。南側は削平されており床面がすでに露出している部分もみられた。南側の壁の位置は床面の範囲から推定したものである。平面形は橢丸方形と推定される。規模は4.6m×5.0mといったところにならうか。

床面は非常に堅緻な貼床であり、多少起伏のある床面である。

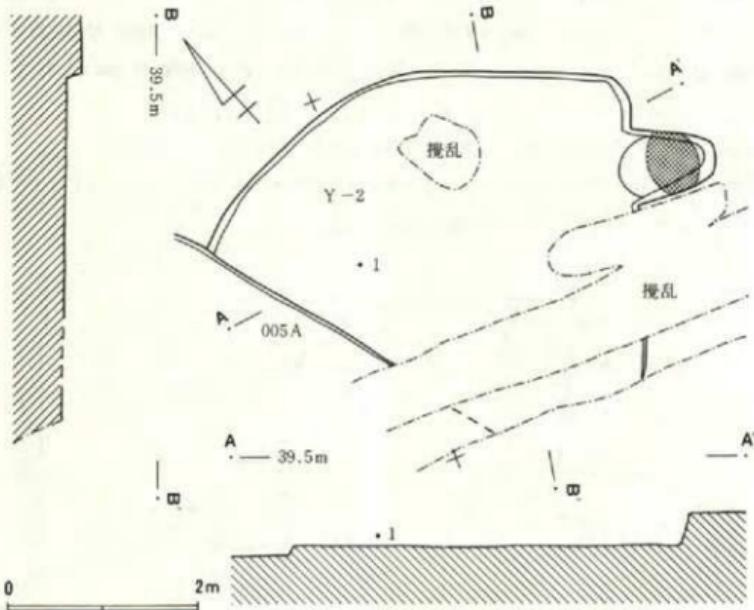
北側の壁際に径1mほどのビットがあり、その中に径60cm×40cm、深さ40cmの小ビットがみられた。その他に柱穴などのビットは認められなかった。



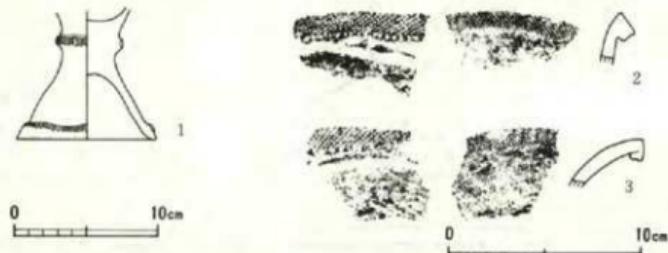
第14図 Y-1号跡遺構実測図(1/60)



第15図 Y-1号跡遺構出土土器実測図 (1/4)



第16図 Y-2号跡遺構実測図 (1/60)



第17図 Y-2号跡遺構出土土器実測図 (1/4) および拓影図 (1/3)

表-1 Y-1号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	口縁 $\frac{3}{4}$	15.8	X	X	赤褐色、砂粒多く含む。焼成普通。二次焼成か外面ハクリあり。胎土中に小砂粒等みられる。内面はヘラ先によるミガキ加える。外面はナデか、器面荒れ気味でよくわからない。	

表-2 Y-2出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	器台	器台部のみ残る	X	X	9.6	内外共にヘラミガキ。胎土中混入物少ない。焼成良、器肉は厚くボテッとした感じ。	

炉は検出されていない。しかし、004B・004E・004F号跡に重複しているところ、または擾乱のところに存在したのかもしれない。

全体のわかる土器は第15図に示した1点のみである。弥生時代後期に位置できよう。

Y-2号跡 (第16図・第17図)

西側から005A号跡に切られており、また南側は溝状の擾乱が入り、発掘以前に削平がなされていて遺存は極めて悪い。床は005A号跡のプラン内にY-2号住居跡の床が遺存していないことからY-2号住居跡が古期のものと判断した。

平面形は遺存している壁から推定すると長円形に近い不整形となろうか。規模は径が5m前後のものと推定される。

壁はわずかに外傾して立ち上がる。堀り込みは全体に浅く10~15cmほどである。

床は中央部が堅緻な貼床であり、わずかに起伏がある。柱穴は検出されていない。

炉は南東側の壁から外へ張り出して炉がある。焼土が張り出し部の中途部に薄く堆積していた。当初カマドとも考えられたが、粘土などのカマド構築材がないことや住居の時期などから炉と判断した。

出土遺物としては銅鏡が覆土中から出土している。(第73図6)

Y-3号跡 (第18図)

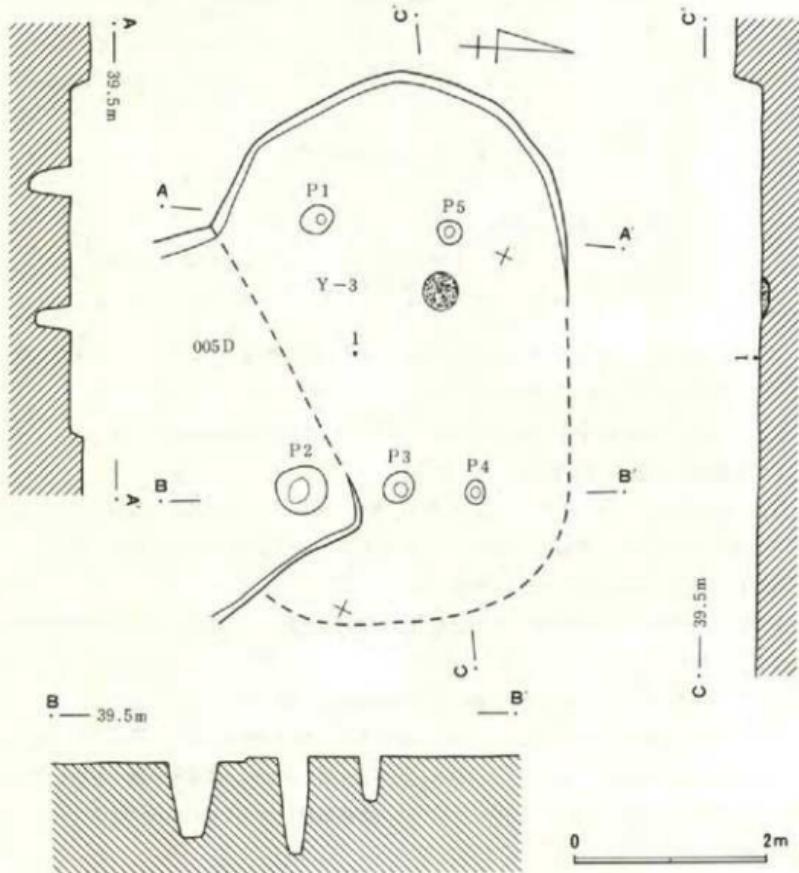
南側で005D号住居跡と重複している。また、005F号住居跡、005G号住居跡とも重複していると思われるが(第42図)。ともにカマドしか遺存しておらず、壁や床は確認できないため、どの程度重複しているか不明である。新旧関係はカマドをもつ005D、005F、005Gの方がY-3住居跡よりも新期のものと判断される。

このように本住居跡は他の住居跡との重複が多く、壁は西側の1/3ほどしか確認できず、中央

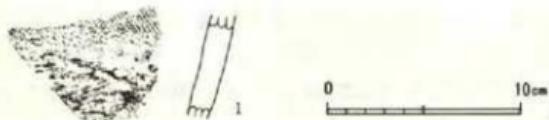
部から東側にかけては床面の範囲などから推定した。

平面形は隅丸方形に近いと推定される。規模は推定で $5.7m \times 3.8m$ 。

西側1/3ほど遺存している壁はやや外傾して立ち上る。



第18図 Y-3号跡遺構実測図(1/60)



第19図 Y-3号跡遺構出土土器拓影図(1/3)

壁溝はみとめられなかった。

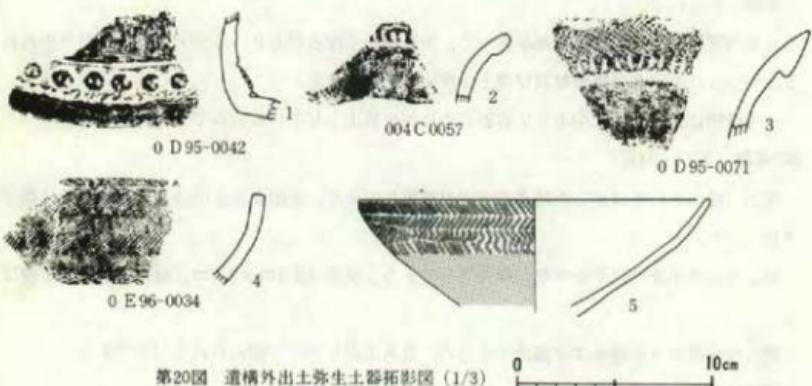
床面は柱穴の間の一部ではやや堅緻なところも見られるが大半の部分は軟質な床面である。

柱穴と推定されるものは5本を検出。床面からの深さはP1で44cm, P2で77cm, P3で100cm, P4で45cm, P5で37cm。

炉は中心部より少し北西部の柱穴に寄った位置から検出された。中央部で8cmほど堀りくぼめた地床炉である。出土遺物は少なく第19図に示したもののが唯一、時期を考えることの出来るものである。

遺構外出土の弥生土器（第20図）

住居以外から多少、弥生時代の土器が検出されているが、ほとんどは擾乱により細片となつておらず、時期、特色をあらわすものは極めて少ない。第20図に示したものはそれらのなかでも、いくらかわかるものであり、弥生時代後期に属するものである。



IV. 古墳時代～歴史時代の遺構と遺物

001号跡（第21・22図）

表土（耕作土）を除去した時点で床面はすでに削平されており、掘り方のみ調査された。西側には攢乱（墓穴で調査直前に他へ移転）が入り、南側にもイモ穴状の攢乱が接している。

平面形は方形である。規模は4.1m×4.3m。他の遺構との重複はない。

床面より上位の壁は不明。堀り方の壁はゆるく外へ湾曲して立ち上がる。

壁溝も不明であり、堀り方においても認められない。

床面は地表から浅いため畑の耕作によって遺存していない。エレベーション図は堀り方を示す。

柱穴は、そのプランに整合的に柱穴が4本みられる。うち2本には（P2, P4）掘りぬいた痕跡がみられる。

北側の壁の中央に張り出し部があって、少し掘りくぼみがあり、カマドが存在したと思われる。ただし、カマドの構築材及び焼土は検出されなかった。

出土遺物は堀り方覆土中より土師器の小片が少数出土しているのみである。

002号跡（第23・24図）

表土（耕作土）をはがした時点で床面が露出しており、床面より上位の大部分はすでに削平されていた。

堀り方から平面形はやや不整の隅丸方形である。規模は3.1m×3.7m。他の遺構との重複はない。

壁は検出面から床面がすぐ露出するため、立ち上がりが少し認められるだけである。

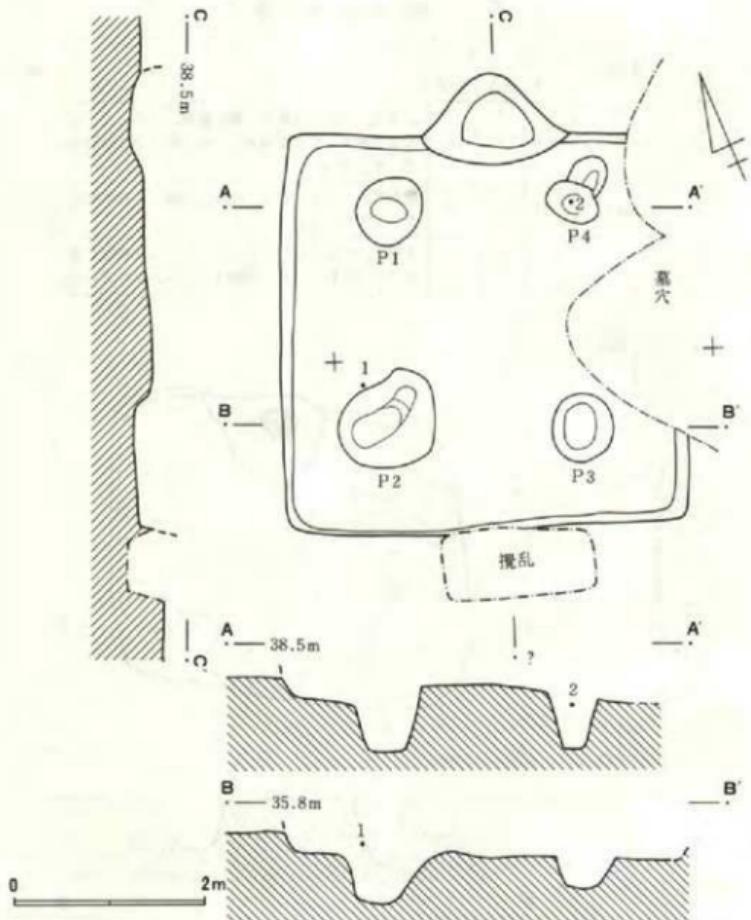
壁溝は確認されていない。

床面は柱穴にかこまれた中央部の一部にやや堅緻な貼床の床面が認められた。他はやや軟質であり、一部では削平されて遺存していない。やや起伏のある床面である。検出面がすぐ床面であるため遺存状態は極めて不良であった。

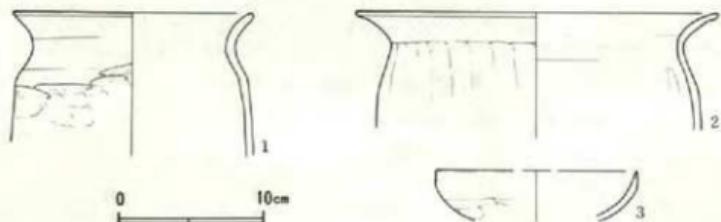
柱穴は6本確認されている。（P2, P3, P4, P6, P7, P8）

カマドの対面の壁ぎわにビット（P5）があり、入口に関係するものと思われる。床面からの深さ30cm 直径55～70cm、また南西側の壁ぎわにもビット（P1）がある。深さ35cm 径60cmを計る。

北西側の壁ぎわにくぼみがあって、若干の焼土があり、またカマド構築材と思われる砂質粘土も少量認められ、この位置にカマドが存在していたと思われる。



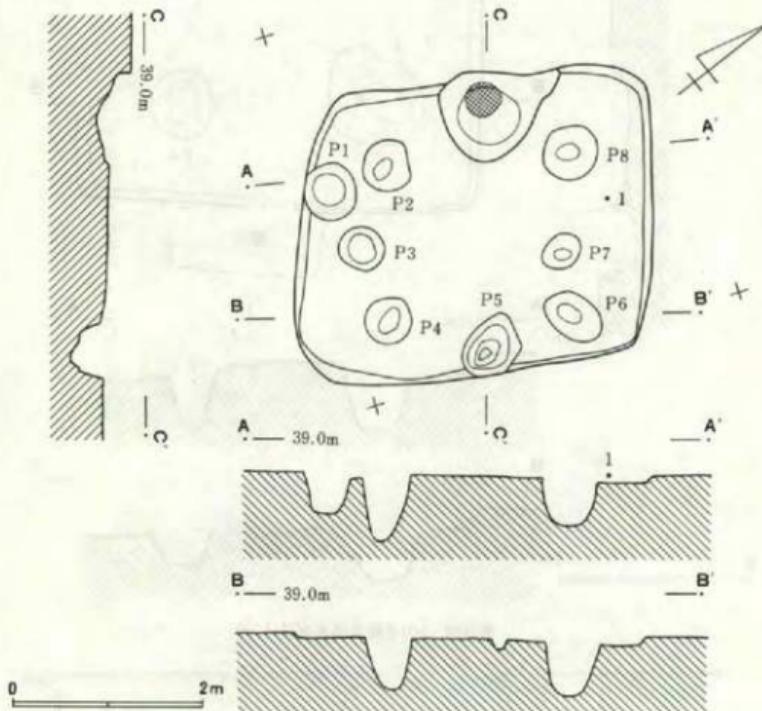
第21図 001号跡道構実測図(1/60)



第22図 001号跡道構出土土器実測図(1/4)

表-3 001号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	甕	口縁 $\frac{1}{4}$	16.6	×	×	赤褐色。外面ヘラ削り。雑な整形、それに比べ内面は丁寧にミガキを加えている。胎土中には砂粒等、多く含む。	
2	甕	口縁 $\frac{1}{3}$	24	×	×	暗茶褐色、砂粒等含む、焼成は普通。二次焼成のためくすんだ色。	
3	壺	$\frac{2}{3}$	13.8	3.4	×	赤褐色。内面かなりくすんでいる。二次焼成か器面(外)荒れている。内面はよくみがかれている。	



第23図 002号跡遺構実測図(1/60)



第24図 002号跡遺構出土土器実測図(1/4)

表-4 002号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	甕	口縁	15.6	X	X	赤褐色、胎土中に砂粒含み砂っぽい。焼成はやや甘い。外表面はヘラ削りの上ナデが加えられる。内面もあまりよく磨かれていない。	

003号跡（第25図）

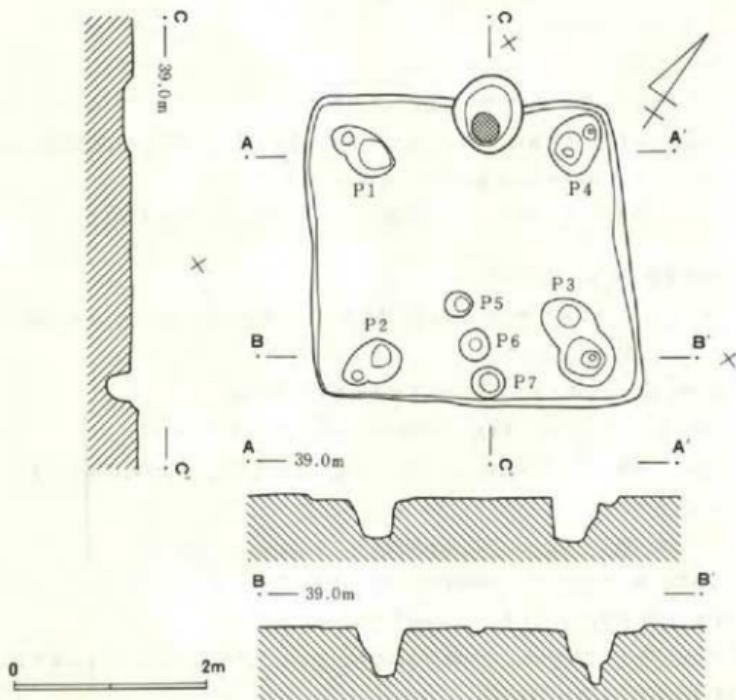
表土（耕作土）をはがした時点で、一部に床面が残っているだけで、他の大部分の床面は削平されて遺存していなかった。

掘り方の平面形はやや不整の方形。規模は3.2m×3.3m。他の遺構との重複はない。

壁は掘り方の立ち上がりしか遺存していない。かなり外へ傾いて立ち上がる。

壁溝は確認されていない。

床面は一部が遺存している。床は貼床で、やや堅緻である。



第25図 003号跡遺構実測図(1/60)

主柱穴と思われるピット4本を検出(P1~P4)。すべてに掘り抜いた跡がある。またカマドと対面してピットが3基(P3, P4, P5)ならんでいる。最も壁に近いP5は出入口に関するピットと考えられるが、残りの2基は不明。

北西側の壁に張り出してくぼみがあり、焼土が検出され、この位置にカマドが存在していたものと思われる。焼土は火床と考えられる。ただしカマドの構築材は検出されなかった。

遺物は土器器の小片が数点出土したのみで、図示できるものはなかった。

時期は住居の形態から隣接する002号跡と同じと考えられる。

004A号跡 (第26・28図)

北東側に墓跡区域があり、ここには近世後期頃からの墓があり、調査直前に他所へ移したもののはほとんど墓穴とその改葬のための掘り返しにより擾乱されているため調査を省略した。そのため北東側1/4ほどは不明である。また南西側は削平されており壁の位置は、推定である。

平面形は遺存している壁から判断して方形になるものと思われる。規模は4.2m×4.6m。壁高は確認面より床面まで深いところで、30cmほどである。

壁溝は認められなかった。

床面は堅緻な貼床で、平坦な床である。

柱穴は検出されず、他のピットも認められなかった。

北西側で004B号跡と重複しているが、セクション図の土層で判断すると004A号跡が004B号跡を切ることから004A号跡が新しいものと考えられる。

カマドは調査区内より発見されず、北壁にカマドをもつている可能性が残る。

004B号跡 (第26・27・28図)

北東側1/4ほどは墓跡区域のため004A号跡で述べた理由で調査を省略した。また南側は削平されており壁の位置は推定である。

南東側は004A号跡とまた西側で004F号跡と重複している。

土層断面から判断すると004A号住居跡よりは古く、Y-1号跡より新しい。

平面形は遺存している一部立ち上がりから推定して方形と思われる。規模は1辺4m程度のものとなろうか。

壁高は検出面から深いところで25cm程残るところもある。北西側の壁しか遺存していないが、少し外傾気味に立ち上がる。壁溝はみとめられなかった。

床面はやや軟質の貼床であるが、ほぼ平坦な床面である。

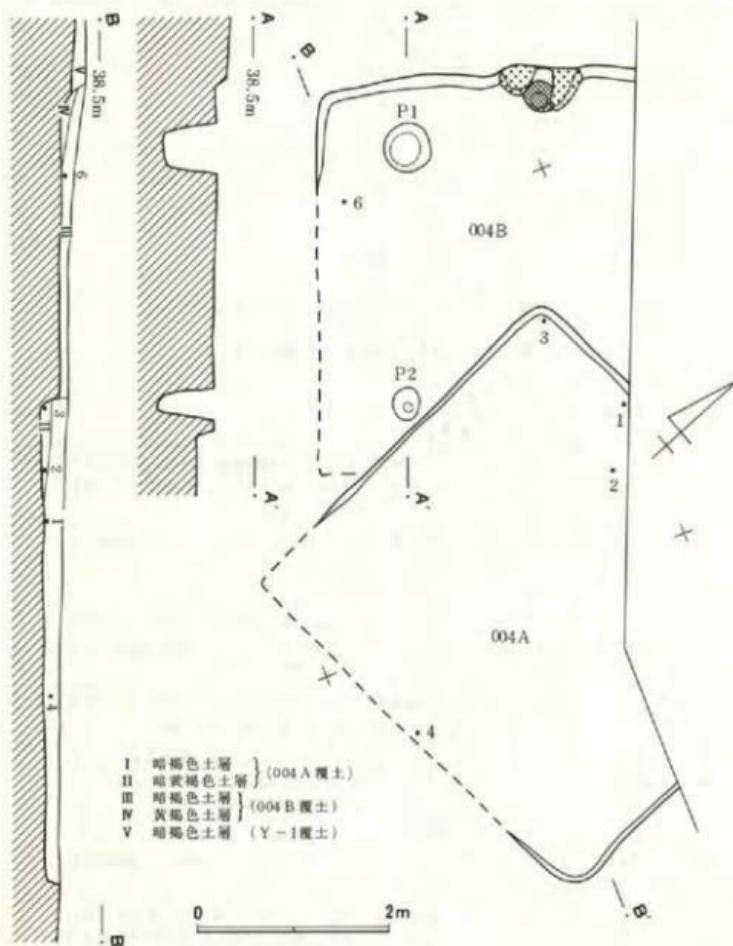
柱穴は主柱穴と思われる2本が認められたが、他にもう2本北東側にあると推定され、4本の主柱穴をもつものと思われる。

カマドは北西壁に位置する。

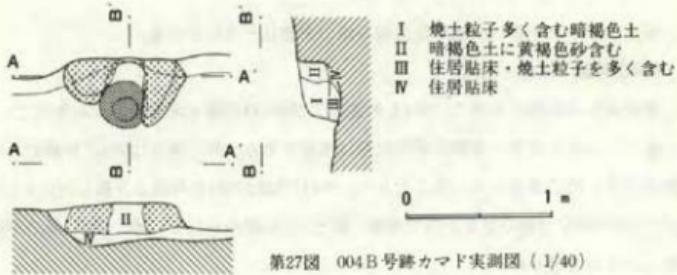
覆土中からは土器（一括）片の他石器の未製品出土している。

004C号跡（第29・31図）

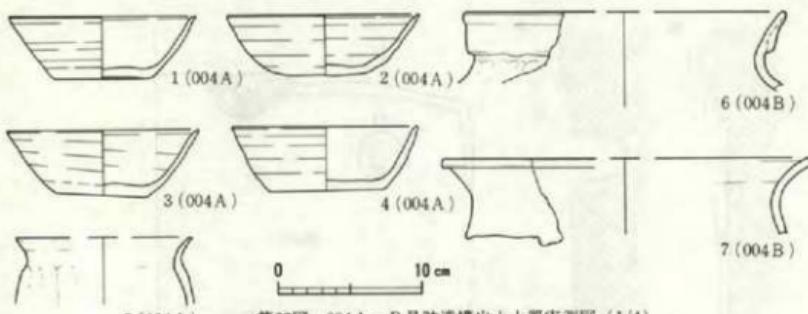
南東側から南側にかけて、004E号跡および004D号跡と床面のレベルを同じくして重複している。そのため南東～南側の壁の位置は推定である。新旧関係は004C号跡のカマドが004E号跡のプラン内で遺存していることから、004C号跡が004E号跡より新しい。また、004D号跡のカマドは004C号跡のプラン内で痕跡（焼土）しか認められないめ、004C号跡が004D号跡より新しいものと思われる。



第26図 004A・B号跡遺構実測図(1/60)



第27図 004B号跡カマド実測図 (1/40)



第28図 004A・B号跡遺構出土土器実測図 (1/4)

表-5 004A・B号跡出土遺物一覧

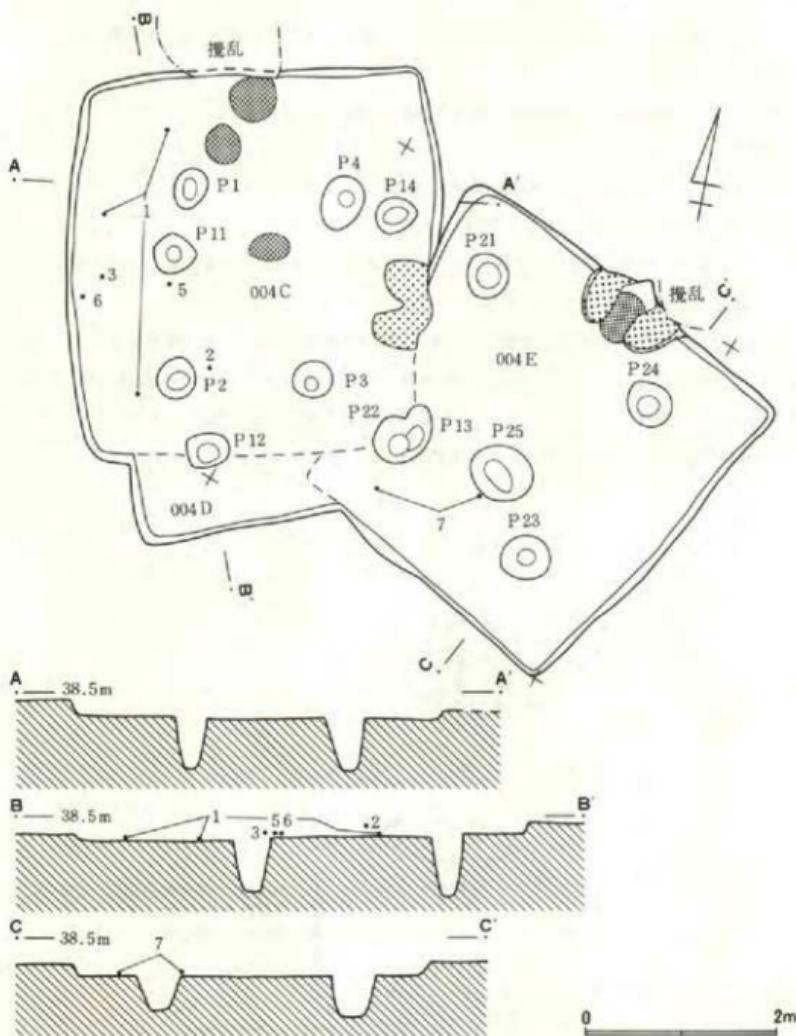
番号	器種	遺存度	法量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	坏	3/4	12.8	4.3	6.7	赤褐色。胎土中に白色砂粒少々含む。焼成はやや甘そう。底部は回転ヘラ切り。胎部はロクロ水びき。口唇内側ナデを施す。	
2	坏	ほぼ完形	13.0	4.2	5.7	黄褐色。砂っぽい土。焼成甘く、全面に磨滅している。底部は回転糸切り、最後に、ヘラナデして整形している。	
3	坏	ほぼ完形	12.6	4.4	6.3	ロクロ。底部は回転ヘラ切り。口縁部ヨコナデ加える。ヘラで面取り、胎土中に微細な砂粒が入る。焼成良。口唇内側ナデを施す。	
4	坏	3/4	12.8	4.2	8.0	赤褐色。胎土中に混入物みなく、焼成も良。底部回転糸切り、切り離し後、ヘラで整形。	
5	甕	口縁のみ3/7	12.0	×	×	ヨコナデ。タテベラケズリ。内面は極めていいねいにミガキ加える。胎土はあまり良くはない。金露母。白色の微細砂粒等みられる。	
6	甕	口縁3/4	22.0	×	×	外ヘラケズリ。口縁おり返し部はていねいなヨコナデ。スヌ付着。胎土中に小砂粒含む。焼成良存。内面はよくナデされている。	
7	甕	1/8	25.2	×	×	赤褐色。焼成良。内面しゃ拂による煮こぼれ状のはくらくあり、外面二次焼成によるひびわれあり。胎土良。	

平面プランはやや胴張の方形と推定される。規模は1辺が約4mほどである。

壁高は検出面から深いところで15cmほどである。壁溝は認められていない。

床面はやや軟質の貼床であり多少起伏のある床面であった。

主柱穴4本（P1～P4）が認められるがプランに対して不整的に配置されている。



第29図 004 C・D・E号跡遺構実測図(1/60)

カマドが東壁に位置するが、検出面から床面まで浅いため、カマドの基底部しか遺存していない。しかし粘土を多量に使用して構築していたと思われる。

004D号跡（第29図）

プランの大部分が004C号跡および004E号跡と重複しているため、平面形を確定し得ない。ただし主柱穴4本の配列と1部遺存している壁から推定して、平面形はほぼ方形に近いものと思われる。規模ははっきりとしないが、主柱穴の位置から考えて一辺が3.5～4m程になるものと考えられる。

遺存している壁の壁高は遺構検出面より12cmほど残るところもある。

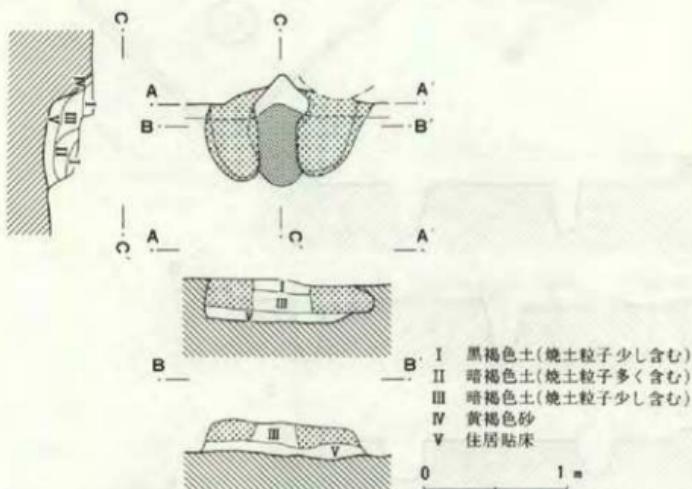
壁溝はみとめられなかった。

一部遺存している床面はやや軟質の貼床である。

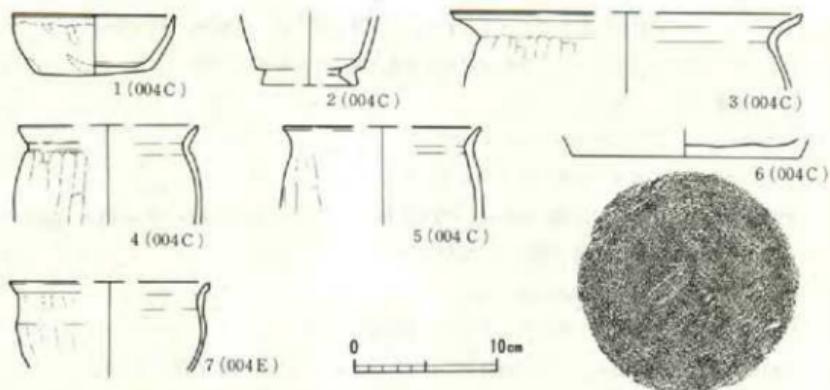
主柱穴が4本認められた（P11～P14）。方形に配列されている。

カマドの痕跡が北側の004C号住居跡のプラン内に認められる。火床部の焼土とその脇にわずかに白色粘土が残っているだけである。

004C号跡および004E号跡が重複している。004C号跡のプラン内に004D号跡のカマドの痕跡（焼土）しか認められないことから、004D号跡が004C号跡より古く、004D号跡の柱穴と004E号跡の柱穴が重複するところにおいて004E号跡の柱穴が後から掘りこまれていることにより、004D号跡が004E号跡より古いものと推定した。



第30図 004E号跡カマド実測図（1/40）



第31図 004C・E号跡遺構出土土器実測図 (1/4)

表-6 004C・E号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	坏	2/3	11.3	4.1	8.2	赤褐色、焼成やや不良、しん黒く残る。胎土中に砂粒多く含む。外面ヘラ削り後ナデ加える。内面はていねいにナデ加えられる。	
2	鉢	1/4	X	X	6.5	茶褐色、砂粒含む、焼成甘い、混入品か磨滅多し。	
3	甕	口縁1/6	24.4	X	X	赤褐色、砂粒多し、二次焼成により器面荒れている。外面ヘラ削り後、全体にヨコナデていねい。	
4	甕	口縁1/5	12.4	X	X	暗茶褐色、胎土中に砂粒多く含む、焼成やや良、二次焼成によるスス付着あり、口唇部はうすく、ていねいに作る。	
5	甕	口縁1/6	14.8	X	X	暗茶褐色、砂粒含む、金雲母含み織文土器みたいな土、二次焼成によりくすんでいる。	
6	甕	底部のみ	X	X	15.7	黒褐色、胎土中に砂、石英石粒含む、焼はかたい。「及」?	
7	甕	1/8	13.8	X	X	赤褐色、小砂粒等多く含み器面は荒れ氣味。ただヘラ削りがていねいで削り痕があり目立たない。	

004E号跡 (第29・30・31図)

南西側で004C号跡および004D号跡と床面のレベルをほぼ同じくして重複しているため、南西側の壁は推定であるが、平面形は方形である。規模は1辺が3.8~4 mほどである。

壁高は検出面から深いところで15cmほどである。

主柱穴と思われるピットが4基認められる (P21~P24)。

壁溝は認められない。

床面はやや軟質の貼床で、やや起伏がある床である。

中央部より少し南側に位置してピット（P25）が1本みられる。径60cm、深さ40cm。
カマドは北壁に位置している。袖部などが他の住居跡より比較的よく遺存していた。

004F号跡（第32・33図）

南西側½ほどがすでに削平されてしまっている。

平面形は方形。規模は1辺4mほどである。

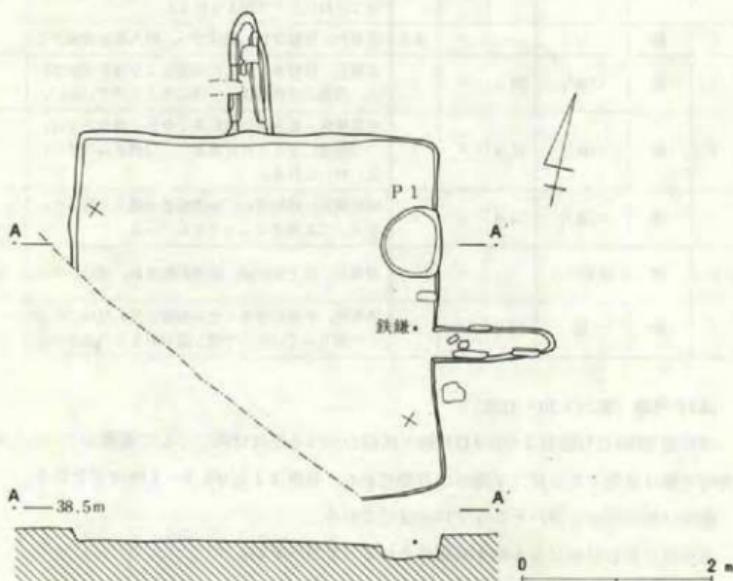
遺構検出面より床面までの掘り込みは、約20cmほどであるが、壁高は擾乱のため15cm～30cm
と不定なものとなった。壁溝は確認されなかった。

床面はやや堅緻でやや起伏がある。

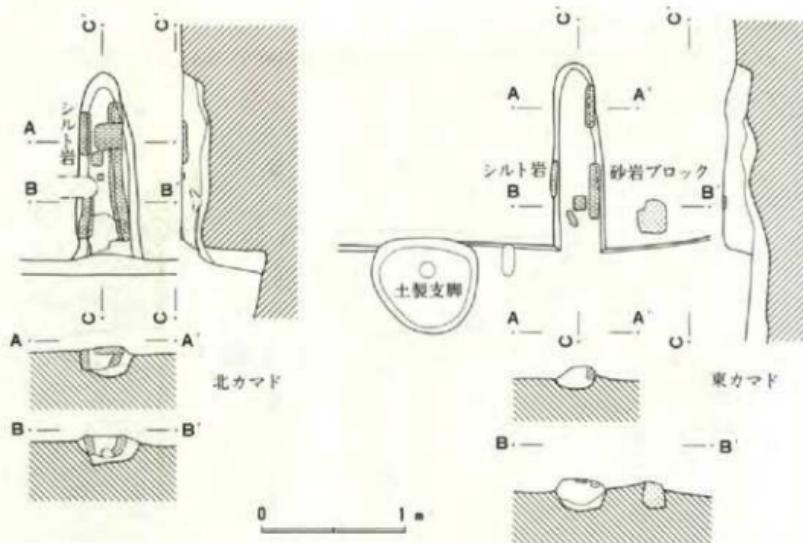
柱穴は、はっきりとしたものを検出することは出来なかった。

西側壁際に径65cm×75cm、深さ10cmほどのピットがあり、内から土製支脚の一部が出土した。
なお東側でY-1号跡と重複。土層断面から004G号跡が新期の住居跡である。

カマドは北壁と東壁の中央部に、細長く住居外へのびたカマドの煙道がある。両方の煙道とも、
壁外へ約1.2～1.3mほどのびていて、検出面からの深さは15～20cmで浅いため遺存はあまり
良好ではない。軟質のシルト岩を板状にして側壁にならべ、蓋にも使用していたようである
が、一部遺存しているだけである。また、北側の煙道入口付近には變形土器の底部を抜いたもの
も煙道に横にして組み込んでいたようで、その土器片の一部も出土した。北側の煙道の底面



第32図 004F号跡遺構実測図 (1/60)



第33図 004 F号跡カマド実測図 (1/40)

は床面より40cmほど高いレベルにあるが、東側の煙道は床面と同じレベルで続いている。カマド構築材や火床部は認められず、北側と東側のカマド本体については不明である。ただ、前記のとおり土製支脚の一部は出土している。

なお鐵鎌が北側カマドわきの床面上より出土している。(第73図1)

005 A号跡 (第34・35図)

南西側が調査以前に大きく削平されており、東側でY-2号跡と、また西側の一部で005 B号跡と重複していて、遺存は半分以下である。遺存している壁と柱穴の配置から判断して、平面形は方形で、規模は推定で一辺が約6mほどになると思われる。

検出面からの掘り込みの深さは北側の深いところで35cmであるが、他は浅く10~15cmほどである。壁はほぼ直に立ち上がる。

壁溝はみとめられなかった。

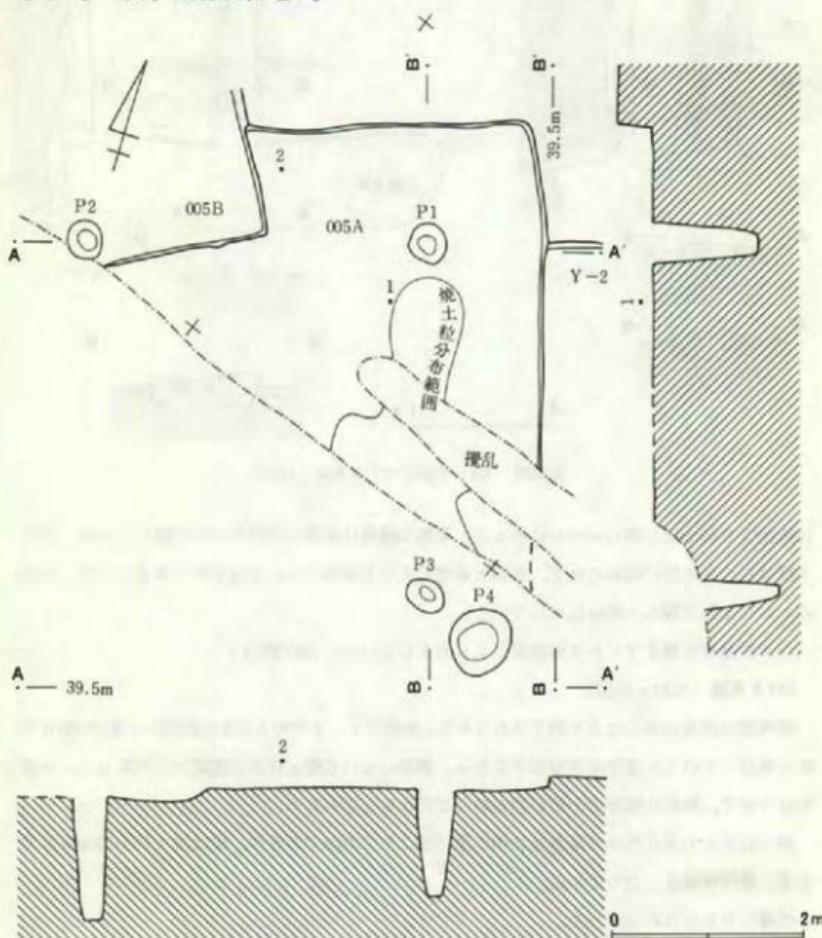
床面はやや軟質な貼床で、比較的平坦である。柱穴P1とP3の間あたりに、焼土が炭化物の小片とともに、あまり密ではないが散布していた。

柱穴は3本検出(P1~P3)。壁の向きと整合して、配列しており、もう一基もつことは確実と思われるが、推定位置はかなり深く削平されてしまっている。また、P3のすぐ側にピットP4が位置する。深さが床面から推定して約70cmあり、かなり深い。

炉、あるいはカマドは検出されなかった。しかし、北もしくは西側にカマドが存在していた

可能性が強いと思われる。

005B号住居跡との新旧関係は、床面がより深い005B号住居跡内に005A号住居跡の床が遺存していないため、005Aの方が古い。



第34図 005A号跡遺構実測図(1/60)



第35図 005A号跡遺構出土土器実測図(1/4)

表-7 005A号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	残 $\frac{1}{2}$	5.7	2.7	1.4	手すくね、砂っぽい胎土で荒い作り、内面指でなでているが、ひきつり残したまま、外はヘラ削りで面取を行ない指でザツなどなでているのみ、焼成も甘い。	
2	器台	足 $\frac{2}{3}$	X	X	X	黄褐色。胎土中に石英粒みられる。焼成やや甘い。赤彩、仕上げもきほど良好ではない。	

005B号跡（第36・37図）

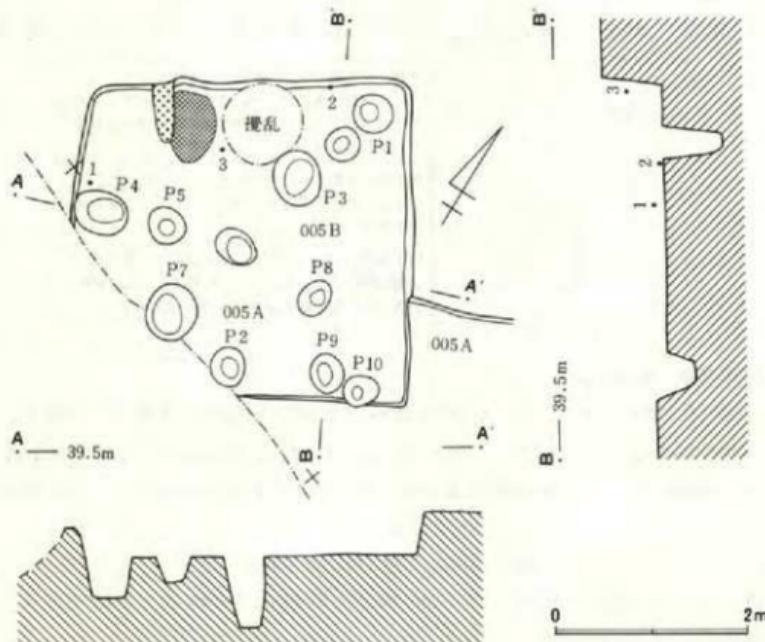
南西側が一部削平されており、東側で005A号跡と重複しているが、床面はより深い。

平面形はやや不整の方形である。規模は3.3m×3.6mを計ることが出来る。

壁はやや外へ傾いて立上がる。検出面からの深さは深いところで60cmあるところもあるが、概して35cm前後である。

壁溝は認められない。

床面はやや堅緻な貼床で、比較的平坦である。

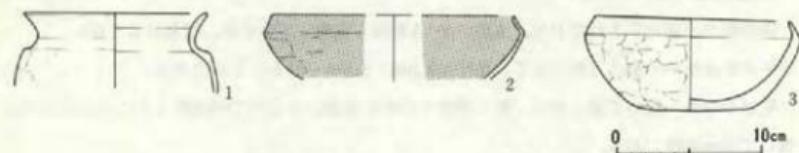


第36図 005B号跡構造実測図(1/60)

005B号跡に擾乱が多く入っていたが、これらの擾乱を除外してもP1～P10のピットが検出された。しかしこれらすべてが005B号跡に付随するピットとはいはず、他の住居跡のピットや擾乱の穴がある可能性がある。また、これらのピットP1～P10は不規則に配置しており、どれが主柱穴かどうかも不明であった。

005A号跡と重複している。005A号跡の床面は005B号跡より浅いが、005B号跡の内に005A号跡の床面が認められなかつたため005B号跡が新規のものと判断した。

北西側の壁にはカマドが認められた。しかし、擾乱がひどく、左側の袖部と火床部が、わずかに遺存しているだけである。



第37図 005B号跡遺構出土土器実測図(1/4)

表-8 005B号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	甕	口縁 $\frac{1}{4}$	12.6	×	×	外面、黄茶褐色、ヘラ削り、口縁部はよくナデ仕上げ、内面、黒色仕上げ、よくみがき上げている。胎土は少々砂っぽく金雲母がまじる。焼成はやや甘い感じである。	
2	壺	$\frac{1}{6}$	16.9	5.2	×	胎土中に砂粒含み、あまり良い土ではないが、内外面ともに、丁寧な仕上げをしている。全面に赤彩を施す。	
3	壺	$\frac{1}{2}$	13.4	6.2	7.7	暗茶褐色、口縁ヨコナデ、胴ヘラ削り、胎土中に砂粒含み、全体として砂っぽい感じがする。内面のみがきも砂っぽさが残る、焼成は良とするか。	

005C号跡(第38・39図)

005D号住居跡の床面の下位に別の床面が認められ、005D号住居跡と重複した住居跡として005C号住居跡が検出された。しかし南側の半分以上が、すべて削平されてしまつて、残った部分も擾乱がひどく、明瞭な壁は北側の壁とそれにつづく東と西側の壁のごく一部のみである。

この壁から平面形は方形と推定される。一辺は約3.5mを計る。

遺存している北側の壁高は検出面から20～25cmで、わずかに外へ傾いて立ち上がる。

壁溝はみとめられなかった。

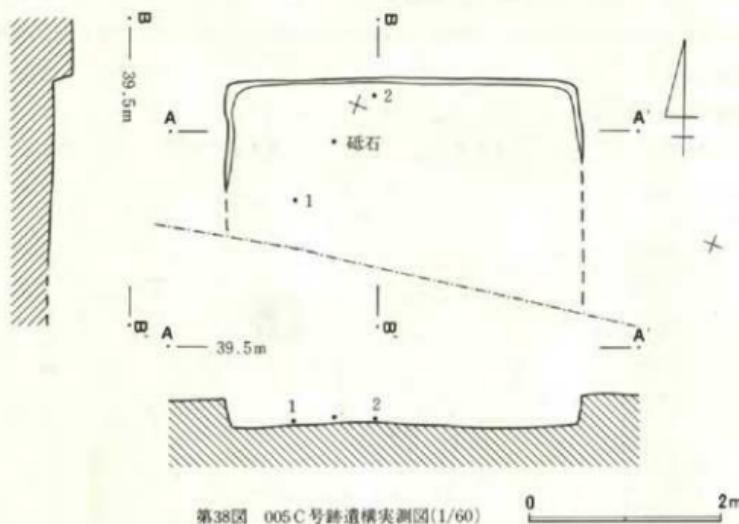
残された床面はやや堅敏な床面であり、ゆるい起伏がある。

柱穴、貯藏穴等は検出されなかった。

北側で005D号住居跡と重複する。005D住居跡の床面が005C号住居跡の床面を覆っているため、005C号住居跡の方が古いものと判断される。

炉あるいはカマド等は検出されなかった。

遺物としては土師器片が少数出土したほかに床面上から、砥石が一点みられた。



第39図 005C号跡遺構出土土器実測図(1/4)

表-9 005C号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	3/5	19.5	10.0	×	赤褐色、胎土中に小砂粒含むも、丁寧な整形を加えている。内面は、ミガキのあとが残るが、全体として二次焼成のためかなり荒れている。	
2	壺	3/5	13.3	×	×	黄褐色、胎土は砂っぽい感じ、焼成も甘い。内外面及び口縁はミガキが施されない。仕上げもあり丁寧でない。	

005D号跡 (第40・41図)

南側で005C号住居跡と、北側でY-3号住居跡と重複する。新旧関係は005C号跡とは検出状況から005D号跡が新しい。

Y-3号跡とは床面のレベルは同じであるが、005D号跡の壁がY-3号跡のプラン内で立ち上がっていて、005D住居跡のカマドが遺存しているため005D号跡が新しいものと判断される。

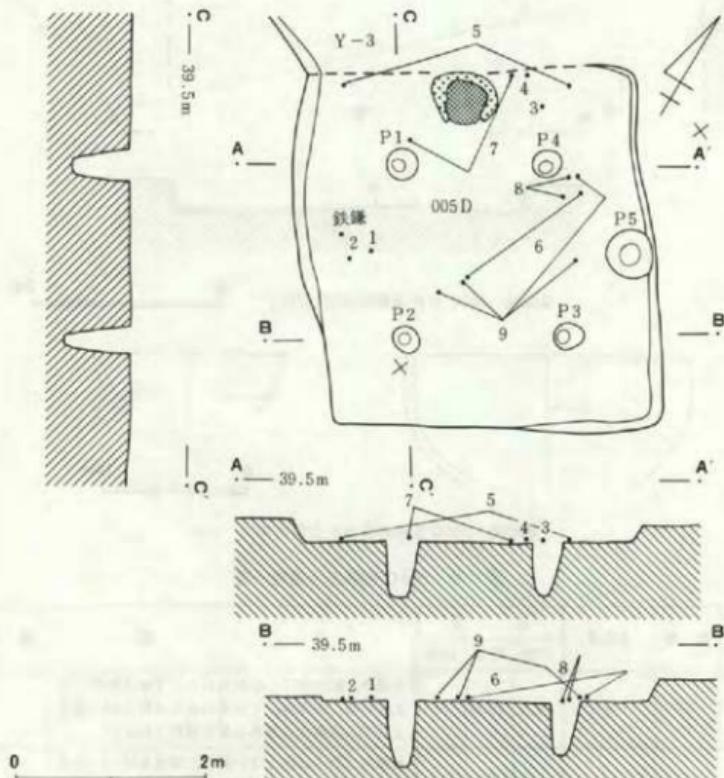
平面形は少し不整の方形。規模は一辺が3.8mほどである。

壁は他の住居跡との重複やひどい擾乱のために遺存が悪い。外へ少し傾いて立ち上がる。

壁溝は認められなかった。

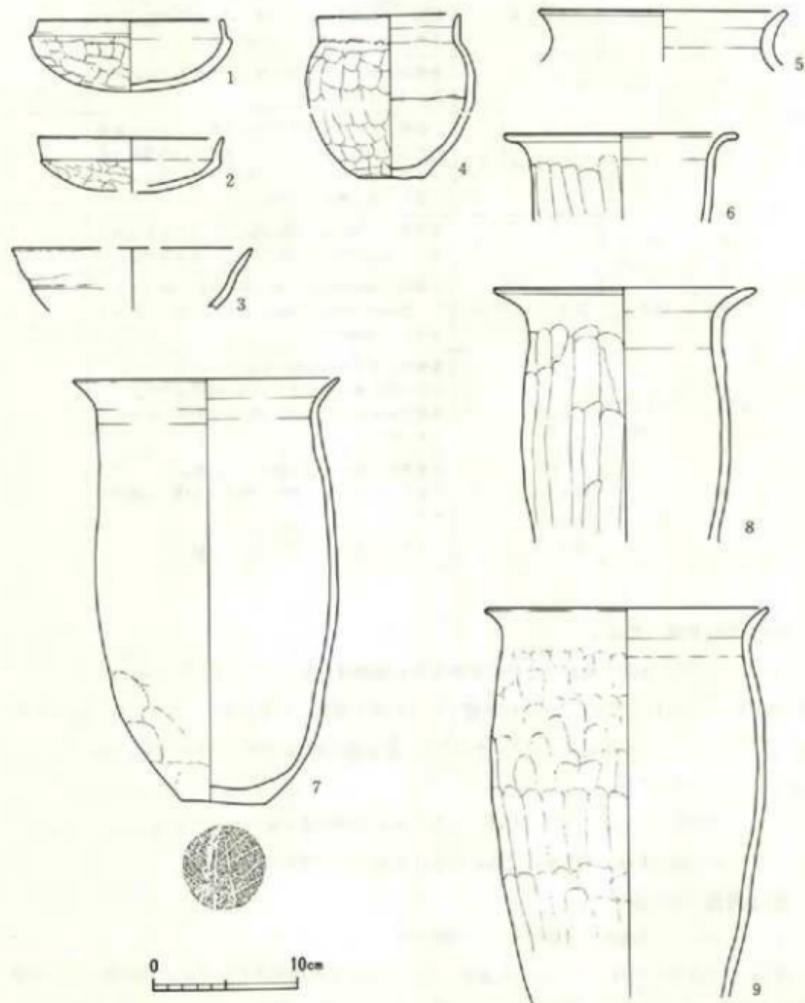
床面はやや堅緻な貼床で、わずかに起伏のあるのがみられた。

主柱穴と思われるピット4本を検出(P1~P4)。また北東側の壁際にピット1基ある。深さ45cm、径50cm。



第40図 005D号跡遺構実測図(1/60)

カマドは北西側壁に設けられている。
本遺構からの出土遺物としては、比較的多量の土師器片及び鉄鎌 1 点（床面直上）がみられる。(第73図・3)



第41図 005D号跡遺構出土土器実測図 (1/4)

表-10 005D号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	1/5	13.0	5.0	4.0	暗茶褐色、焼成やや甘そう。胎土中に混入物少ない。ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	
2	壺	1/3	12.8	3.8	×	暗茶褐色、胎土やや砂っぽいも良好。焼成良好、胸部ヘラケズリ、わりと雜っぽい。内面及び口縁外部はヘラによるミガキを加える。	
3	壺	1/5	15.7	×	×	黄褐色。胎土は砂っぽい感じ、焼成も甘い、内面のミガキは良好。	
4	壺	3/4	10.0	11.0	4.5	小型壺である。完全に内外面ともボロボロ。肩あたりが一番ひどい。外はヘラケズリ。内面は一応ミガキを加えてはいると思われる。口縁のはりつけ部も丁寧な整形が行われていない。	
5	壺	口縁1/3	17.2	×	×	暗茶褐色、焼成良、胎土中に砂粒含みあまり良くない。内外面とも、残部は一応ミガキ加える。	
6	壺	口縁1/3	16.2	×	×	赤褐色、砂粒等含み、胎土やや荒い。外ヘラケズリ、器面荒れ気味、内面もあり丁寧なミガキが加えられた様子はない。	
7	壺	ほぼ完形	18.4	29.0	5.7	黄褐色。胎土中には微小砂粒多くみられるが、内外面共に丁寧に磨かれている。焼成はやや甘い。ほぼ完形にかかわらず、破片はやや丸い断面を示すもの多い。	
8	壺	1/3	18.0	×	×	暗茶褐色。胎土中に小砂粒含み、器面荒い。外ヘラケズリ、内ヘラミガキ、焼成は良好、口縁ヨコナデ。	
9	壺	1/3	19.2	×	×	ヘラケズリ後良くナデしている。口縁ヨコナデ。	

005E号住居跡（第42図）

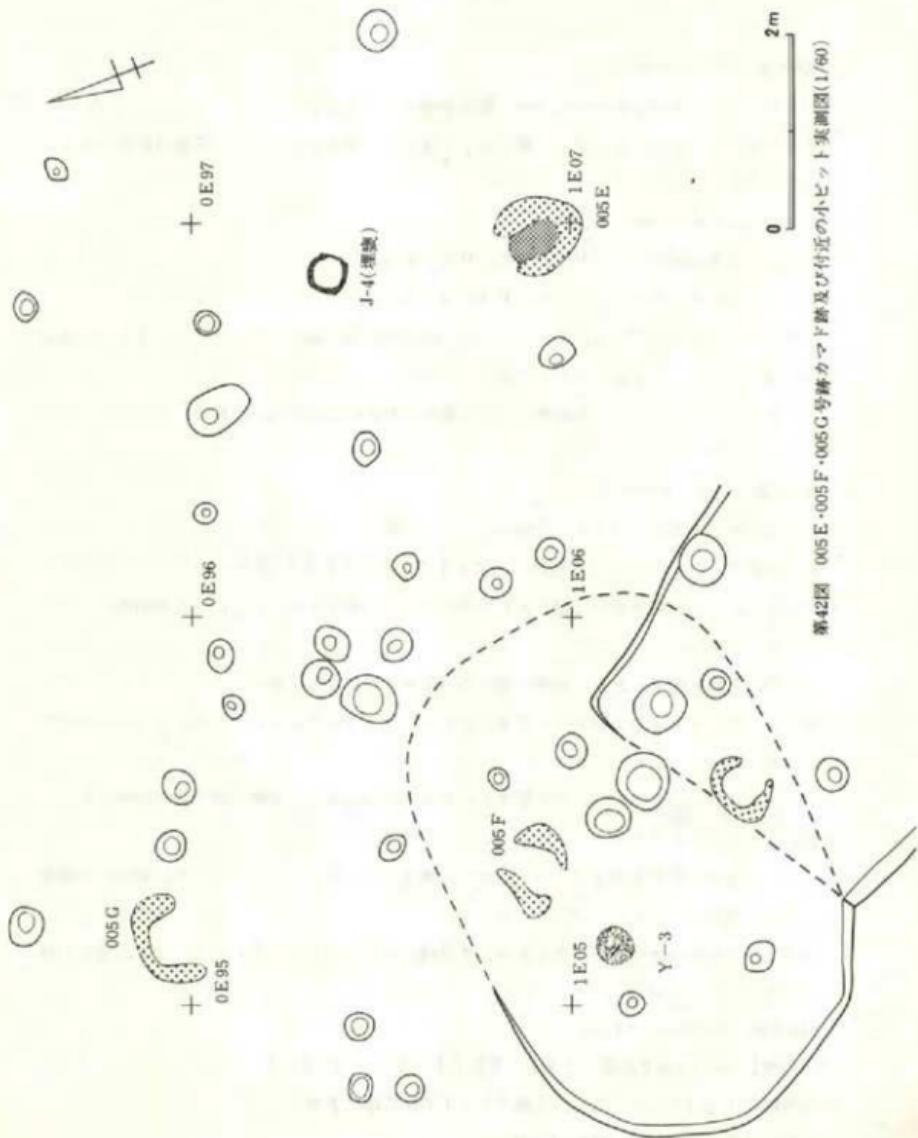
カマドの痕跡と床面と思われるやや堅緻な面が遺構確認面においてわずかに認められたため、住居跡として005E号跡としたが、住居跡としての壁は認められず、付近のピットもどれが本遺構に伴う柱穴かどうか不明であった。そのため、第42図に005E号跡のカマド跡と付近のピット等をいっしょに示した。

カマドの痕跡としては、カマドの袖の底部と火床部が床面に貼り付いている部分だけ遺存していた。出土遺物はカマド内から土師器の小片が数点だけである。

005F号跡（第42図）

カマドの底部のみ遺存。平面形などは不明である。

005E号住居跡と同様に、底部のみ遺存しているカマドが検出されたため、住居跡として005号住居跡とした。しかし、壁や床面などは遺存しておらず、周辺の小ピットもどれが本住居跡に伴うものなのか不明であった。カマドの位置と付近の小ピットを示す。



第42図 005E・005F・005G号跡カマド跡及び付近の小ピット実測図(1/60)

005G号跡（第42図）

カマドの底部のみ遺存。005F号跡と同様の検出状況のため、平面形・壁・床などの住居跡についてのことは不明となってしまった。

006号跡（第43・44図）

平面形は方形。規模は4.4m×4.6m。他の遺構との重複はない。

床面が検出面からきわめて浅く、壁は立ち上がりしか遺存していない。床面は堅緻な貼床でほぼ平坦な床である。

壁溝はみとめられなかった。

主柱穴は4本検出された（P1, P2, P4, P5）

カマドと対向する壁近くにピット（P3）が1本ある。

北側の壁にカマドが設けられていた。ただし袖の基底部が遺存しているだけである。中央に擾乱が入っており、火床部はほとんど遺存していなかった。

出土物したものとしては、土師器の小片が数点と有溝砥石（第70図）、鉄滓、軽石各1点がみられた。

007号跡（第45・46図）

他の住居跡があるところより一段低いところに位置している。この一段低い面は人為に削平されたため、そのため007号住居跡の床面もすでに削平されており、検出されたのは掘り方と柱穴である。しかし東側半分は掘り方も不明になるほど削平されており、また南西側の一部は調査区域外である。

平面形は方形と考えられる。西側は堀り方の壁が2重になって遺存しており、また主柱穴が2組2重（P1～P4およびP5～P8）になって配列されているため拡張が行なわれた住居跡と判断される。

ピットP11はカマドに対向して位置する。P9とP10は他の住居跡の柱穴の可能性がある。P12は大形のピットである。

カマドを北壁の中央部付近にもつ。しかし、擾乱が入ってしまっているため、袖部の基底部の一部しか遺存していない。

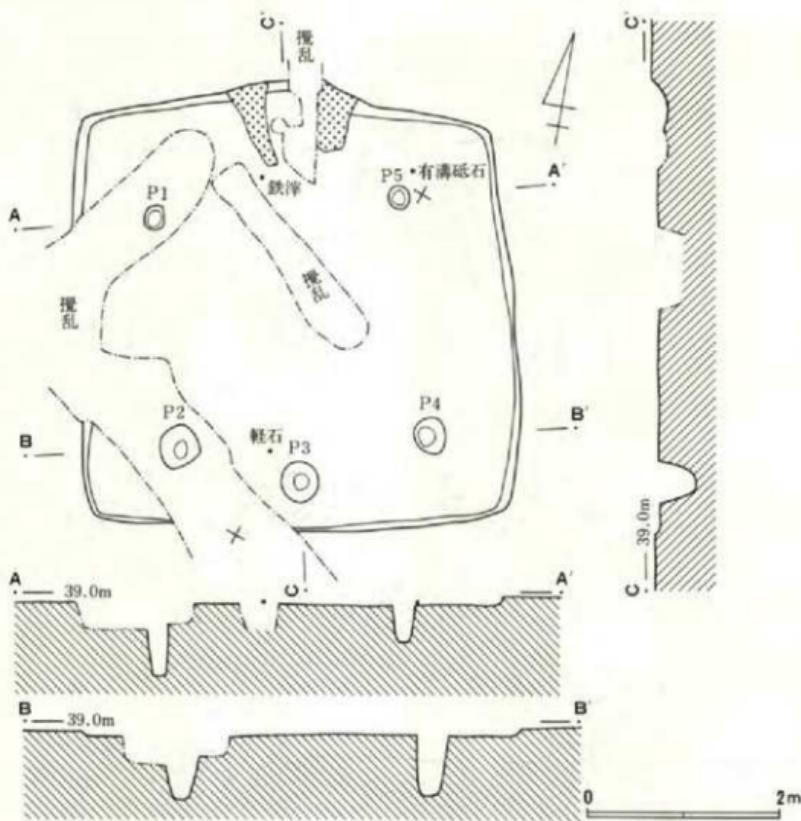
床下堀り方中から土師器が出土したが、本遺構に伴わないものと思われる。また、他に石鐵1点（第69図、3）が出土した。

008号跡（第47・48・49図）

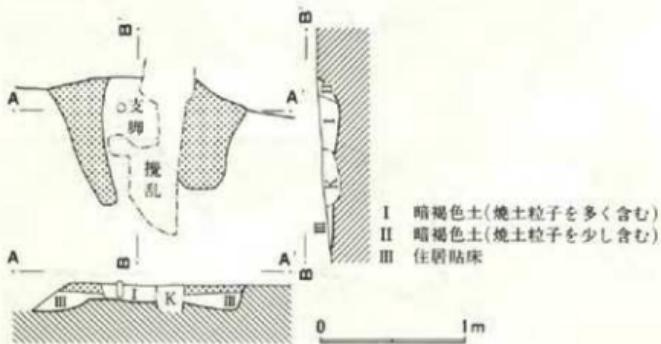
南西側1/3ほどは調査区域外である。東側でJ-2号住居跡と重複し掘り込んでいる。J-2号住居跡の床面はきわめて浅い。北側でJ-1号住居跡と重複している。

平面形は方形。規模は4.8m×4.9m。

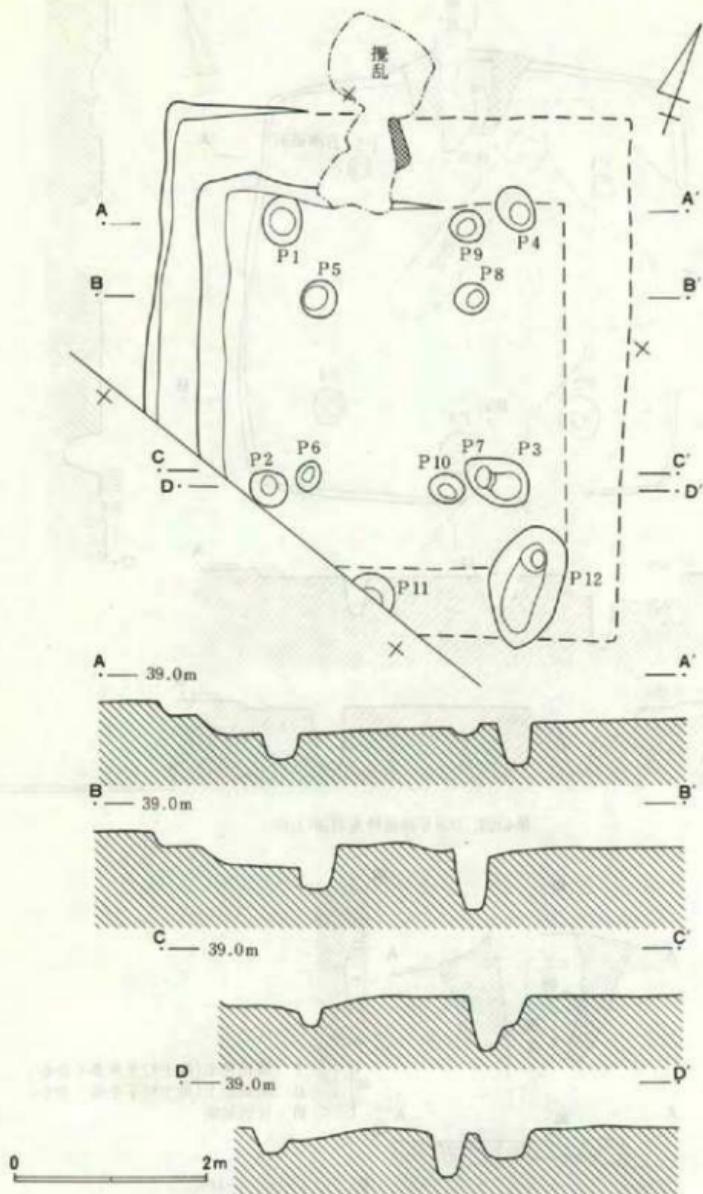
壁はやや外に傾いて上がる。壁高は検出面から15cmほど残る。



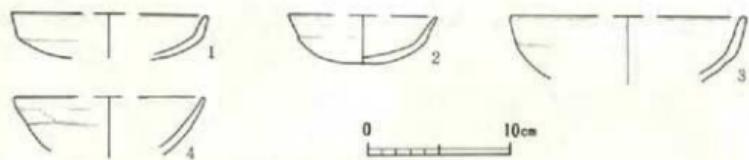
第43図 006号跡遺構実測図(1/60)



第44図 006号跡カマド実測図(1/40)



第45図 007号踏道構実測図(1/60)



第46図 007号跡道構出土土器実測図 (1/4)

表-11 007号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	1/6	13.7	3.0	×	黄褐色、砂粒表に多く器面荒れ気味。内面はよくミガキがかけられている。焼成は普通。	
2	壺	1/6	10.5	3.4	3.5	外面の黒はん広い、赤褐色。007の内では胎土中の砂粒は少ない方。内面はレンガ色を示す。焼成は良。口唇の処理は極めて繊細。	
3	壺	口縁1/8	16.7	4.5	×	暗茶褐色。胎土中に混入物少ない。外面スヌ状の付着の痕あり。	
4	壺	口縁1/4	13.2	4.0	×	黄褐色。胎土中に砂粒多く、外面底部近く荒れ気味。	

壁溝は確認されていない。

床面は貼床である。中央部は堅緻であり、壁ぎわもやや堅緻である。わずかに起伏がみられる。

主柱穴と思われるものが、3本 (P1, P3, P4) 検出されていて、調査区域外にもう一本が存在すると思われる。2本 (P3, P4) には掘りぬいた跡がみられた。カマドの右手に小ピット (P2) 1本存在する。

カマドは北側の壁でやや東よりに位置してある。ただし、ゴミ穴によって擾乱されており、左側袖と火床の基底部だけ遺存している。

出土遺物中に鉄滓がみられた。

009号跡 (第50・51図)

007号住居跡と同様に他の住居跡があるところより一段低い所に位置している。これは人為的に削平されたために低くなってしまっており、そのため009号住居跡の床面も遺存しておらず、掘り方として検出された。まだ南側1/4以上が調査区域外にある。

平面形は方形と推定され、規模は東西に4.5m・南北方向は不明である。他の遺構との重複はないようである。

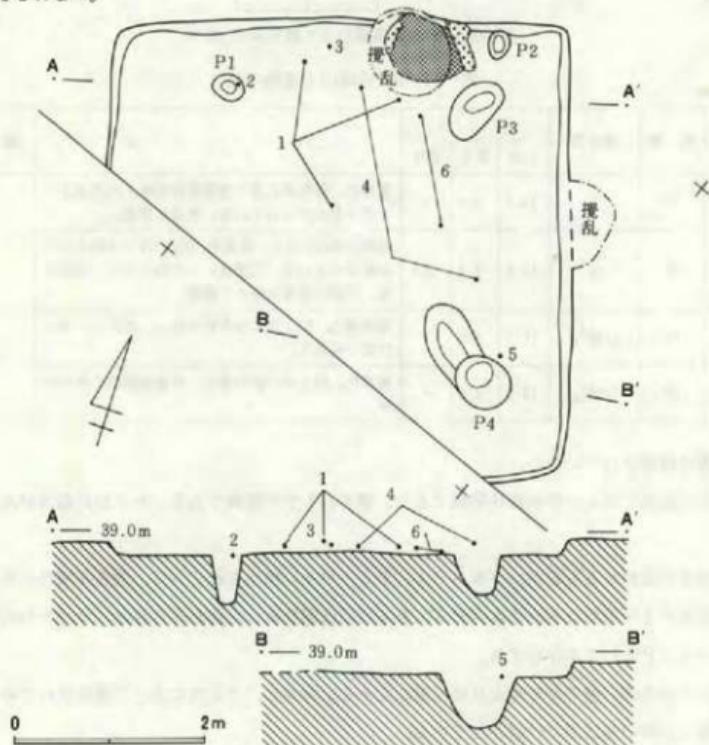
壁はほとんど遺存していない。掘り方の壁はかなり外へ傾いて立ち上がる。

壁溝は確認されなかった。

主柱穴が2本 (P1, P3) だけ認められる。他に2本が調査区域外にあると考えられる。

また柱穴P1とP3の間にピットP2がある。深さ45cm径40cm。また柱穴P3と東側壁との間に小ピットP4がある。

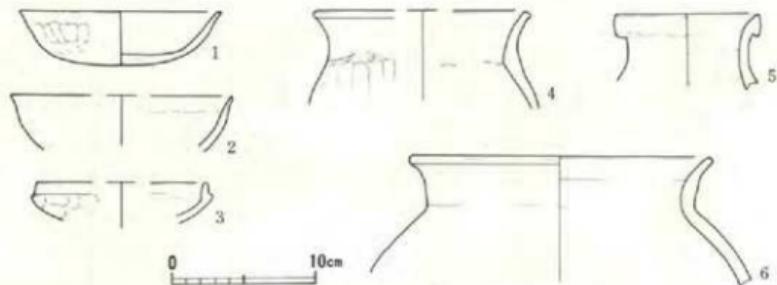
炉ないしカマドは調査区内からは検出されなかつたが床が削平される以前には存在していたのかもしれない。



第47図 008号跡遺構実測図(1/60)



第48図 008号跡カマド実測図(1/60)



第49図 008号跡遺構出土土器実測図 (1/4)

表-12 008号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	环	1/3	14.0	3.8	5	黄褐色、整形はていねいでない。胎土中に砂粒多く含まれている。ヘラケズリもわりと確。ヘラ先でひっかけた様な痕たくさんあり、内面もていねいにミガくもいま一つなのは胎土中の混入物か。焼成は良好。	
2	坏	口縁1/5	15.5	4.0	×	煮たものか、外面にはスス等の付着がみられる。ほぼ暗茶褐色。内面は黄褐色、口縁下1 cm ぐらいまで黒色のラインがある。胎土中には砂粒等あまり含まない。焼成は良。	
3	坏	1/5	12.0	3.3	×	黄褐色、胎土中に砂粒等、やや目立つ。焼成やや甘い感じあり。内面はよく磨き加えられている。	
4	壺	口縁1/8	15.0	×	×	暗茶褐色、胎土中に砂粒含む。焼成は普通、腹部ヨコナデ。首のところにヘラ先で、横にライン状に引いている。内面接合痕の整形残りか。	
5	壺	口縁1/2	10.0	×	×	黄褐色、胎土中に砂粒等含む、器面荒れている。内面は磨いていると思われるが外面同様荒れてい。焼成は元々あまり良いとはいえない。	
6	壺	口縁1/3	21.0	×	×	赤褐色、小砂粒多く含む、内面はよく磨き加えられている。肩→口縁にかけて、ていねいにナデられている。	

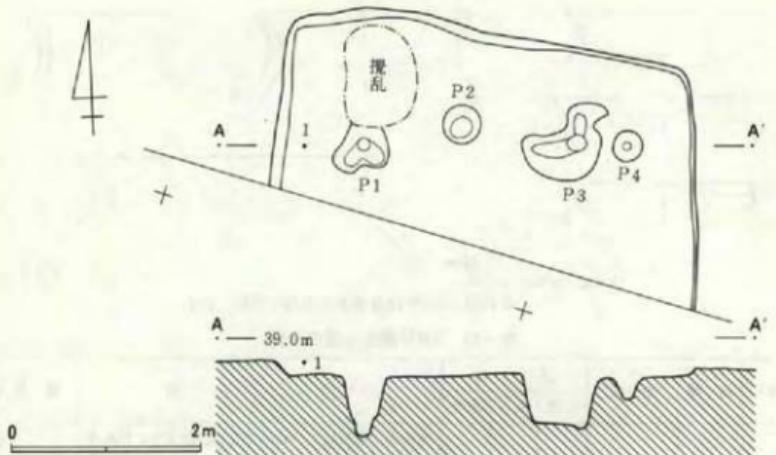
010号跡 (第52・53・54図)

カマドが検出されたため住居跡としたが、遺構の大部分が調査区域外に存在するため、カマドだけの調査となってしまった。

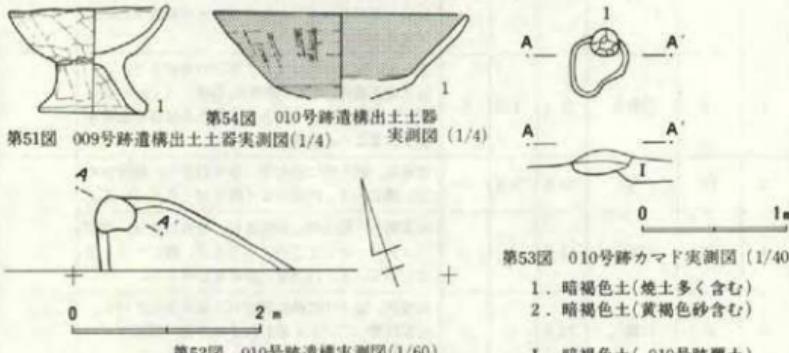
平面形などの住居跡についてのことは不明であるが、カマドは隅（コーナー）に位置するようである。

カマドの遺存も悪い。カマド構築材の白色砂質粘土がブロック状にあって、その下位に火床部と思われる焼土が認められただけで、かなり崩れてしまっていた。

遺物として、白色砂質粘土の上位に高壺の壺部が伏せた状態で出土した。



第50図 009号跡遺構実測図(1/60)



第51図 009号跡遺構出土土器実測図(1/4) 実測図(1/4)



第52図 010号跡遺構実測図(1/60)

第53図 010号跡カマド実測図(1/40)
1. 暗褐色土(焼土多く含む)
2. 暗褐色土(黄褐色砂含む)

I 暗褐色土(010号跡覆土)

表-13 009号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	高坏	ほぼ完形 坏部 $\frac{1}{2}$	11.2	7.0	7.5	黄褐色。胎土中に砂粒等多く含む。焼成やや甘い感じの器面、坏内面黒色処理をしたものか。外面にスス付着らしきあとあり。	

表-14 010号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	高坏	ほぼ完形	17.9	×	×	赤褐色。胎土中に白色砂粒等含まれる。全体にハケ整形後、ナデ消されて器面を整える。ところどころハケ目の消し残りあり、全面赤彩(外はげ落ちて痕が残るのみ)。	

V. 時代不明の遺構

F - 1号跡 (第55図)

遺構検出面において比較的明瞭に確認され、他の遺構との重複はない。

平面形は隅丸方形で、規模は2.5m×2.4m。

覆土は3層に分けられ、自然の堆積である。

壁はゆるく立ち上がって、少し外傾する。壁溝は無い。床面はやや軟質で、平坦である。

ピットが南西側のコーナーのところに一基ある。この他のピット等ではなく、またカマドもしくは炉も存在しない。

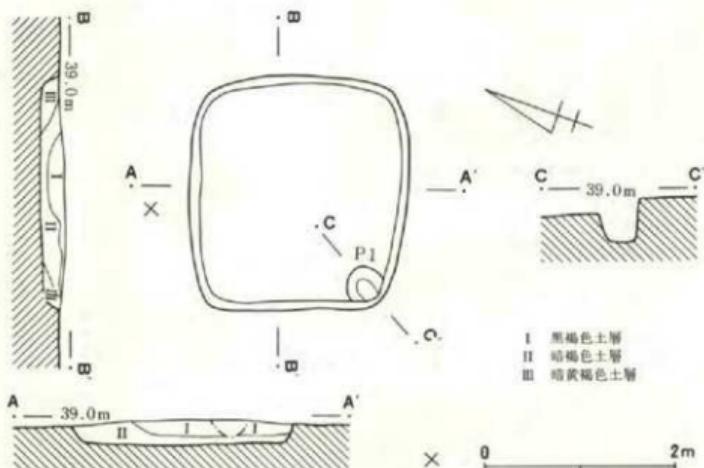
出土遺物は土器の小片が数点出土しただけである。時期が判断できる遺物が出土せず、遺構形態も特徴がなかったため時期不明の遺構としたが、古墳時代～歴史時代の遺構の可能性がある。

F - 2号跡 (第56・60図)

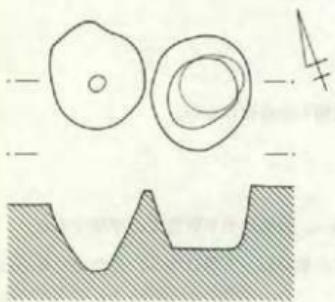
F - 3やF - 4号遺構の付近に位置する。2基の円形のピットからなる遺構である。この2基のピットが関連する遺構なのかどうかは明らかでないが、便宜上いっしょに取り扱った。

西側のピットは、平面形はほぼ円形であり、断面形はスリバチ形で深さが約55cmである。出土遺物は何もない。

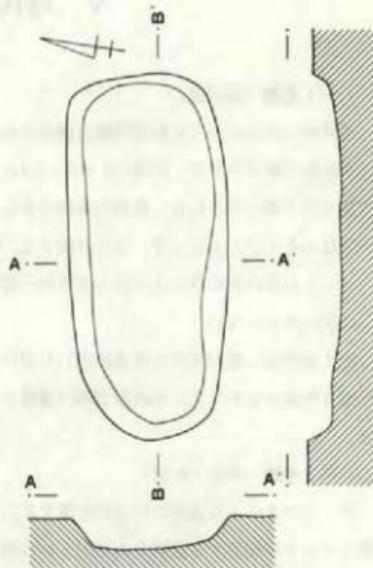
東側のピットは、平面形は円形であり、断面形はナベ底形で深さは約45cmである。遺構検出



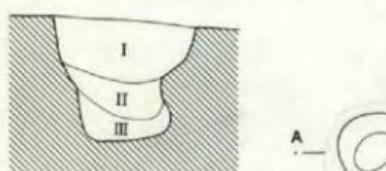
第55図 F - 1号跡遺構実測図(1/60)



第56図 F-2号跡道構実測図 (1/40)



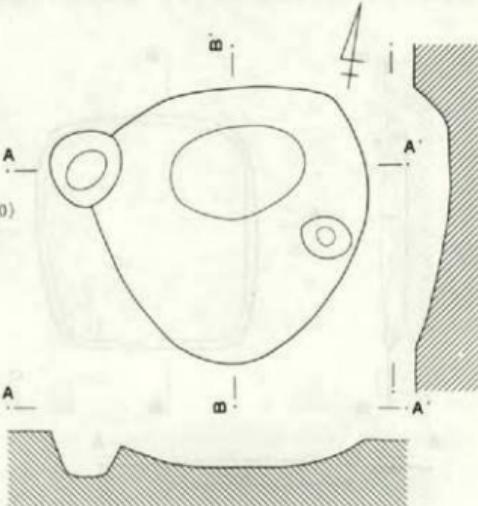
第57図 F-3号跡道構図 (1/40)



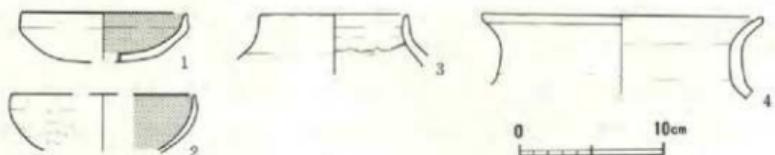
第58図 F-5号跡道構実測図 (1/40)

- I 暗褐色土層
- II 黒褐色土層
- III 暗褐色土層(やや砂質)

0 1 m



第59図 F-6号跡道構実測図 (1/40)



第60図 F-2号跡遺構出土土器実測図(1/4)

表-15 F-2号跡出土遺物一覧

番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	口縁 $\frac{1}{4}$ 全体 $\frac{1}{3}$	11.4	3.4	4	黄褐色、焼成やや甘い。胎土中に砂粒等あまり見られない。胎部ヘラ削り、内面はよくナデが加えられる赤彩。	
2	壺	$\frac{1}{3}$	12.7	4.5	×	黄褐色、胎土中に砂粒や雲母の細片を含む。焼成はやや甘いか。赤彩。	
3	甕	口縁 $\frac{1}{4}$	10.4	×	×	赤褐色、胎土中に微細な雲母、白色砂粒が含まれる。焼成はやや甘い。整形は全体にてていねい。しかし一部輪積痕が残る。	
4	甕	口縁 $\frac{1}{4}$	19.3	×	×	赤褐色、胎土中に砂粒、雲母細片等の混入あり。焼成は良、口唇直下はかなりするどい整形で角ばっている。口縁内側赤彩か。	

面には粘土ブロックが薄く層状に存在した。また、土師器片が多く覆土中から出土したが、大部分は小片であり、遺構と伴うものかどうか不明である。

F-3号跡(第57図)

平面形は丸みをおびた長方形に近い。深さは約25cmほどである。浅い遺構であるが、遺構検出面において明確に遺構と認められた。しかし、出土した遺物は少數の土器片だけであったため、時期・性格ともに不明である。

F-4号跡(第61図)

溝状の遺構で、深さは浅く約10~20cmである。北側は調査区域外につづく。南西端には円形の小ビットが1基あり、底面から約20cmほどの深さである。遺物は土器の小片が少數出土しただけである。このため、時期および性格ともに不明である。

F-5号跡(第58図)

001号住居跡の北西側に位置する。

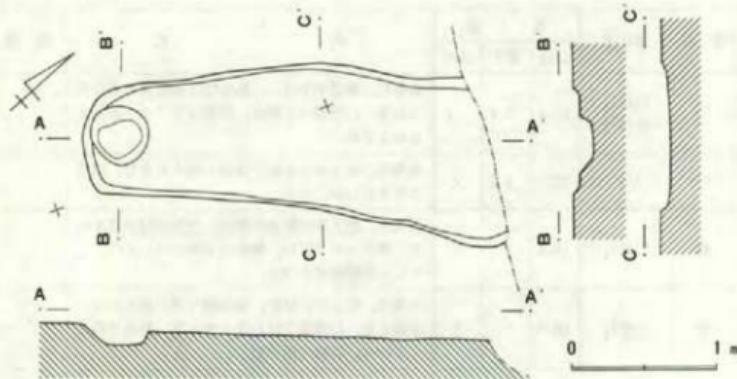
遺構検出面の平面形は円形で径が約1.0m。底部は梢円形で、径が約60cm×40cmであり、北東側で少しオーバーハングする。出土遺物は土器の小片が少數であった。

F-6号跡(第59図)

J-3号跡と東側で重複しているが、F-6号跡が後から切っている。

平面形は、遺構検出面では不整形であるが、底部は梢円形である。北側はやや外傾して立ち上がるが、南側はかなり緩やかに立ち上がり、深さは約25cmである。

小ピットが2基あるが、東側のものはJ-3号跡に属するものである。西側のものは円形で深さ約30cm。遺物は縄文土器から土師器の小片が覆土中から少數出土した。また、緑泥片岩製の石皿が南側の緩い壁面の上部に接して出土した。出土状況から見ると投棄されたものと考えられる。この石皿は後章の第71図に実測図を示した。時期的には縄文時代の可能性があるが確定し得ない。

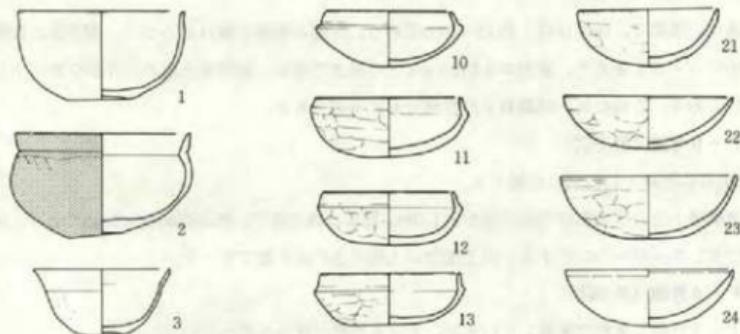


第61図 F-4号跡遺構実測図 (1/40)

遺構外出土の土器 (第62~68図)

傾斜部のOD・1D区を中心に投棄されていた土器である。流れ込みのものを除くと大半が古墳時代初頭のものが多くみられる。

とりたてて遺構らしきものに併うものではなく、また製作過程における未成品と言うようなものでもない。



第62図 遺構外 (OD, 1Dグリッド) 出土土器実測図 (その1, 1/4)

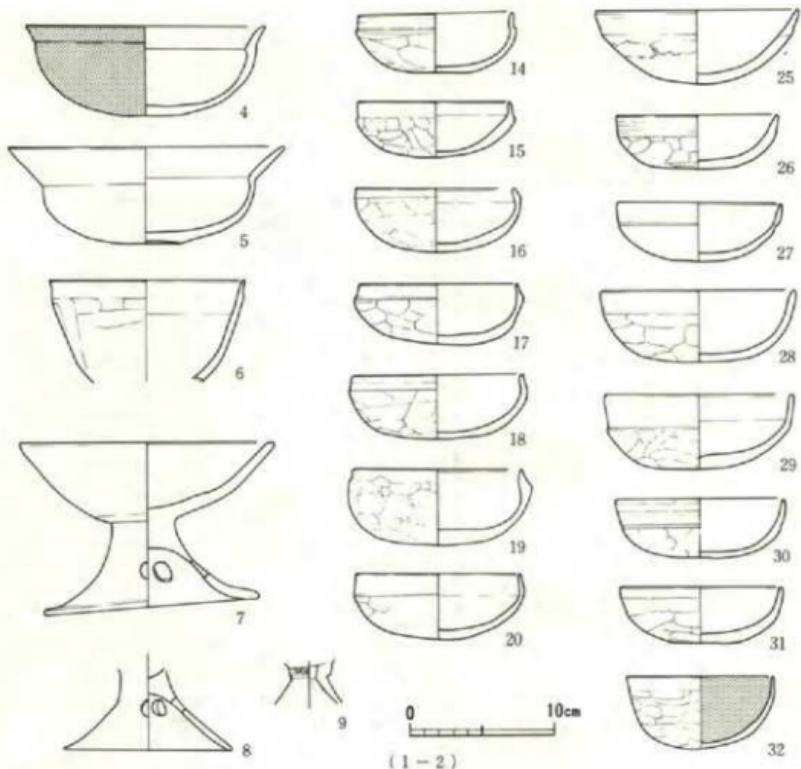
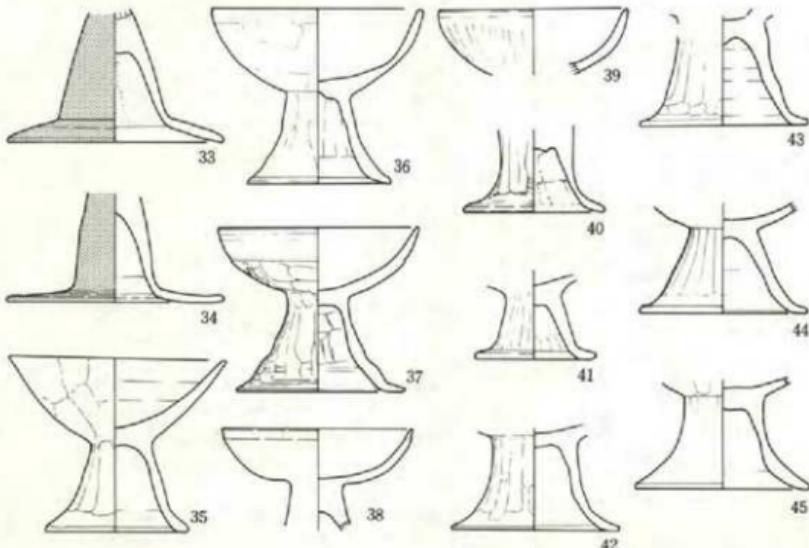


表-16 遺構外 (0 D, 1 Dグリッド) 出土遺物一覧 (その1)

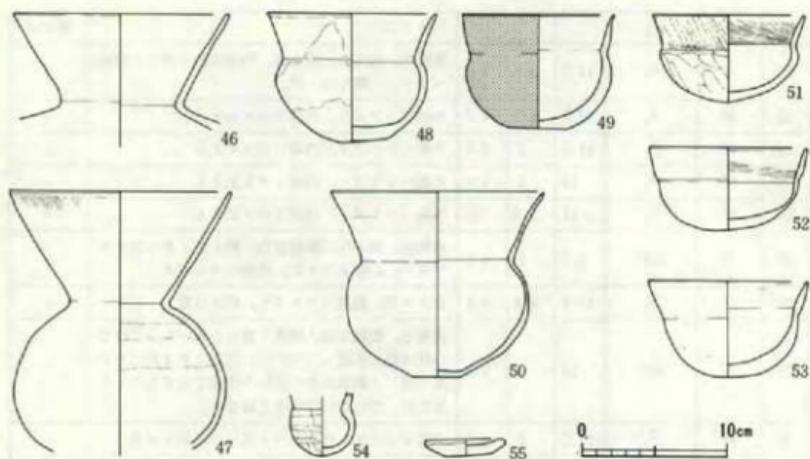
番号	器種	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1		2/3	11.5	6	4.2	黄褐色。胎土中にかなり砂粒含む。ヘラナデの荒い仕上げ面も一応のミガキは加えられるもしないとは言えない。焼成はまずまず。上げ底。	第62図
2		完形	12	7	4	赤彩。胎土中に小石、雲母細片などみられやや砂っぽい。焼成はまず良。外面ヘラケズリ、かるくないで内部のミガキそんなにていねいではないが一応の仕上り。	〃
3	坏	3/4	9.5	4.6	2.5	暗茶褐色。多少胎土中に混入物みられるが、焼成及びていねいな内外面のミガキで小型ながら良好な仕上げ。いさきかヘラケズリのあと残る。	〃
4		1/2	16.5	6	4	黄褐色。多少胎土中に小砂利が混入するがまず良好な胎土。焼成はやや甘い感じ。全面ヘラミガキで整形。赤彩。	第62図 (1-2)

5	环	$\frac{3}{4}$	19	6.5	4	黄褐色。砂っぽい胎土混入物はそんなに目立つほどではない。焼成はやや甘い。内外面ともザツとみがき加えるがそんなにていねいではない。	第62図
6	鉢	$\frac{3}{4}$	13.5	?	X	黄褐色。胎土中混入物少なく、焼成は並。外面ヘラケズリ後ナデ、内面ミガキをかける。まずはていねい。	〃
7	高坏	ほぼ完形	17.5	11.2	14.6	黄褐色。胎土中に砂粒の混入多し。あまり良好な胎土ではないが焼成は普通。内外面ともみがきは加えるも环内面は器面の荒れいちじるしい。	〃
8	器台	脚部のみ 完形		X	X	黄褐色。胎土中に混入物少ないが砂っぽい土。焼成はやや甘く、器面の荒れ方から二次焼成を受けていると思われる。ハケ整形後、ナデを加える。	〃
9	器台			X	X	外面はていねいにミガキ、内面もナデ。焼成胎土良好。	〃
10	坏	$\frac{3}{5}$	8.8	3.8	3	黄褐色。砂っぽいが胎土良。焼成並。ヘラ整形後ナデ。内面もありていねいには仕上げてはいない。	〃
11	坏	$\frac{3}{3}$	10.2	4.1	4	黄褐色。胎土中の混入物少ないが、砂っぽい土。焼成も甘い感じ。ヘラケズリ後ナデたがかなり荒い、ヘラケズリの山が甘くなっている。内面はみがきをかけたものと思われるがそれ程ていねいではない。	〃
12	坏	$\frac{3}{3}$	9.3	3.7	5	暗茶褐色。胎土中の混入物少なく、焼成も良。外ヘラケズリ後かるくナデる。内面ミガキかける。仕上げはまずまず。	〃
13	坏	$\frac{3}{4}$	9.9	3.5	5.5	黄褐色。胎土中に混入物少なく、焼成並。外面ヘラケズリ後ナデ内面ミガキ加える。それほどていねいなミガキではない。	〃
14	坏	$\frac{1}{3}$	10.8	4	5	口縁ナデ、胎部ヘラケズリ	第62図
15	坏	$\frac{3}{4}$	10.7	3.8	4.5	黄褐色。胎土良。焼成良。外面難なヘラケズリ。内面ナデミガキ。	〃
16	坏	完形	10.6	5.3	4	暗茶褐色。内面黒色処理。胎土中に小砂粒含み、外面ヘラケズリで、気泡等みられる。内面はよくみがいている。外面セラケズリ、ナデ加える。	〃
17	坏	完形	11	4.1	5.5	胎土中の混入物少なく、やや砂っぽい土。焼成は並。外ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ加えるも、全体として上物ではない。	〃
18	坏	$\frac{1}{3}$	X	X	X	口縁ヨコナデ、内側ミガキ、外面ヘラケズリ	〃
19	坏	完形	11.8	5.2	6	黄褐色。混入物は少ないが、砂っぽい胎土。荒いヘラケズリ後かるくナデる。内面は脂ナデ。全体的にイビツで上から見ると長円形。ふしぎに両手で持つと手のひらにおさまる感じ、どちらにしても難な品物。	〃
20	坏	$\frac{1}{3}$	11.9	4.5	5	黄褐色。胎土中の混入物少なく砂っぽい胎土。焼成はやや甘い感じ。外面ヘラケズリ後ナデ内面ミガキ、仕上げは良。	〃

21	坏	$\frac{1}{3}$				ヘラケズリ	第62図
22	坏	$\frac{2}{3}$	11.7	3.7	3.8	黄褐色。胎土良。焼土並。内面黒色ミガキ、外面ヘラケズリ難な仕上げ。	〃
23	坏	$\frac{2}{3}$	12.2	4.3	4.8	外面ヘラケズリ、内面ミガキ加える	〃
24	坏	$\frac{2}{3}$	11.6	4	3.6	外面ヘラケズリ、内面ミガキ加える	〃
25	坏	$\frac{2}{3}$	14	5	4.9	外面ヘラケズリ、内面ミガキ加える	〃
26	坏	$\frac{2}{3}$	11	3.6	5	外面ヘラケズリ、内面ミガキ加える	〃
27	坏	完形	6.3	4	4.8	黄褐色。胎土中に砂粒含む。焼土並。外ヘラケズリ荒い。口縁ヨコナデ、内側ヘラミガキ。	〃
28	坏	$\frac{2}{3}$	13.4	4.8	5.5	ヨコナデ、副部ヘラケズリ、作りは雑	〃
29	坏	完形	13	5	5.5	黄褐色。微細な混入物多く含むが荒いものではない焼成色。外面ヘラケズリ。内面ミガキ共にやや荒い感じ。肩部の作り出しへラ先でけずり出したみたい。ていねいな作りではない。	〃
30	坏	$\frac{2}{3}$	11.7	4	4.5	口縁ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ミガキ	〃
31	坏	$\frac{1}{2}$	11.2	3.8	5	黄褐色。胎土中混入物少なく、外少砂っぽい。焼土は並。外面荒いヘラケズリのあとナデ、内面磨きかける。仕上げは良。	〃
32	坏	完形	10	4.9	4	黄褐色。胎土中の混入物少ない砂っぽい土。焼土やや甘い。ヘラケズリの後かるくナデ、内面磨き、口縁ヨコナデ、内外赤彩、外面はくり。	〃



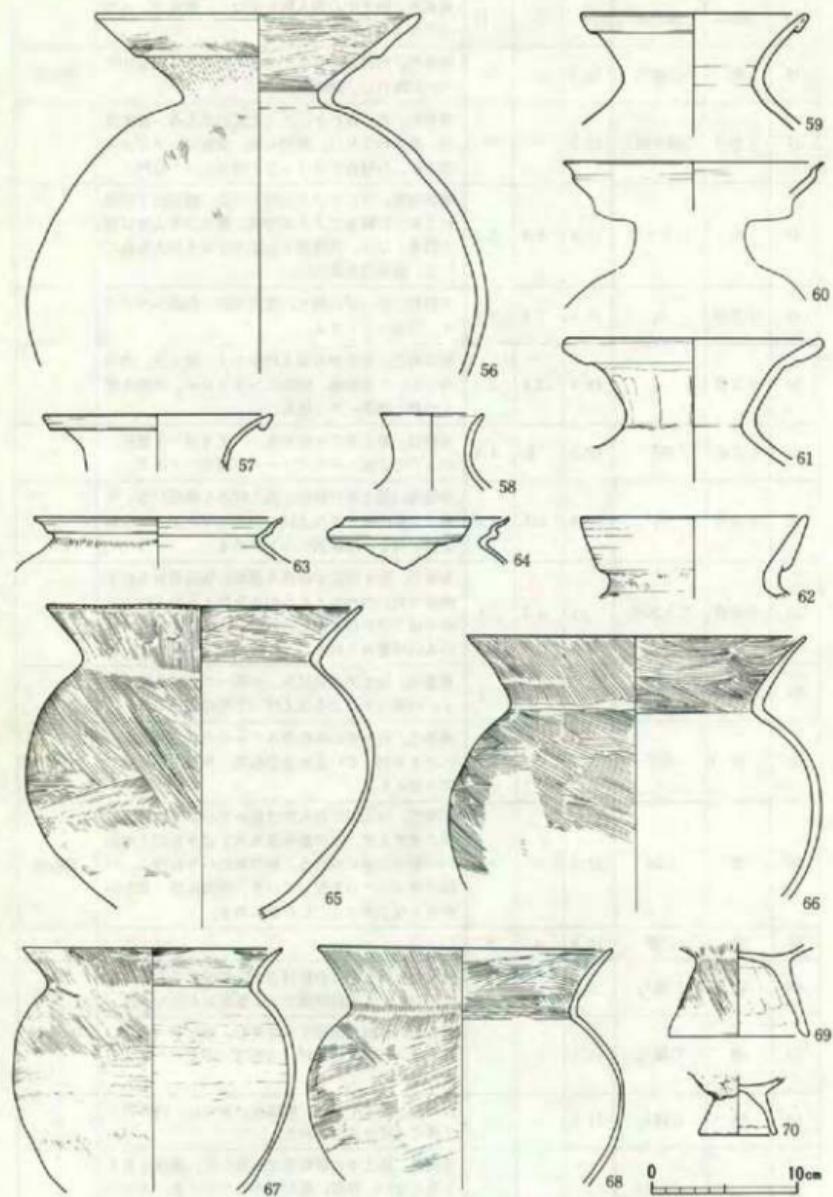
(1-3)



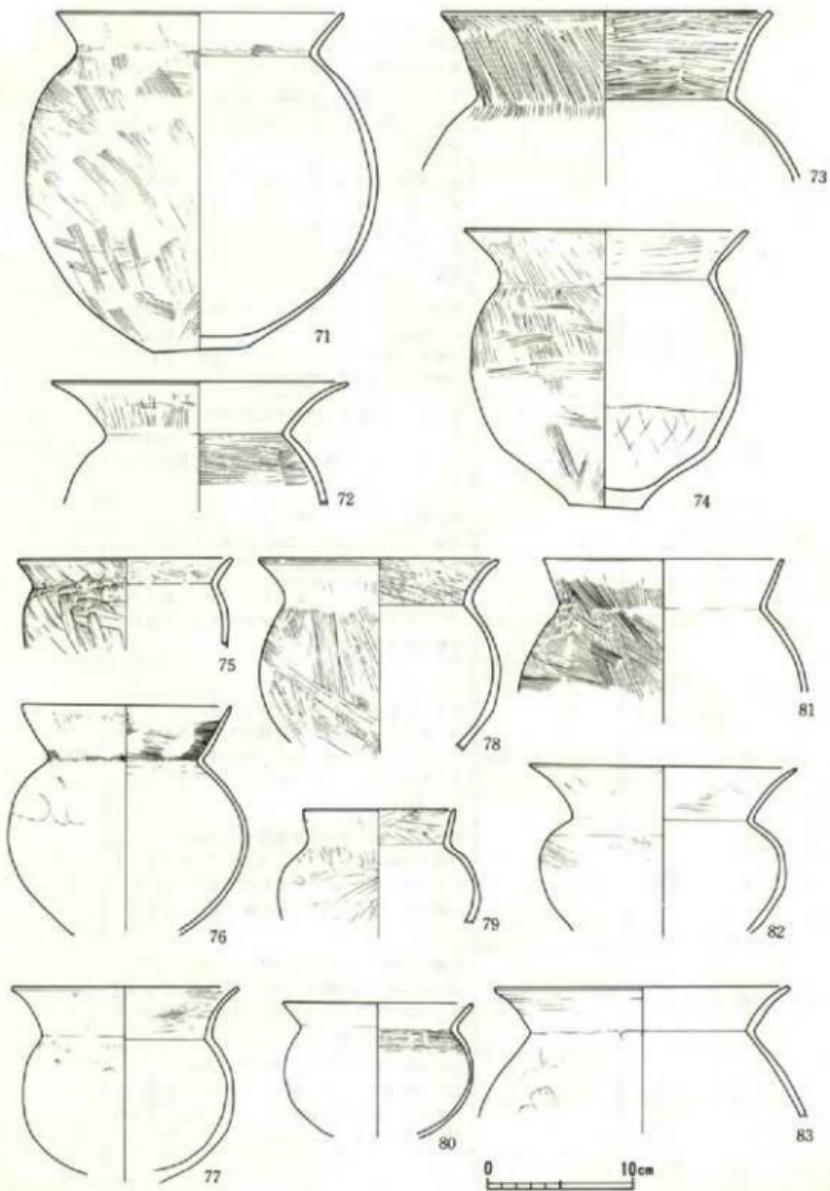
第63図 遺構外（O.D. 1D グリッド）出土土器実測図（その2、1/4）

33	器台	脚部のみ	×	×	15	赤彩。	第62図
34	器台	脚部のみ	×	×	15	赤彩。	〃
35	高坏	ほぼ完形	15	12.1	9.8	黄褐色。混入物は少ないが砂っぽい胎土。焼成は並。外面ヘラケズリ。坏部はナデを軽く加えるか。坏内面はナデ、ミガキと言えるかどうか。雑な作り。	〃
36	高坏	$\frac{1}{3}$	14.7	11.9	9.9	黄褐色。胎土中の混入物少ないが砂っぽい土。焼成はやや甘い。坏部ヘラケズリ後ナデ、脚はヘラケズリ、内側すぐは横ナデあとはヘラで多少の整形。	〃
37	高坏	$\frac{2}{3}$	14	11.3	11.7	ヨコナデ、胸以下ヘラケズリ	〃
38	高坏	脚部	13.2	×	×	ヘラケズリ、ヨコナデ	〃
39	高坏	脚部	13.1	×	×	ヘラケズリ、ヨコナデ	〃
40	高坏	脚部	×	×	9.7	ヘラケズリ、ヨコナデ	〃
41	高坏	脚完	×	×	10	黄褐色。胎土中混入物少なく砂っぽき目立ち焼成甘い。ヘラケズリの一面が細く気を使ってケズリを加えたか。	〃
42	高坏	脚上完	×	×	11.5	黄褐色。胎土中に混入少なく砂っぽい土。焼成甘そう。ヘラケズリのあと脚下半はナデ加わるか。	〃
43	高坏	脚上完下 $\frac{2}{3}$	×	×	11.5	黄褐色。胎土中の混入物少ない砂っぽさはそれ程でもない。ロクロ引き、外面ヘラケズリ、わりと面取りを生かしてある。	〃
44	高坏	脚のみ	×	×	12.5	黄褐色。胎土砂っぽい。焼成甘い感じ。坏部ヘラケズリ後ナデ、脚部ヘラケズリ+ナデ下半部はヨコナデしている。	〃

45	高坏	脚のみ	×	×	12	黄褐色。胎土中の混入物もなく、焼成並。外面へラケズリの後ナデ。	〃
46	培	口縁 $\frac{2}{3}$	14.8	×	×	赤褐色。内外面ともよくミガキ加える。胎土中に小砂利等含む。焼成は良。	第63回
47	大型培	口縁完胴 $\frac{1}{2}$	15.2	×	×	黄褐色。煮こぼれか。ススと変色部ある。胎土良好。混入物少ない。焼成も良。全面にヘラミガキ加える。口唇直下にはミガキ残るもハケ目残る。	〃
48	培	ほぼ完形	11.8	8.8	3.3	暗茶褐色。火にかけられたものか。底部近くが荒れており口縁までススが付着。胎土はそんなに混入物多くなく、内外面ともよくミガキ加えられている。器面の荒著しい。	〃
49	小型壺	$\frac{2}{3}$	10.5	7.8	4.2	赤彩色。砂っぽい胎土。焼成良好。外面へラミガキ。内面へラミガキ。	〃
50	小型壺	$\frac{1}{3}$	14.8	12.6	3.3	暗茶褐色。胎土中の混入物少なく、焼成良。内外面ともハケ整形後、内面はヘラミガキ。外側も磨くが難、脇部にスス付着。	〃
51	小型壺	完形	10.5	6	4.5	黄褐色。胎土中に小砂石含む。上半分ハケ整形。かるくなじで脇へラケズリ+ナデ内面ハケナデ。	〃
52	小型壺	$\frac{2}{3}$	10.8	5.6	4.5	赤褐色。胎土中に微細な混入物多く焼成は並。外側ハケ整形後ナデ仕上げ。内面ミガキ加えたか難な感じ残る。口縁側にハケ目残る。	〃
53	小型壺	口 $\frac{1}{2}$ 胴完	11	6.5	3	黄褐色。胎土中に小砂含み器面に気泡等みられる。焼成は良。外面ともみがきを加えるか。内より外のほうのがみがきがていねい。底面近くにスス状のもの付着みられる。	〃
54	小型壺	$\frac{2}{3}$	×	×	2	黄褐色。胎土焼成共に良。外面へラケズリ細く削る。内面へラによる仕上げへラ先の傷残る。	〃
55	坏	完形	5.5	1.1	3.2	黄褐色。胎土中に砂粒含みクッキー状。外側は一応ミガキ加えているが底部転用。外周口縁部はケズリ加える。	〃
56	壺	口縁	22.5	×	×	赤褐色。胎土中の混入物は極めて小さな砂粒。焼成はまづまず。ハケ整形後外面ミガキを加えたものが脇部に感じられる。部分的にハケ目残る。口縁内側はハケ目を残している。器内は厚くはないが何となくボテッとした感じある。	第64回
57	壺	口縁	15.8	×	×		〃
58	壺	口縁 $\frac{1}{4}$	7.2	×	×	黄褐色。胎土中に砂粒目立ち、焼成甘そう。内面はをがく。外側は磨滅でよく整形わからない。	〃
59	壺	口縁 $\frac{1}{2}$	15.5	×	×	黄褐色。砂粒雲母細片少々含む。胎土荒い感じ。器面はユビナデ仕上げ。内面は一応ミガキを加える。	〃
60	壺	口縁 $\frac{1}{4}$	17.6	×	×	黄褐色。胎土中良好。焼成良。かたい、内外共に丁寧にミガキ加えられる。	〃
61	壺	口縁のみ ほぼ完形				黄褐色。胎土中に砂粒等含み荒い土。焼成はあまり良くない。外側、整形時へラケズリ後、ユビナデで行ない、内面も磨くがあまり丁寧な作りではない。	〃



第64図 造構外（O.D.、1Dグリッド）出土土器実測図（その3、1/4）

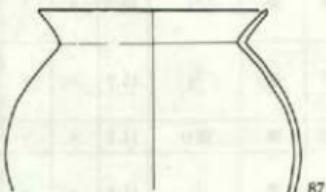
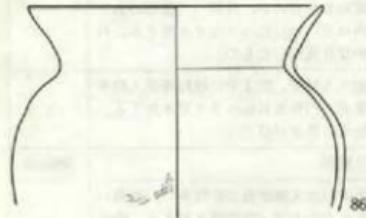
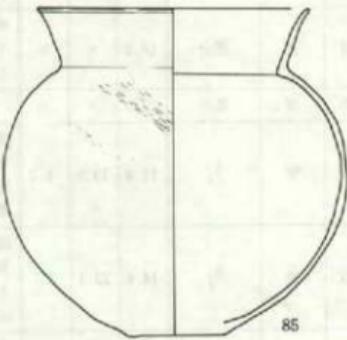
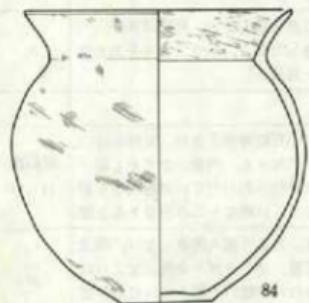


第65図 遺構外 (O.D. 1D グリッド) 出土土器実測図 (その4, 1/4)

62	甕	口縁	15.6	×	×		ノ
63	甕	口縁 (S字状)				黄褐色。やや砂っぽい胎土。きめの細かい整形を施す。焼成良好。甕母少々含む。口縁～肩部にかけて、かなりするどい屈曲を示す。	ノ
64	甕		×	×	×	赤褐色。砂っぽい胎土。焼成は良。口縁と肩部の境を棒状のもので引いている。	ノ
65	甕	1/4	21.8	×	×	暗茶褐色。胎土中の混入物少なく、やや砂っぽいも良い胎土。焼成は普通。胴上半は全面ハケ、整形、下1/3ほどはハケ整形後へラミガキを行う。ハケ目は残る。内側、肩以上にもミガキ加えるが煮物用か、内面はくり目立つ。	ノ
66	甕	1/3底部欠く	23.2	×	×	黄褐色。多少小石粒を含むも胎土は良好。焼成も良。外面にススの付着、焼けこげ等みられる。ハケ整形、内面は一応ミガキ加えたものと思われるが煮物用か、内面が荒れ氣味。	ノ
67	甕	1/3	17.8	×	×	胎土中に小砂粒多く含むが焼成良好。ハケ整形、まりとベタッという感じで引いている。内面横のヘラナデ、わりと雑な仕上げ。口縁内側はハケ仕上げのうえ、かるくナデを加えている。	ノ
68	甕	1/3	20.4			暗茶褐色。胎土、小砂粒含むも、丁寧な仕上げ。全面ハケ目、外面スス付着。内面へラミガキ。口縁内側横ハケ目、部分的にナデを加えている。	ノ
69	台付?	脚部(?)	×	×	9.6	赤褐色。胎土あまり砂粒等目立たない。焼成やや甘い。外面ハケ整形、内面煮物に用いたと思われる様な荒れ等が感じられる。	ノ
70	台付?	脚部(?)	×	×	5.3		ノ
71	甕	完形	19.7	22.8	6.4	胎土中に小砂粒等含む。焼成は普通、外はハケ整形、かなりいいかげん。口縁はナデを加えてハケ目をざつとすり消す。胴下半も同様。すり消したあと再びざつとでたらめな方向にハケをなでていい。全面スス付着あり。	第65回
72	甕	口縁1/3	20.3	×	×	暗茶褐色。胎土中に小砂利等の混入物多いが口縁内側～外面にかけてミガキを加えて一応仕上げをしている。またススの付着外面に著るしいハケ目が胴内面に残る。外面には口縁外面にミガキ残しあり。	ノ
73	甕	1/3	22.7	×	×	赤褐色。繩文土器みたいな胎土。焼成。口唇ややめくれ氣味。ハケ整形もへんな感じで、胎土、焼成としつくりこない。胎土には砂粒、甕母片などみられ砂っぽく荒い。	ノ
74	甕	ほぼ完形	19.5	18.7	4.8	胎土焼成ともましまず。外面ハケ整形かなりでたらめ。方向一定せず。面倒くさそうにハケをベタベタとした感じ。内側を磨くとき、外面も多少なでた程度。実用一点ぱりの品。	ノ
75	甕	部分	14.8	×	×		ノ

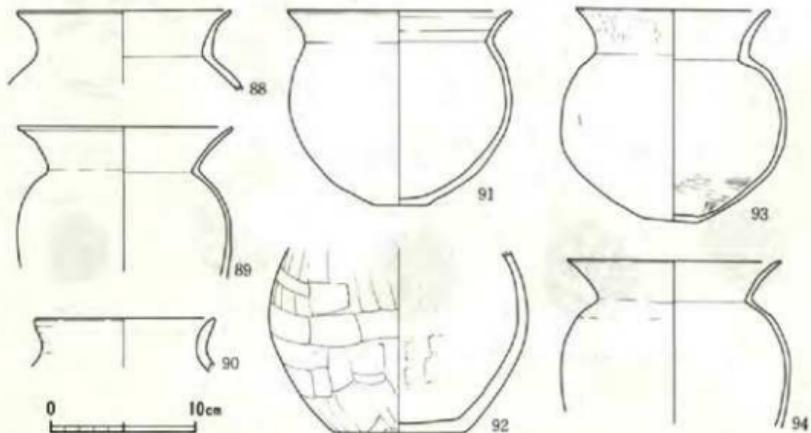
76	甕	部分	14.4	×	×	黄褐色。ハケ整形後、ヘラミガキ及びナデを加える。丁寧な作り。外面にはスス付着。内面も丁寧にミガキ加えられる。口縁内側ハケで整形を加えるが、ナデのためやはり消え気味。	II
77	甕?	%	15.6	13.4	×	黄褐色。多少小石砂粒含むも砂っぽい胎土。まずまずの仕上げ。ハケ目はかるくなので消しており、ところどころに残ったという感じ。内面はあまり丁寧な仕上げではなく、ミガキたりない感じ。煮物用か、有機質のススケた感じあり。外面火によりややススケた感あり。	II
78	甕?	部分	16.5	×	×	暗茶褐色。胎土中に細石粒等混入。雲母微細片もみられる。焼成は並、外面ハケ整形、口縁内側はハケのあとナデ加えハケ目はわずかに残る程度。内側へラミガキ、胎土とあいまって雑なまま。	II
79	甕?	%	15.5	×	×	赤褐色。胎土中にあまり混入物等ない。焼成は並。外ハケ整形、胴下半はナデを加えているようす。口縁外面も同様ナデ残りあり。内面はヘラミガキ加えるも丁寧ではないスス付着。	II
80	甕?	%	13.1	×	×	黄褐色。砂っぽい胎土。小石等は少ない。外の器面の荒れは火にかけたためか。ススの付着はないが、痕跡はある。ヘラケグリ後ナデ、内面一応ミガキ加えるもあまり丁寧ではない。	II
81	甕	%	16.4	×	×	赤褐色。焼成は良。胎土中に小砂粒含む。ハケ整形、口縁付近は整形後、口唇整形のためナデときハケきしている。内面はあまり丁寧に整形されておらず砂粒穴目立つ。	II
82	甕	部分	18.3	×	×	赤褐色。胎土中の混入物少ない。焼成は良好。ハケ整形を全面に施したあと、ヘラミガキを加えたか。部分的にハケ目残る。	II
83	甕	部分	20.2	×	×		II
84	甕	%	18.4	19.8	6.2	黄褐色。胎土中に小石粒等多く含む。又砂っぽい。全面ハケ整形後ナデ加える。内側のミガキも雑。胎土中に含まれる砂利小石のたぐいが器内から剥離して小穴もあくぐらいたる雑なところが見える土器。	第68図 (4-2)
85	甕	%	18.6	22.1	7	暗茶褐色。胎土並。あまり混入物多くない。焼成良。外面にスス付着。セラミガキ全面に加えられる。ミガキはていねいで他の土器みたいにハケ目はほとんど残らずかなり密にミガキ加える。	II
86	甕	%	20.3	×	×	黄褐色。焼成はやや甘いか。外面ハケ整形のあとヘラナデ。内はていねいにヘラミガキ加える。外にスス付着かなり使用したもの。	II
87	甕	%	15.7	×	×	黒褐色。外面スス付着。胎土中に砂粒等混入物多い。焼成は普通。内外面共にヘラミガキ加える。光沢はあり胎土の荒さが目立つ。	II
88	甕	部分	14.8	×	×	胎土雑。ハケ整形	第66図
89	甕	%	14.8	×	×	赤褐色。胎土中の混入物微細な砂粒多い。外面ハケ整形のあとナデ仕上げ。内面磨き加える。焼成普通。やや薄手。	II

90	壺	部分	12.5	×	×		II
91	壺	口 $\frac{3}{4}$ 胴ほぼ完 底無	15.5	15.3	4	暗茶褐色。胎土中に多少砂粒含むも焼成は並。ハケ整形後ヘラ先で全面にミガキ加える。胴下半部スス付着あり。	II
92	壺	部分	×	×	9		II
93	壺	$\frac{1}{2}$	13.5	14.4	3.5	黄茶褐色。胎土中に小砂利含み、混入物や目立ち器面に表われる。焼成はやや甘い。胴下半にススの付着のあとあり。ハケ整形後、ヘラミガキを加えるか。ヘラ先のあとと、ハケ目少々残る。	II
94	壺	$\frac{1}{3}$	14.8	×	×	赤褐色。外面スス付着。胎土中に金雲母。微細な白色砂粒等含む。焼成は普通。全面にナデて仕上げ内側のミガキもありていねいではなく、さつとした程度。	II

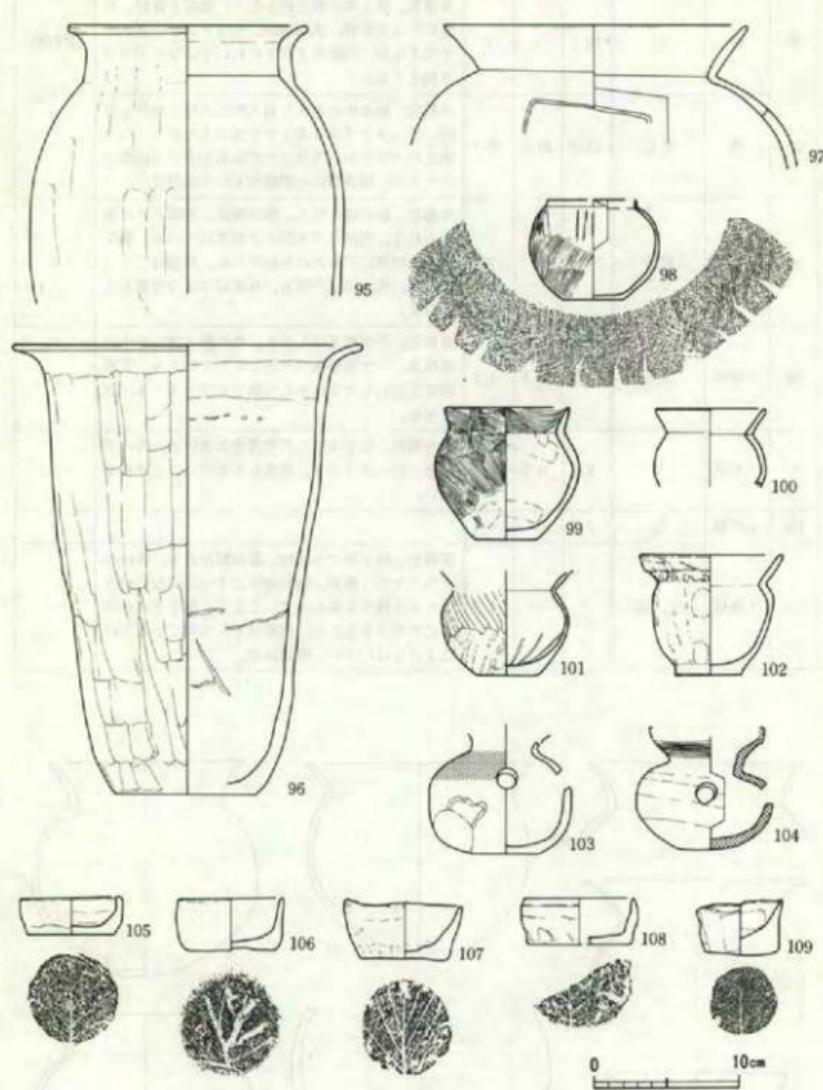


(4-2)

95	甕	$\frac{1}{3}$	16.3	×	×	黄褐色。胎土中の混入物少なく、焼成も良好。外面にスス付着等、煮用用か。ヘラケズリのあとナデ加えるか。内面あまりていねいではないがミガキ加えてある。	第67図
96	甕	完形	23.9	30.3	9.7	赤褐色。胎土中にあまり混入物もなく焼成も良好。外へラケズリゆるくナデ加えるためか、ヘラあとがゆるやか。内ヨコナデのあとタテ方向のヘラナデか。接合部に一部難なところが目立つ。	"
97	甕	部分	20.6	×	×	赤褐色。砂っぽい胎土。焼成普通。外面スス付着みられる。内面ミガキ加えるが荒れている。胴中央部に四角に穴があけられている。残部はごく一面の為。用途等は不明も、外面にススの付着もみられる。	"
98	小型甕	完形	6	6.8	4.2	黄褐色。下半部黒はんあり。やや砂っぽい胎土。焼成良。ハケ整形後ヘラ先でキザミ加える。実測図で正面にした3本から左順りに2-4-4-3となる。	"
99	小型甕	$\frac{1}{2}$	8.6	8.9	4.3	暗茶褐色。胎土中に小石粒等含み荒い土。外ハケ整形。内へラミガキ。焼成もありいいとは言えない。	"
100	小型甕	$\frac{1}{3}$	7.5	×	×		"
101	小型甕	口 $\frac{1}{6}$ 、胴完	×	×	4.3	茶褐色。胎土中に小砂粒、雲母細片含む。外はヘラ先でケズリ整形。時計回りにすっと行ない粘土のケズリ残りを楽しんでいるよう。胴下半は逆むきにケズリを入れる。内面はそんなにていねいに仕上げてはいない。焼成は並。	"

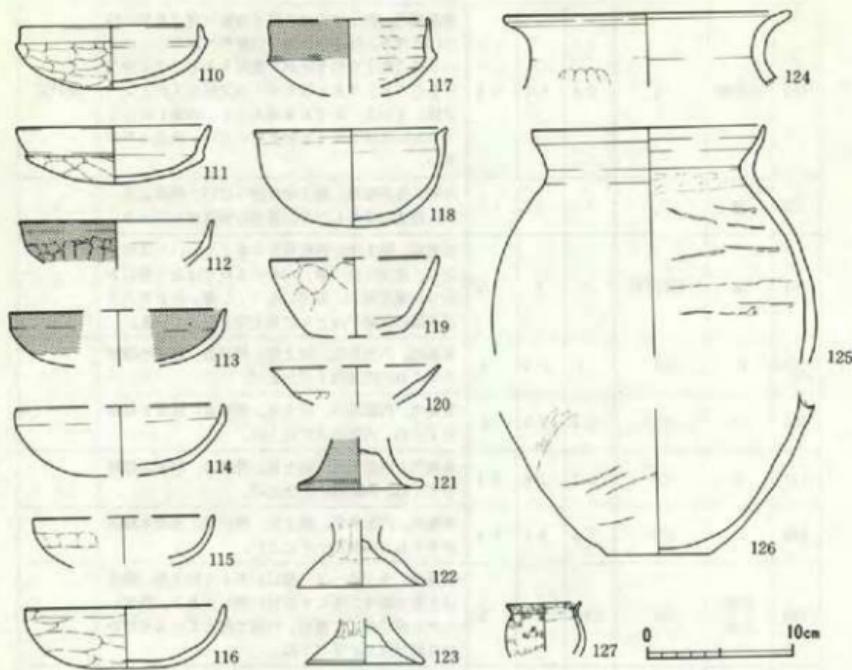


第66図 遺構外（O.D.、1D グリッド）出土土器実測図（その5、1/4）



第67図 遺構外（O.D., 1Dグリッド）出土土器実測図（その6, 1/4）

102	小型壺	1/2	9.8	8.1	4.5	黄茶褐色。胎土中にはさほど砂粒は含まれるやや砂っぽさ残る。仕上げは雑。口縁部～肩部にかけてヘラ先で粘土を引き下げて整形するところ半分だけきちんととしてあとはキザミの文様を入れるように残している。かぎりを考えたか。内面もさほどいねいにはミガキを加えていない。焼成はやや悪い。	第67回
103	壺	1/2	X	X	4.7	赤彩。黄茶褐色。胎土中は砂っぽい。焼成は良。二次焼成によるものか。器面の剥落がみられる。	"
104	壺	ほぼ完形	X	X	3.5	須恵器。胎土中に砂粒等含みあまりいいとは言えない。焼成は良「釉」がかかる程ではなく肩のあたりが雑な感じ。肩部にも「くし書」があるのだが表面の剥離でほとんど見えなくなっている。	"
105	壺	完形	7	2.5	6	黄褐色。内面黒色。胎土良。焼成並。底部木様跡手すくね。内面指ナデ仕上げ。	"
106	壺	完形	7.2	3.5	6	黄褐色。内面黒色。胎土良。焼成並。底部木様跡手すくね。内面指ナデ仕上げ。	"
107	壺	完形	8.2	3.8	5.1	黄褐色。内面黒色。胎土良。焼成並。底部木様跡手すくね。内面指ナデ仕上げ。	"
108	壺	完形	7.5	3.1	6.8	黄褐色。内面黒色。胎土良。焼成並。底部木様跡手すくね。内面指ナデ仕上げ。	"
109	小型土器	完形	X	X	5	黄褐色。多少砂っぽい感じがあるも胎土良。焼成は土質支脚等の様にやや甘い感じがある。外荒いヘラと指で押えて整形。内指で押えているだけかなり雑な作り。手すくね。	"
110	壺	1/4	12.6	4.3	4.4	黄茶褐色。内黒。胎土粒子は荒く、焼成もあり良いとは言えない。ヘラケズリによる面取りは荒いけど全面されているためあまり目立たない。	第68回
111	壺	完形	13.3	3.9	4.6		"
112	壺	口縁3/5	13.3	X	X	赤褐色。赤彩、焼成は甘そう。胎土中砂分多そう。内面はよく磨かれている。肩下半は荒いヘラケズリ。	"
113	壺	1/4	14.9	X	X	内面はよ全面に赤彩、外面も底部ぐらいまで。ヘラケズリ後、内外面とも丁寧なミガキを加えている。胎土、黄褐色。あまり大粒な砂粒等みられず焼成はやや甘。	"
114	壺	1/4	14.3	X	X	外面暗茶褐色、くらっぽい。内面暗赤褐色。外面はヘラケズリ後ナデにより丁寧に仕上げられ内面はそんなに丁寧とは言えないが、ミガキが加えられている。	"
115	壺	1/5	X	X	X	黄褐色。底部近く黒変。整形後ヘラ先で切り込みを入れている。外面ヘラ整形、内ヘラミガキとともに丁寧。	"
116	壺	1/3	13.8	4.2	5.8	黄褐色。胎土中に砂粒等含む。焼成は普通やや荒いヘラケズリのあとかるくナデたような感じある。内面は一応ミガキを加える。全体としてあまり丁寧ではないが、一応の仕上げはしてある。	"



第68図 遺構外 (O.E., 1E グリッド) 出土土器実測図 (1/4)

117	坏	$\frac{3}{4}$	11.2	×	×	口縁部赤色。外面丁寧なミガキのあとがみられる。ただ二次焼成か器面荒れている。内面は丁寧なナデ胎土。やや砂粒等みられる。あまり良いとは言えない。焼成は良。	第68図
118	杯	$\frac{4}{5}$	13.4	6.7	4.4	赤褐色。外面へラケズり後ミガキを加える。焼成はまあ良と言えよう。胎土中には砂粒が含まれる。やや目立つ底部にスス付着。二次焼成加わる。	〃
119	杯	$\frac{3}{4}$	11.8	5.3	6.5	赤黄褐色。内面ふきこぼれか、有機質状の付着らしきものみられる。内外面とも丁寧な磨きによる仕上げがみられる。	〃
120	高杯	$\frac{5}{6}$	11.8	×	×	黄褐色。砂粒多く焼成あまり良くない。口縁下ヨコナデ。同ヘラケズリ内面あまり丁寧な磨きを加えてない。	〃
121	器台	脚のみ	×	×	8.7	黄赤褐色。焼成やや甘い感じ。胎土中にはあまり砂粒等含まれない。外面、赤彩、ヘラナデ、内面ヘラケズリ、指ナデ痕あり。	〃
122	器台	脚のみ完形	×	×	8.9	赤褐色。胎土中の混入物少なく、砂っぽい土。焼成は普通かやや甘い。赤色処理。カマド内支脚に代用か砂、粘土がこびりついていた。	〃

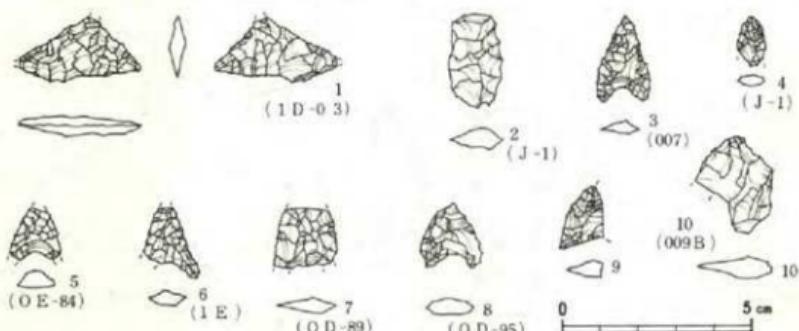
123	器台	脚のみ完形	×	×	8.2	黄褐色。混入物胎土中に少ない。砂っぽさある。焼成やや甘いか黒色処理あり。	第68図
124	壺	口縁のみ	19.6	×	×	内外面共に丁寧な磨きが施されている。口縁部のみ胴はない。ヘラ整形か、残りの作りは丁寧。赤褐色石英等の微少な砂粒含む。焼成も良。内面はふきこぼれか黒色に変色した所みられる。	ノ
125	壺	口～胴	16	×	×	赤彩色。二次焼成。内面の雑なヘラ整形に比べて外面の整形丁寧。にずい分と差のある作り。焼きはやや甘いか。	ノ
126	壺	胴下半	×	×	7.1	外暗茶褐色。内赤褐色。胎土中小砂粒多い。整形内ヘラミガキ。外ヘラケズリ。	ノ
127	小型壺	1/3	5.2	×	×	黄茶褐色。焼成やや甘めか。胎土中に小砂粒みられる。外ヘラケズリハケ整形のあとナデている。内面口縁内側はハケ目、胴内側はハケのあとナデか。	ノ

VI. 遺構内および遺構外出土の土製品・石器・鉄製品・銅製品

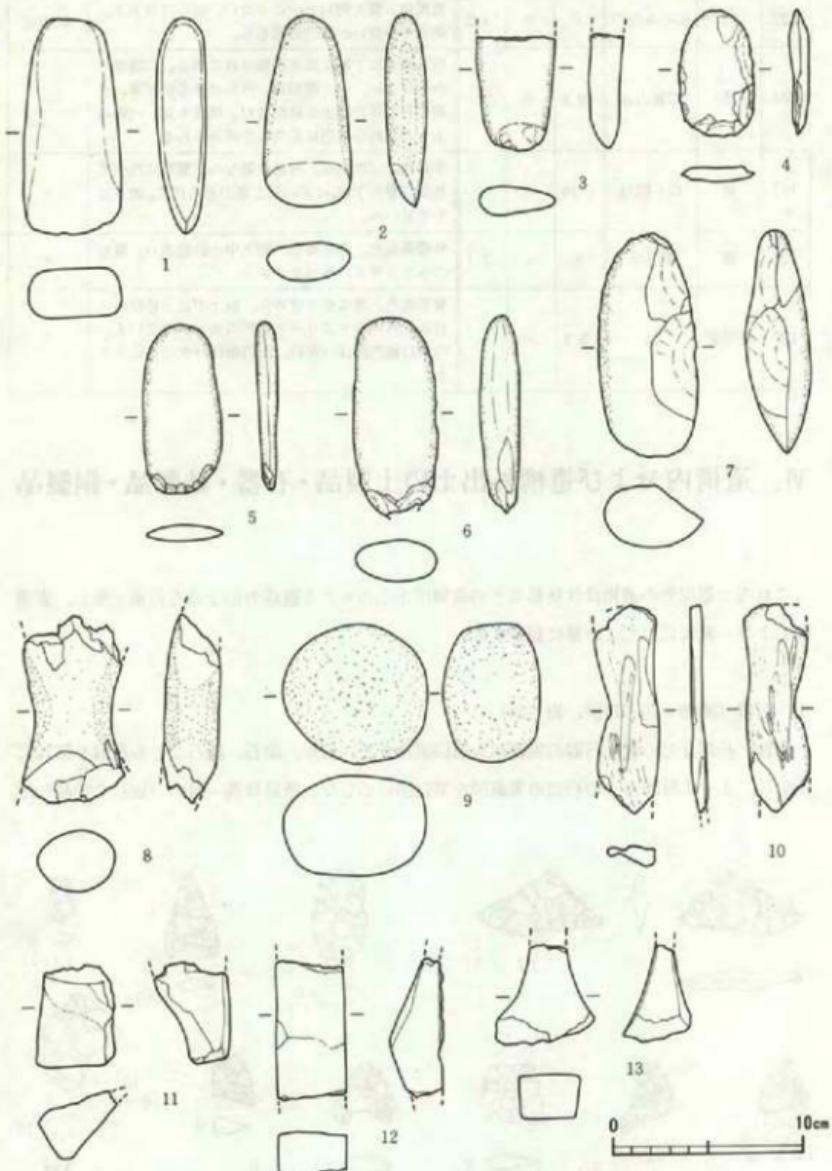
これら土器以外の遺物は住居跡などの遺構内出土のものと遺構外出土のものを一括し、実測図および一覧表にしてこの章に記載する。

1. 石器（第69・70・71図、表-24）

石匙、石鎌などの剥片石器の実測図を第69図にまた、石斧、敲石、砥石などの石器を第70図に示し、J-1号跡出土の石皿の実測図を第71図に示した。所見は表-24に一括して記載した。

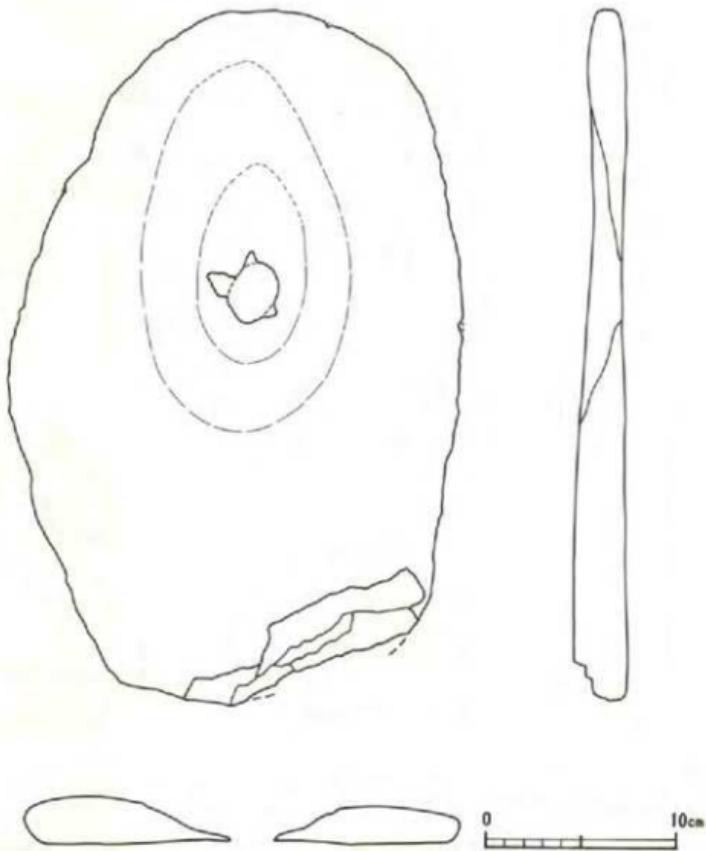


第69図 石器実測図(その1, 2/3)



第70図 石器実測図(その2, 1/3)

砥石は古墳時代以降のものであり、他はすべて縄文時代の遺物と考えられる。ただ、縄文時代のものも各期にわたっているのが見られる。石斧では3が燃糸文期、5が条痕文期、4、6、7が縄文前期、1、2が縄文中期、8が縄文中、後期に多く見られるものである。

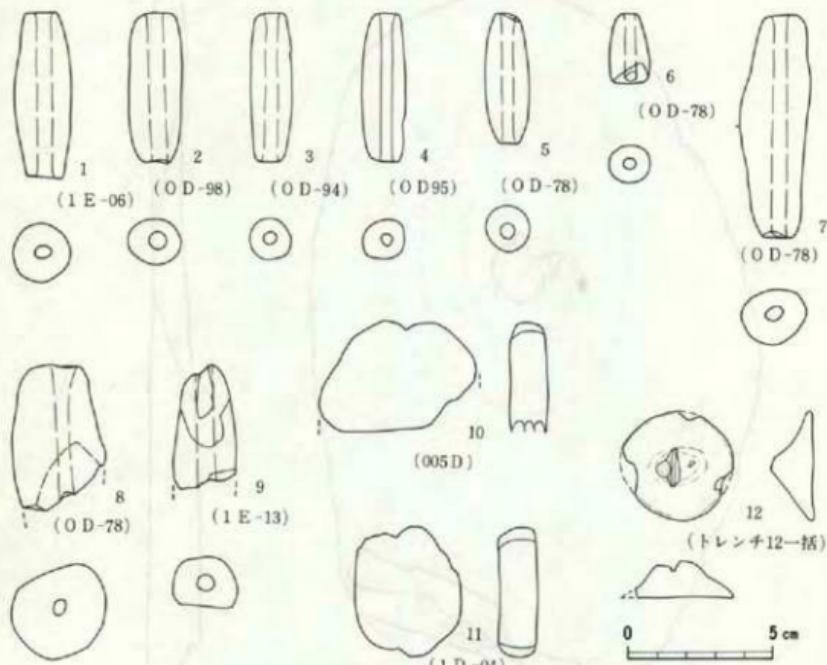


第71図 石器実測図（その3・F-6号跡出土、1/4）

2. 土製品（第72図、表-25）

実測図を第72図に示し、また表-24に一括して記載した。

管条土錐は古墳時代以降のもので、土器片は縄文時代のものと考えられる。これらは漁労に関する遺物であり、本遺跡が近接している小櫃川における漁労活動が少なくとも縄文時代以降行われていたことを想定させるものである。



第72図 土製品実測図 (1/2)

3. 鉄製品・銅製品（第73図）

実測図を第73図に示した。

1～3は鉄錐である。1は004F号住居跡の床面よりやや浮いて出土。先端部が欠損している。2は傾面包含層の0 D87グリッドから出土。3は005D号住居跡の床面直上より出土。とともに先端部と基部が欠損。4は刀子である。峰部の間は不明確である。斜面包含層の0 D78グリッド出土。先端部と基部が欠損。5は鉄錐である。先端部のみ遺存。0 E95グリッド出土。6は銅錐である。Y-2号住居跡の覆土中から出土した。覆土中一括遺物の中から見出されたため出土位置は不明となってしまった。

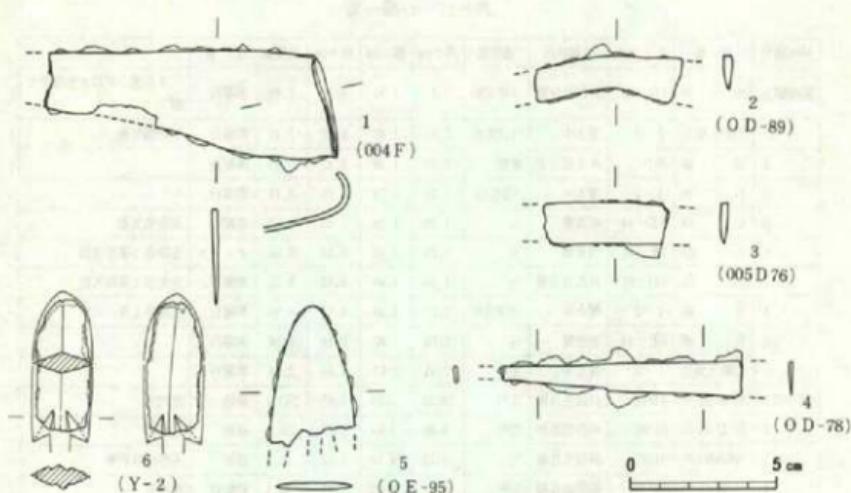
表-17 石器一覧

排列番号	種類	出土地点	位置状況	遺存度	長さcm	幅cm	厚さcm	重量(g)	石質	
第69図1	石塊	1D-03	斜面包含層	ほぼ完形	3.23	1.51	0.41	1.48	黒曜石	つまみ状小突起と側端部欠損
2	不明石製品	J-2	覆土中	ほぼ完形	2.43	1.40	0.52	1.49	黒曜石	1端部欠損
3	石頭	007	床下掘方中	完形	2.23	1.39	0.42	0.80	黒曜石	
4	石頭	J-2	覆土中	先端部のみ	1.24	0.74	0.25	0.18	黒曜石	
5	石頭	0E-84	包含層	%	1.39	1.28	0.45	0.62	黒曜石	先端部欠損
6	石頭	1E-1括	包含層	%	1.75	1.42	0.40	0.66	チャート	先端部と基部欠損
7	石頭	0D-87	斜面包含層	%	1.49	1.60	0.45	1.22	黒曜石	先端部と基部欠損
8	石頭	J-2	覆土中	ほぼ完形	1.73	1.58	0.47	0.80	黒曜石	先端部欠損
9	石頭	0E-94	包含層	%	1.76	1.07	0.48	0.58	黒曜石	
10	石頭未製品	J-2	覆土中	完形	2.55	2.01	0.60	2.24	黒曜石	
第70図1	磨製石斧	0D84	斜面包含層	完形	18.23	5.10	2.65	253.7	砂岩	定角式
2	磨製石斧	0D85	斜面包含層	完形	9.86	5.64	2.13	134.3	砂岩	定角式
3	局部磨製石斧	0D87	斜面包含層	%	5.73	4.10	1.67	56.9	砂岩	刃部のみ研磨
4	打製石斧	0D25	斜面包含層	完形	6.46	3.92	1.01	35.4	粘板岩	礫石斧
5	打製石斧	0D-1括	斜面包含層	完形	8.63	4.13	1.02	52.2	砂岩	礫石斧
6	打製石斧	0D87	斜面包含層	ほぼ完形	10.07	4.43	2.16	142.2	砂岩	礫石斧、側縁敲打痕、刃部欠損
7	局部磨製石斧	0D84	斜面包含層	完形	11.18	5.10	3.20	238.9	砂岩	一方の側縁に敲打痕、刃部のみ研磨
8	打製石斧	トレンチ8	包含層	ほぼ完形	9.55	5.65	2.71	191.7	粘板岩	刃部再生。側縁敲打痕
9	鐵石	0D94	斜面包含層	完形	7.68	6.93	5.15	391.8	石英斑岩	両面に済痕、側縁に擦痕
10	有溝鉄石	006	床面直上	両端欠損	10.82	3.20	0.98	42.8	頁岩	両面に溝あり。両端欠損
11	鐵石	1F-1括	包含層	%以下	5.44	4.12	4.014	177.3	安山岩質 凝灰岩	1端欠損。1面が多い使用
12	鐵石	0E97	包含層	%以下	7.10	3.53	3.02	101.1	白色細粒 凝灰岩	両端と1面欠損。欠損面の反対面を使用して棱ができる
13	鐵石	005C	床面近く	%以下	5.55	5.11	3.62	774.8	白色細粒 凝灰岩	両端欠損。4面を使用しているが裏底は明瞭でない
第71図1	石三	F-6	上面壁面に接して	ほぼ完形	45.18	30.84	3.63	4750	綠泥片岩	中央部が磨滅して底が抜けた

鉄滓(図版30)

住居跡及び一括品に鉄滓が混入していた。住居跡内のものについては擾乱時の混入品と考えられよう。

直接関係のある遺構は検出されていないが、製鉄・生産遺跡であった可能性がたかい。



第73図 鉄製品・銅製品実測図 (1/2)

表-18 土製品一覧

辨別番号	種類	出土地点	位置状況	遺存度	胎土	焼成	色調	重量(g)	
第72図 1	管状土錐	1E06	包含層	一部欠損	微小な石英・長石と砂粒を含む	良	灰黄褐色	15.32	長さ5.69cm 径1.88cm
2	管状土錐	0D78	斜面 包含層	完形	微小な石英・長石と砂粒を含む	良	暗赤褐色	14.25	長さ5.05cm 径1.83cm 表面の片側にキズが多い
3	管状土錐	0D94	斜面 包含層	完形	微小な石英・長石と砂粒を含む	良	灰黄褐色	8.48	長さ5.12cm 径1.98cm
4	管状土錐	0D95	斜面 包含層	完形	微小な石英・長石と砂粒を含む	良	灰黄褐色	8.68	長さ5.04cm 径1.56cm
5	管状土錐	0D78	斜面 包含層	完形	微小な石英・長石と砂粒を含む	良	灰黄褐色	8.74	長さ4.45cm 径1.57cm
6	管状土錐	0D78	斜面 包含層	少	微小な石英・長石と砂粒を含む	やや良	赤褐色	2.54	長さ1.36cm 径1.30cm
7	管状土錐	0D78	斜面 包含層	完形	微小な石英・長石を少量含む	良	暗褐色	27.98	長さ7.24cm 径2.06cm
8	管状土錐	0D78	斜面 包含層	少以下	微小な石英・長石を少量含む	良	灰褐色	34.12	長さ5.02cm 径3.34cm
9	管状土錐	1E13	包含層	少以下	微少な石英・長石と砂粒を含む	良	灰褐色	10.62	長さ4.19cm 径2.24cm 遺存がきわめて悪い
10	土器片錐	005D	覆土上部	少	石英・長石・砂粒を含む	やや良	黃褐色	23.75	無文織文土器片
11	土器片錐	1D-04	斜面 包含層	周縁がかなり欠損	石英・長石・砂粒を含む	良	黃褐色	24.78	無文織文土器片
12	土 製 品	トレンチ 12	包含層	一部欠損	石英・長石・砂粒を含む	良	灰褐色	9.15	底面ナゲ

VII. 岩出城跡について

文化課が現地踏査を行った際に調査区域の北西側は城跡である可能性があると指摘した。理由は郭・腰郭と見なされる平地面（第3図参照A区・B区・C区）が小櫃川の流路に向かって突出してあり、付け根部に土橋と堀切と見なされる地形が認められるという事からである。千葉県文化財センターが今回調査するに当たり、便宜的に岩出城跡と名付けたが、調査区域は突出した先端部の一部分であったため、地元での聞き取り調査、文献調査、地形測量などを発掘調査と合わせて行い検討した。

文献の調査によると、当地域周辺において中世には久留里城や、その支城の戸崎城などは記されており、存在が確認できるが、岩出地区に城が存在していたということは認めることができなかった。また、地籍図においても城跡と関連した字名や地名を見出すことはできず、地元の聞き取り調査でも城跡についての事は何も得られなかった。さらに、B区、C区、D区において行った発掘調査でも遺構は何も検出されず、中世の遺物も出土しなかった。以上のように、城跡と判断される材料は何も得られなかった。しかし、地元の聞き取り調査から、調査区域中央部に入っている谷の小櫃川の出口の地点は、かつて対岸への渡し船や、下流へ炭を運搬する船の船着き場であった事が判った。また、調査区域のC区の東からB区の北をまわって行く道は、現在は狭い道であるものの、古くは木更津街道と呼ばれた主要な街道であった事を聞くことができた。これらの事から、A区、B区、C区は陸路および水運に対して重要な位置を占めていたと見ることができる。さらに、調査前の状況は竹林であったが、この竹や周囲の雑木が無いとすると約1.2km下流に位置する戸崎城跡も見通すことができる。したがって、城跡とする根拠は何もないが、以上に述べたことなどから物見のためや連絡中継のための砦跡である可能性は十分考えられるであろう。特に約3.2km上流に位置する久留里城の里見氏に対しては、戦国時代後期において、北条氏方と数度にわたる攻防が知られており、近くの青柳向台遺跡では中世の鉛玉などが出土していて、里見氏と北条氏との攻防をうかがわせるものがある。このように、当遺跡周辺は緊迫した状況にあった時期があり、当遺跡も重要な位置を占めていたかもしれない。ただし、今回発掘調査を行った区域はごく一部分であり、中世の砦跡的な遺跡かどうかは今後の全面的な発掘などにより明らかにされていくとおもわれる。遺物としても土師器や須恵器の小片が数点出土したのみで、中世の遺物は出土しなかった。

VIII. 結 語

丘陵先端部でありかつ、小櫃川に面する段丘面と言うとこであまりその立地の例の少ない調査であったことが述べられよう。

そのなかで、縄文時代の住居跡 3軒、弥生時代 3軒、古墳時代—平安時代までの住居跡が21軒、とその他の遺構が 6 基とかなりひどい攢乱状況であったが、検出調査できたことは今後、当地域周辺の遺跡及び集落のあり方を考える上で貴重な資料と言えよう。

特に本遺跡周辺の集落は遺跡がこのまま後背台地に広がってゆくと思われる。

平坦面部に村落中央部を通道路ぞいに展開しており、中世の集落移動が多くみられるなか、その立地は縄文時代以来同一である、ということを考えられる。

また極めて面的に制限された地域の調査であったため、斜面部の調査は一部で終了したがこれだけ大量の土器が一括して投棄されている例はあまりなく、改めてこの地域における当刻時期の何らかの歴史的な変化ないしは問題点を追求し得る 1 点があるかも知れない。

岩出城についてはすでに述べてあるとおりである。残念ながら明確な城、ないしは砦としての用途・機能を示す遺構遺物は出土していないが、中央城跡（久留里城等中世館的な存在を含め）の外縁部施設の可能性も考えられることもあり、当地域の歴史的な変化一対応をもう一度改めて検討する必要があるだろう。

以上簡単ではあるが調査のまとめとしたい。

いかんせん路線内調査であるため、おのずとその全体を知り得ないため、多くの問題点を残してしまった。改めて今後の調査と研究に待つこととしたい。

写 真 図 版



岩出遺跡及び岩出城跡周辺の航空写真(1/10,000) 1971撮影



岩出遺跡遠景



岩出遺跡南東側平坦部発掘前状況(南東から)



岩出遺跡南東側平坦部発掘前状況(北西から)



001号跡



002号跡(手前), 003号跡(奥)



004 A号跡(奥), 004 B号跡(手前)



004 C 号跡(手前), 004 D 号跡, 004 E 号跡(奥)



004 A・B 号跡(中奥), 004 C・D・E 号跡(手前), Y-1号跡・004 F 号跡(右奥)



Y-1号跡(右端), 004 F 号跡(中央)



004 F号跡北カマド検出状況



004 F号跡東カマド検出状況



004 F号跡東カマド掘上り状況



Y-2号跡(手前), 005 A号跡(中奥), 005 B号跡(奥)



005 E・F・G号跡付近発掘状況



005 E・F・G号跡付近遺物出土状況



005 D 号跡遺物出土狀況



005 D 号跡遺物出土狀況近景



005 C・D・Y-3号跡(左側), 005 E・F・G号跡(右側)全景



F-1号跡



006号跡



遗構全景



008号跡(中央), J-2号跡(手前左端)



008号跡(左端), J-1号跡(中央), J-3号跡(やや右奥), F-6号跡(中央奥)



F6号跡遺物出土状況



F6号跡遺物近景



J-4号跡出土埋甕出土状況



埋甕



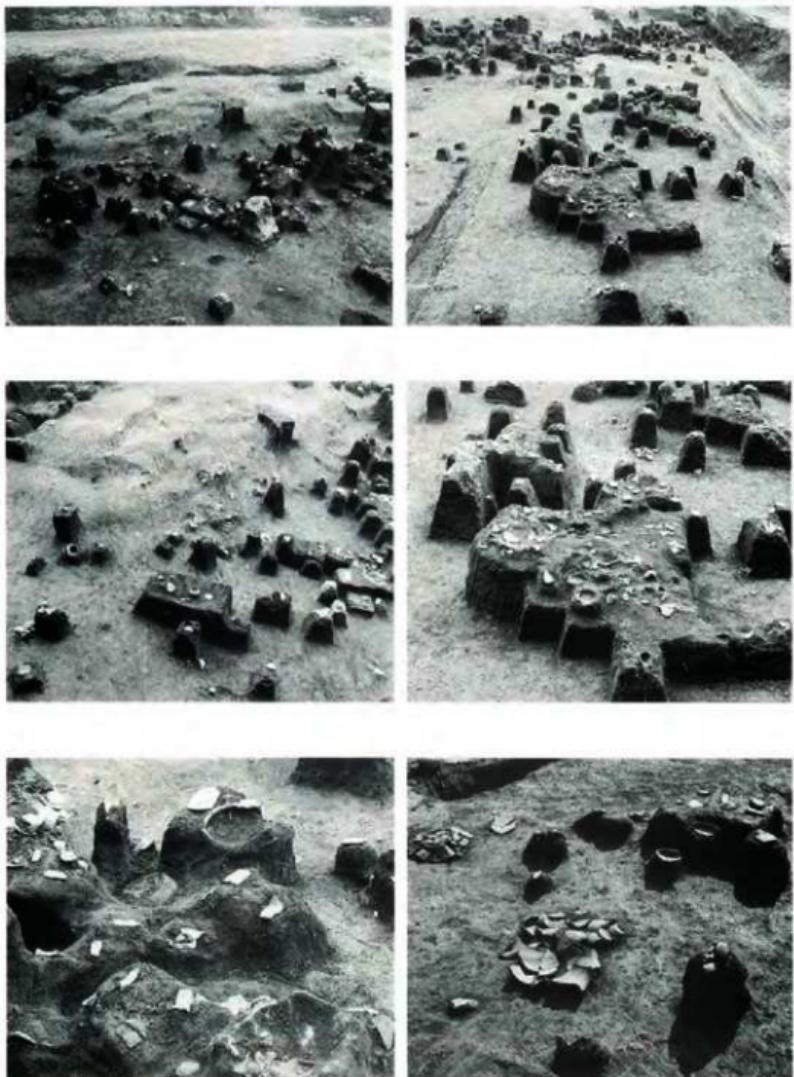
緩斜面部遺物出土状況



緩斜面部遺物出土状況



緩斜面部掘上り状況



緩斜面部遺物出土狀況(近景)



岩出城跡遠景(西から)



岩出城跡遠景(南西から)



岩出城跡(南東から)



岩出城跡(発掘前)



岩出城跡(近景)



岩出城跡(完了)



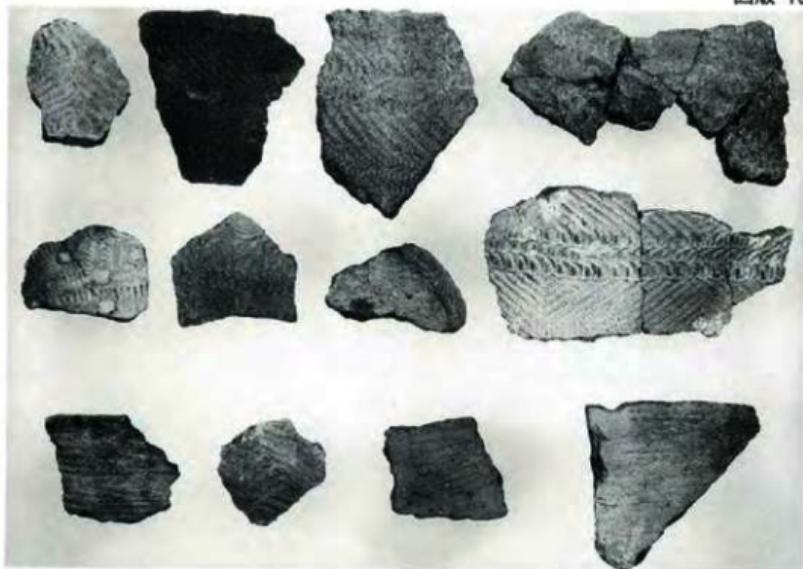
岩出城土壘(?)状況



岩出城周辺(調査区)近景



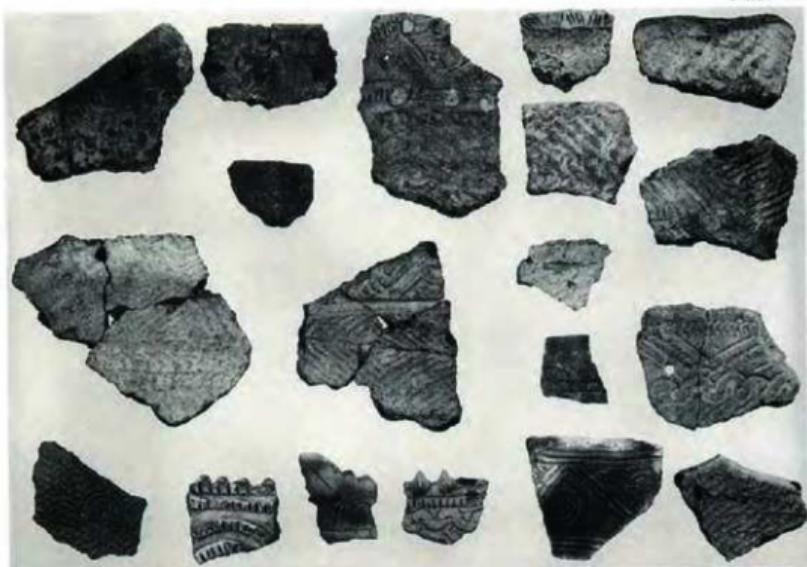
岩出城調査区近景



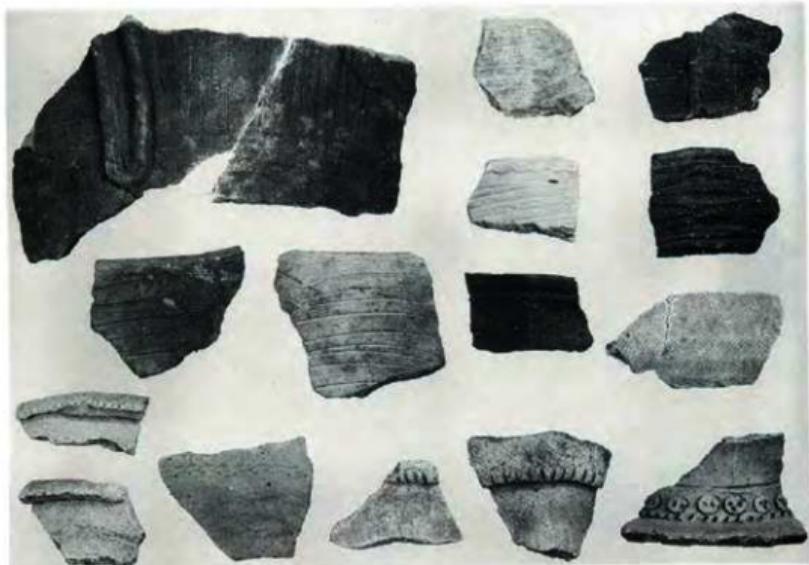
縄文土器 (1)



縄文土器 (2)

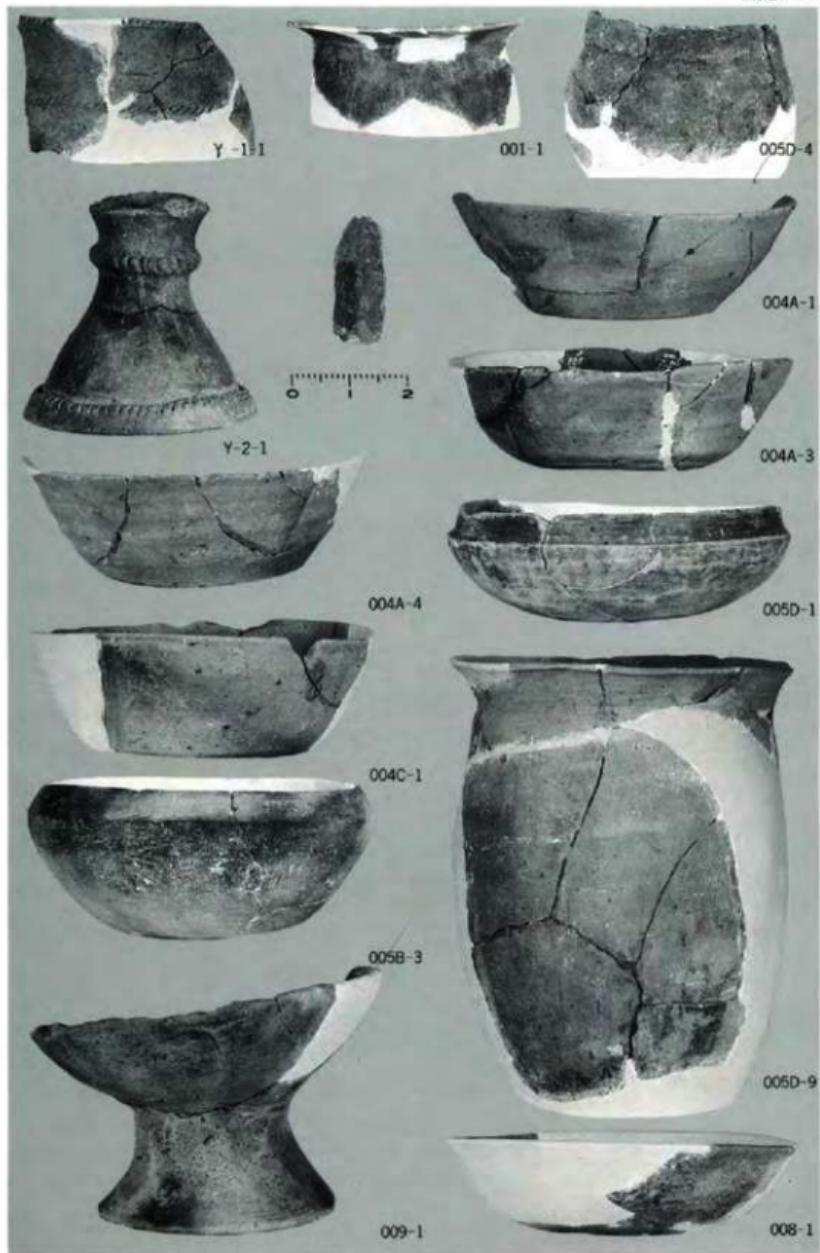


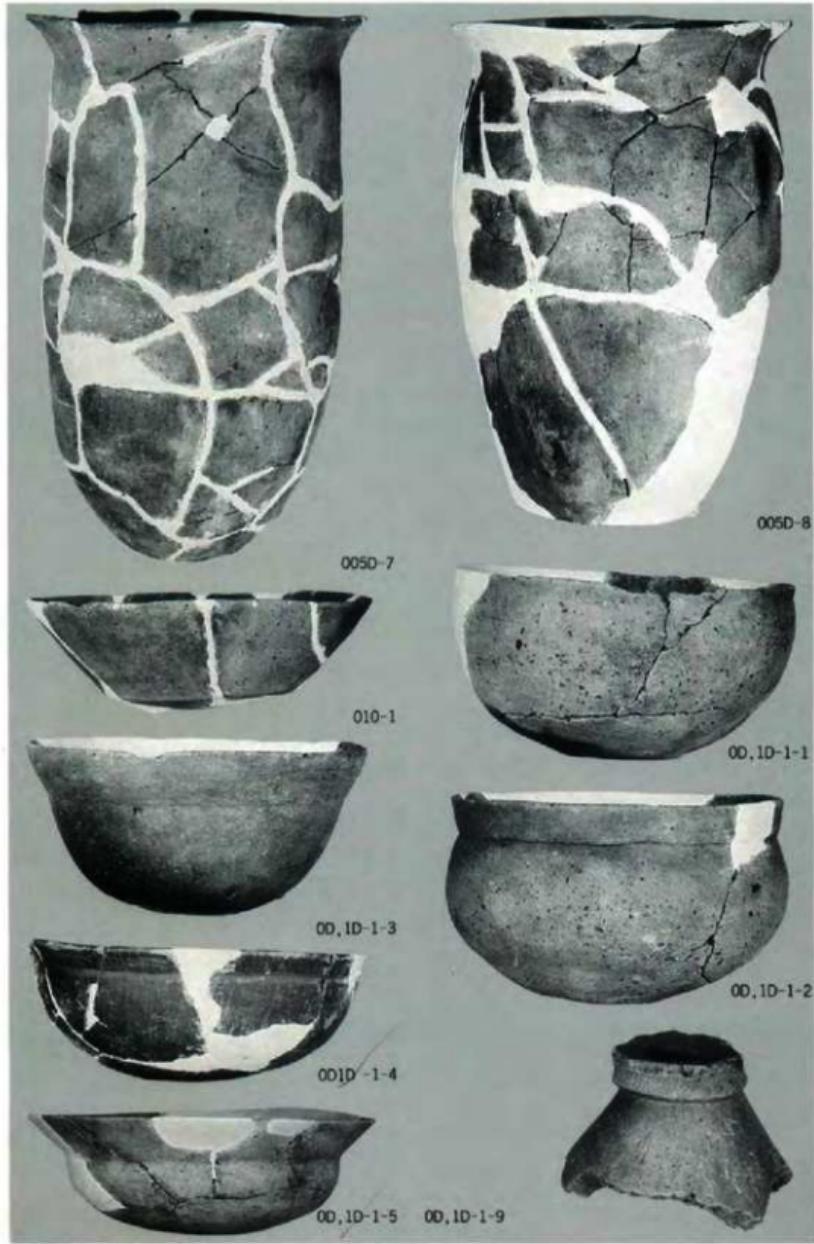
縄文土器 (3)

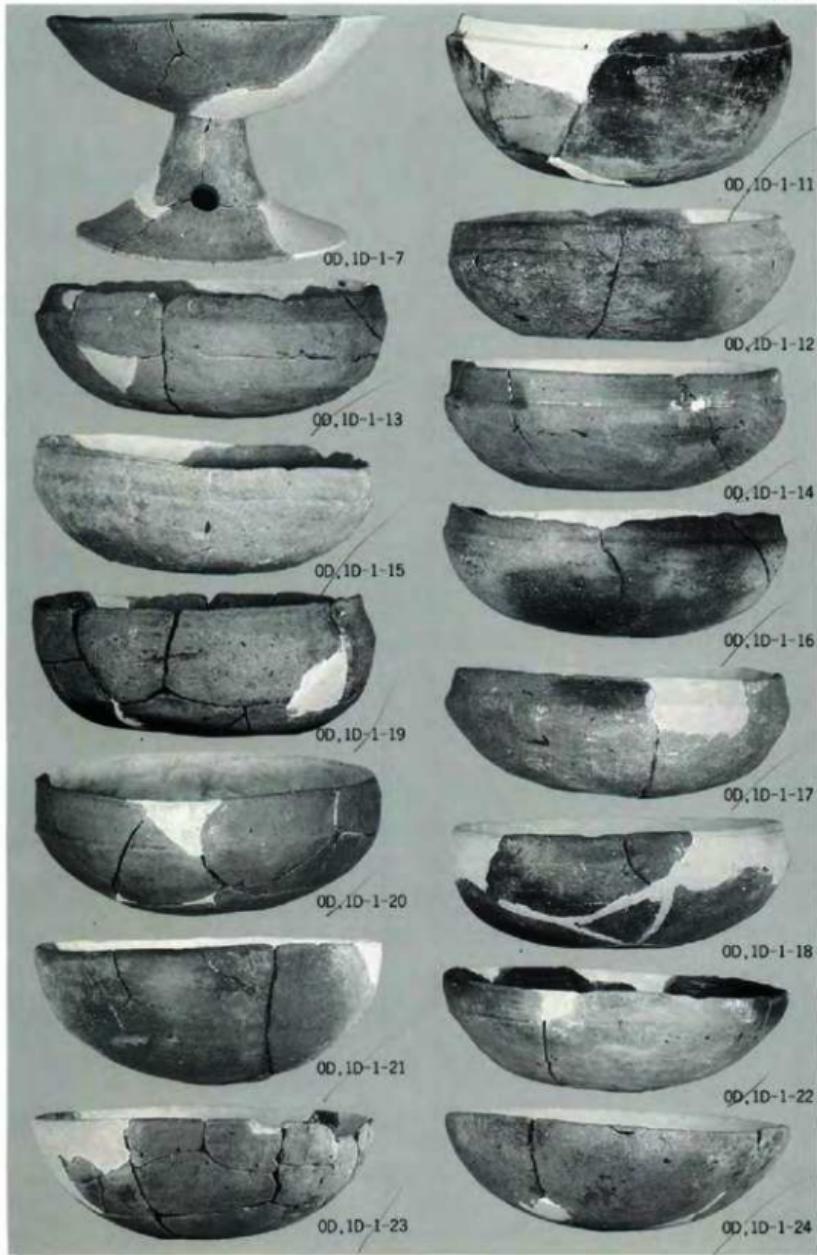


縄文土器 (4), 弥生土器

図版 18

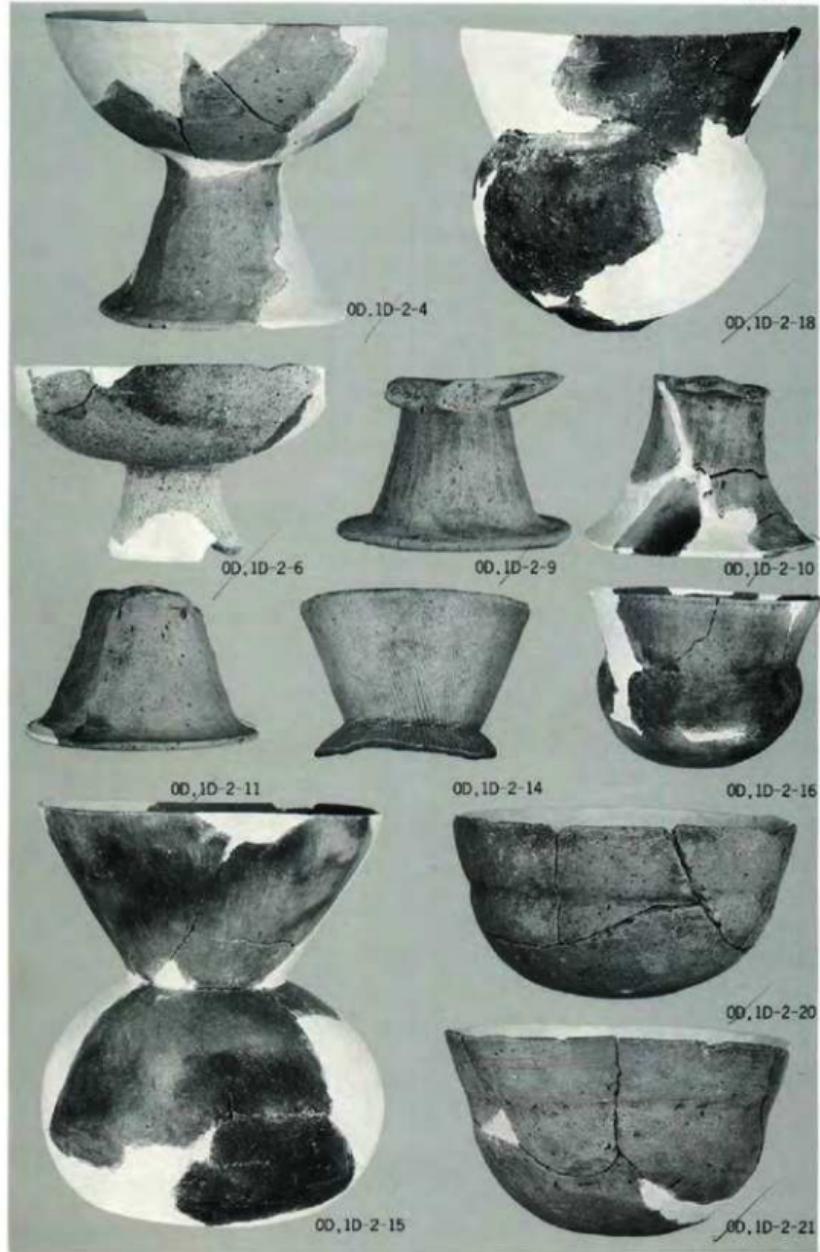


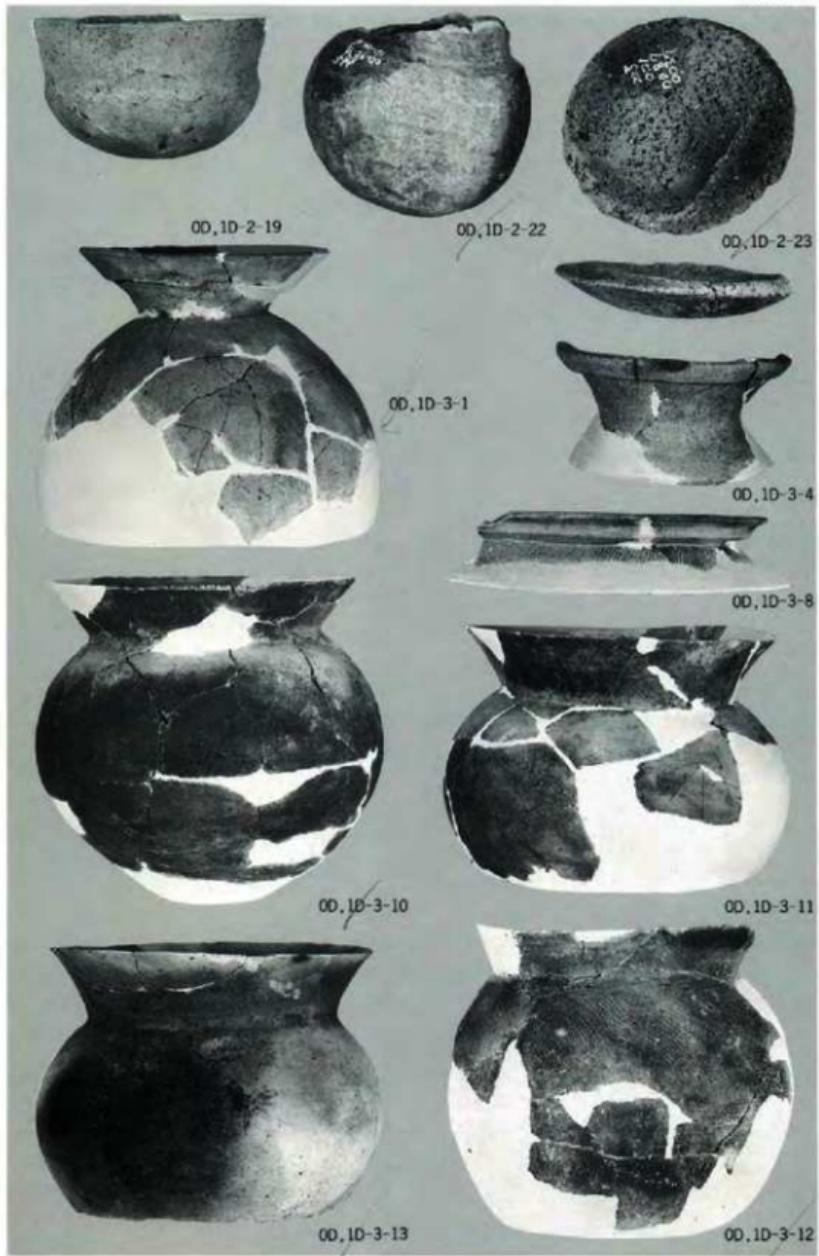


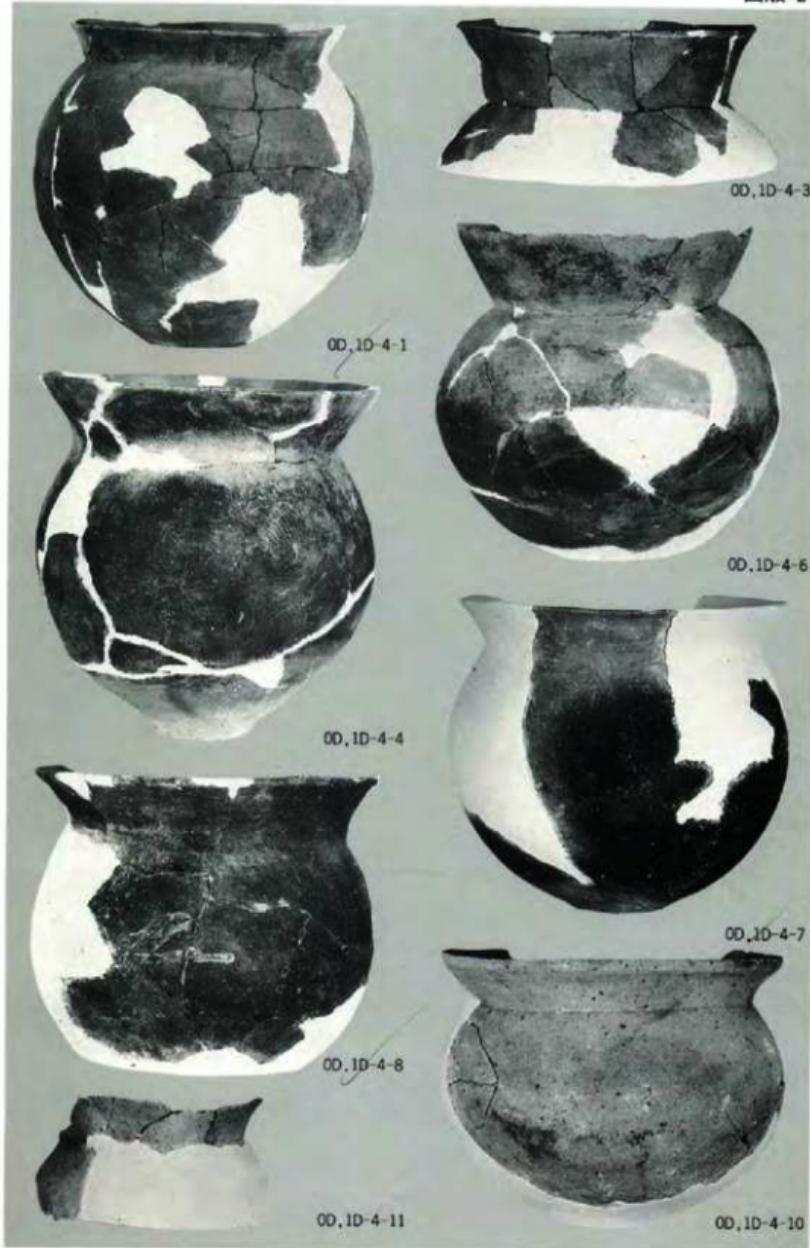


図版 21











OD, 1D-4-9



OD, 1D-4-12



OD, 1D-5-1



OD, 1D-5-2



OD, 1D-5-3



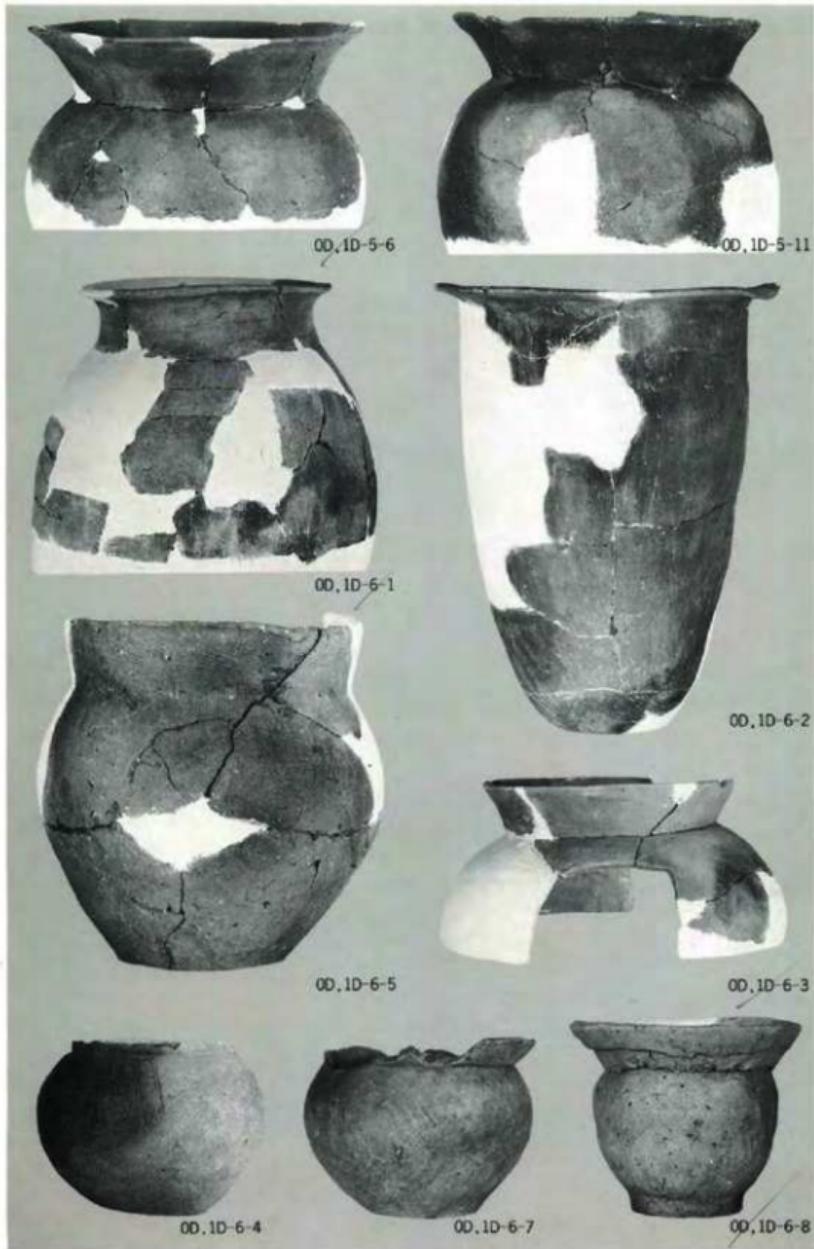
OD, 1D-5-4

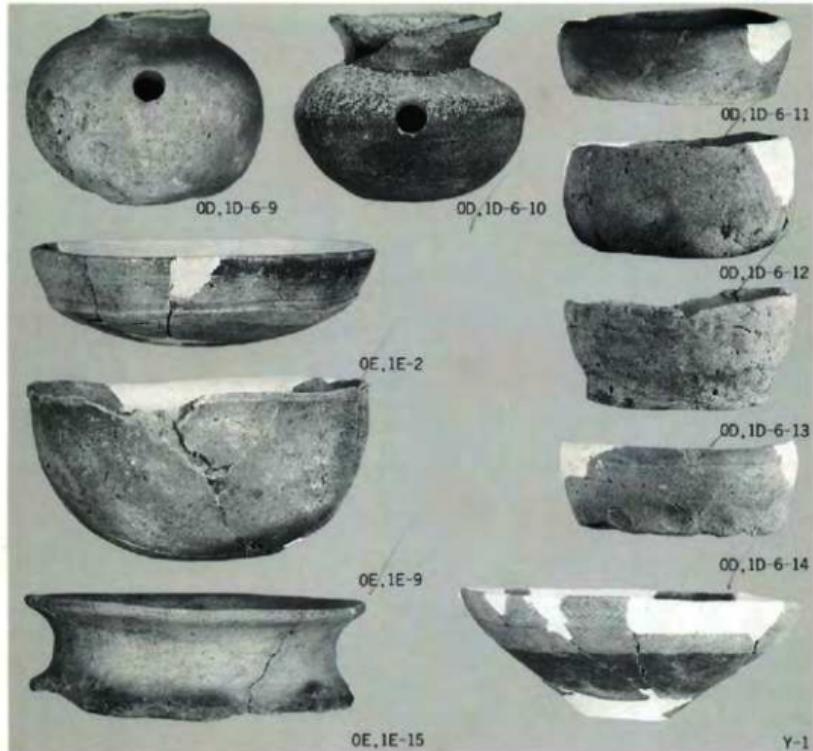


OD, 1D-5-10



OD, 1D-5-8



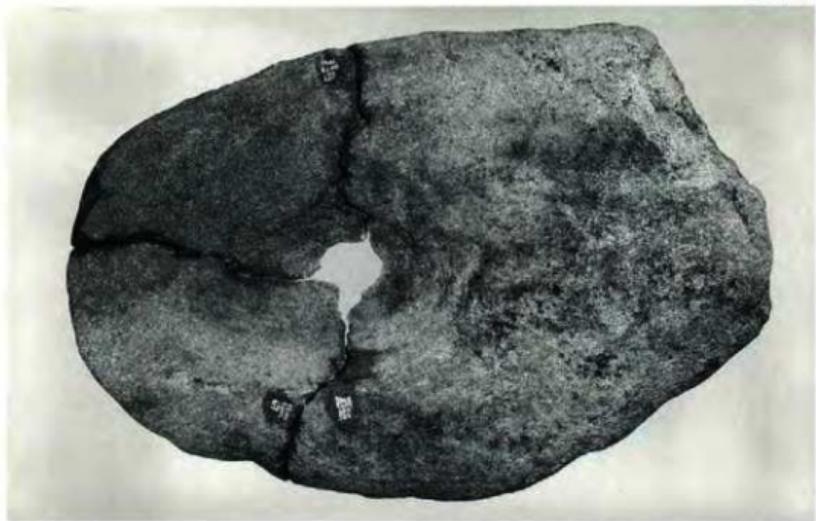




石製品 (1)



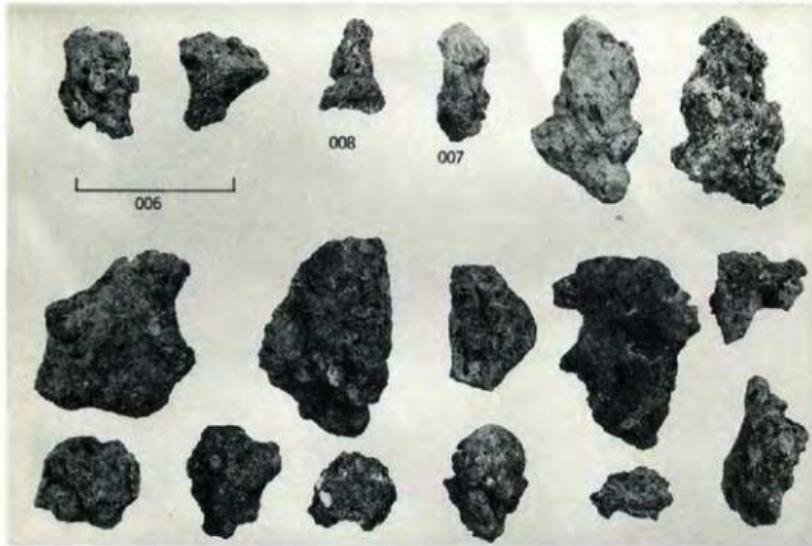
石製品 (2)



石製品 (3)

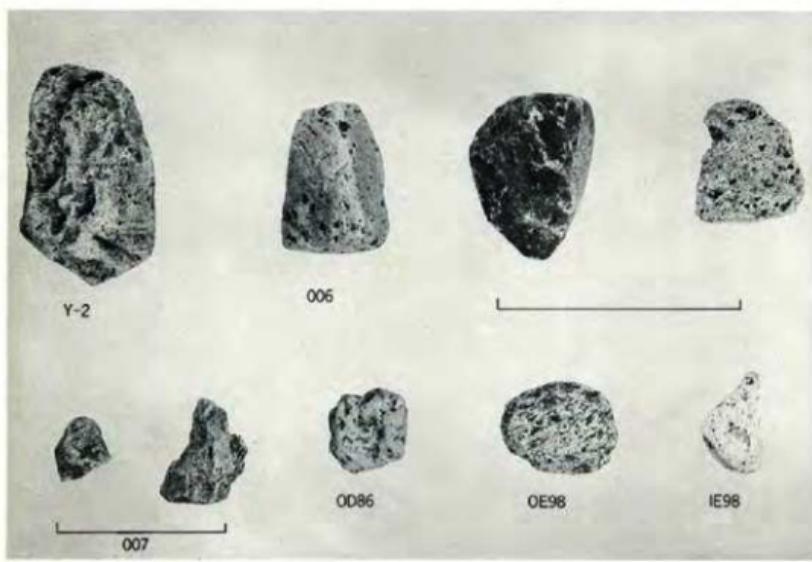


鐵製品



鉄滓

(遺構外出土分)



軽石

君津市岩出遺跡・岩出城跡

—県道長浦・上総線特殊改良第1種工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

昭和60年9月20日 印刷

昭和60年9月29日 刊行

発行 千葉県土木部

千葉市市場町1-1

編集 財團法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1

T E L 0472 (25) 6478

印刷 有限会社 正文社

千葉市都町2-5-5



君津市岩出遺跡・岩出城跡 正誤表

ページ	行	誤	正
2	17	祝先古墳郡	祝崎古墳群
13	19	008A号跡	008号跡
14	6	008A号跡	008号跡
44	13	出土物したもの	出土したもの
72	3	管条土錐	管状土錐

73ページ 表17

	厚さ		重量	
	誤	正	誤	正
第70図11	4.014	4.01	177.3	77.3
13			774.8	74.8